

穂高の宝

Explore in Hotaka



編集 安曇野市の歴史文化遺産再発見事業実行委員会

穂高の宝

安曇野市の歴史文化遺産再発見事業実行委員会

Explore in Hotaka



令和2年度文化庁 地域と共働した博物館創造活動支援事業

カバー写真
ライチョウと燕岳
(撮影 高橋広平)

穂高の宝

編集

安曇野市の歴史文化遺産再発見事業実行委員会



扉絵について 穂高川沿いのワサビ田

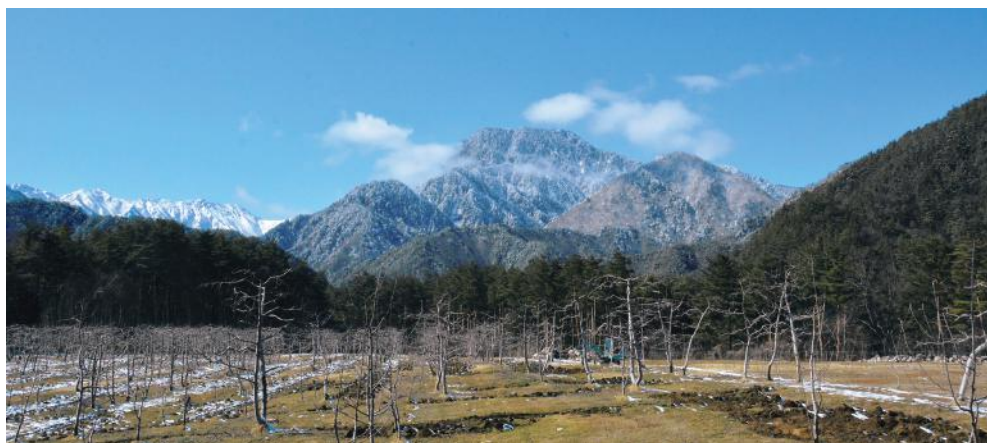
はじめに

安曇野市の歴史文化遺産再発見事業実行委員長 原 明芳

標高二九三二呎の北アルプス連峰大天井岳から、高瀬川、穂高川、犀川の三川が合流する五二〇呎まで、穂高の標高差は二四〇〇呎ほどある。その七〇呎は大自然の山岳地帯である。そこは豊かな水の水源となつて、平地の農耕地帯を潤し、わさび栽培にも活かされている。里山の広いクヌギ林で飼われる天蚕は、紡ぐ天蚕糸が「繊維のダイヤモンド」や「繊維の女王」と呼ばれるほど美しい。現在は、別荘地が広がっている。穂高は文化の香りがあふれ、ガラス工芸、絵画、陶芸、彫刻などの多彩な美術館が点在する。

里山には、一〇〇基近い古墳が造られた。そこから八面大王の伝説も生み出された。平安時代に編さんされた歴史書『日本三代実録』の貞観元年（八五九）に、宝宅神が諏訪神社（諏訪郡）や生島・足島神社（小県郡）とともに、神階を昇進させたの記事がある。宝宅は「ほたか」とよみ、歴史に穂高が登場する最初である。有明山は「安曇富士」とも称されシンボルでもある。

豊かな自然と歴史は、多くの「宝」を生み出している。ここで、紹介したのはほんの一部である。もっと身近に宝が埋もれている。多くの皆さんに、たくさんお宝を探しだして世に出していただきたい。さらに、これから多くの宝を生み出してくれる子どもたちも育っている。とても楽しみである。 令和三年三月



穂高の宝

「目次」

はじめに	3
関連地図	7
第1章 穂高をつくる自然	
1 穂高の大地の形	8
2 湧水で潤う水辺で暮らす生きものたち	12
3 湿地の生態系が息づいていた「牧の堤」	14
4 松尾寺・満願寺の春	18
5 花崗岩と水晶山	20
6 急峻な地形がつくる、有明山の自然	22
7 中房温泉と天然記念物	24
8 田淵行男、一の沢登山道	28
9 北アルプスを拓いた人々	32
10 北アルプス・燕岳とその周辺の高山	36
11 受け継がれた棚田とその景観・植生	42
第2章 掘り出された穂高の歴史	
1 他谷遺跡	44
2 離山遺跡	48
3 弥生時代の穂高地域	50
4 穂高古墳群	52

5	矢原遺跡	5
6	現在の安曇野へ続く 古代から中世	60
7	上人塚	62

第3章

中世く近世様々な地域のすがた

1	武士たちの中世安曇郡	64
2	穂高神社の祭礼	70
3	満願寺 伝説の寺を歩く	78
4	松尾寺	86
5	有明山の信仰と宮城不動	88
6	廃仏毀釈と復興する寺院	92
7	本陣等々力家	94
8	糸魚川街道と保高宿	96
9	用水堰と水田開発	100
10	重要文化財 曾根原家 有明新屋	102

第4章

穂高を彩った人物

1	礪山を巡る人々	104
2	高橋節郎	109
3	人格教育の源流 井口喜源治	112
4	松澤求策と国会開設運動	116
5	多元主義擁護の騎手 清澤冽	122

第5章 戦争の時代をめぐる

1	陸軍有明演習場 演習場から豊かな農地と観光地に	126
2	穂高・有明空襲 安曇野にも空襲があった	128
3	自由主義に生きた特攻隊員 上原良司	130
4	「鐘の鳴る丘」と主題歌「とんがり帽子」	134
5	新屋公民館	138

第6章 人々のくらし

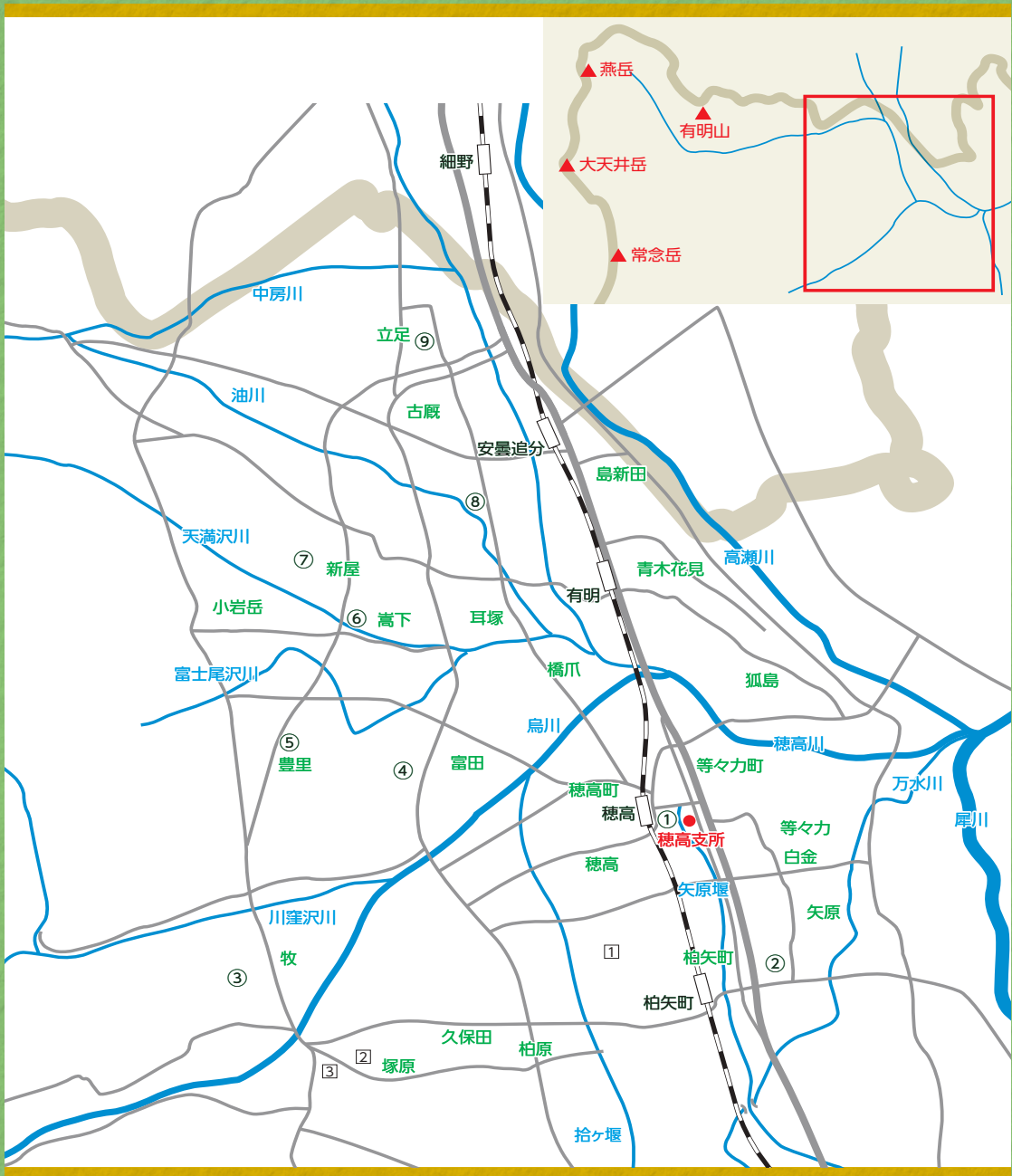
1	穂高の盆	140
2	石造物とその信仰	143
3	道祖神を祭る御柱	146
4	穂高地域のオフネ祭り	148
5	魏石鬼岩窟 八面大王の住みか？	152
6	緑に輝く繭 天蚕の今昔	154
7	安曇野名物 穂高の山葵 小金白銀 砂に湧く	160
8	鯉は祭りのごちそう	162
9	観光地穂高Ⅰ	164
10	観光地穂高Ⅱ	167
11	観光地穂高Ⅲ	170
12	学校立地は地域の一体性を図る指標	172

第7章 安曇野穂高への道のり

1	安曇野穂高への道のり	176
---	------------	-----

参考文献	181
------	-----

『穂高の宝』 関連地図



本書で紹介する主な祭り

オフネ祭り ①穂高神社 ②矢原・神明宮 ③牧・諏訪神社 ④富田・伊夜比古神社 ⑤豊里穂高神社
⑥嵩下・館宮神社 ⑦新屋・諏訪神社 ⑧古厩・大宮神社 ⑨立足・諏訪神社

御柱立て ① 柏原倉平 ② 塚原中部 ③ 塚原巾上

1 穂高の大地の形

穂高の地形

風光明媚な穂高地域は、北アルプスと呼ばれる飛驒山脈の東に位置し、標高二八〇〇メートル級の急峻な常念山脈と、麓に広がる市街地や田園地帯の景観が特徴である。穂高地域の標高最高地点は、北アルプスの前衛・常念山脈の最高峰である大天井岳の山頂で、標高二九二二メートルを誇る。ここは、安曇野市の標高最高地点でもある。常念山脈は東に高度を下げ、標高七〇〇メートル付近で、山地から盆地へ地形が変化する。急流が深い谷を刻む山地と、起伏の少ない盆地が対照的である。盆地内の地形は、常念山脈を源流とする烏川、中房川の形成する大規模な扇状地と、犀川、高瀬川周辺の氾濫原からなり、三川合流地点に向けてなだらかに傾斜する。

地下の構造

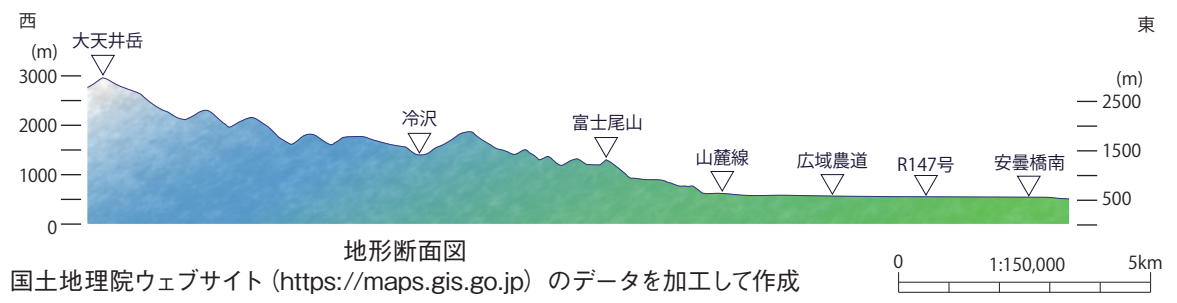
扇状地や氾濫原の地質は、河川によって運搬された未固結の砂礫層が主体的で、砂層や泥層を挟む。松本盆地全体がこうした未固結の堆積物で埋められている。砂礫の下位には、固い岩石である基盤岩の存在が推定されている。基盤岩は起伏を伴いながら、全体的には三川合流地点に向かって東または北東に傾斜し、盆地東縁で松本盆地東縁断層、小谷―中山断層などの断層に画されると考えられている。



扇状地の堆積物（穂高駅西、深さ4メートル）



穂高地域全景
(平成8年(1996))
共同測量社作成・
寄贈パネルに加工



では、基盤岩の深さはどれくらいだろうか。平成三〇年（二〇一八）に信州大学振動調査グループが、安曇野市内で地震波探査を実施した。等々力地区の水田地帯での調査では、東山に分布する地層の密度に相当する地震波速度層が、地下約六七〇ㄹで、北アルプスから連続する基盤岩の密度に相当する地震波速度層が、地下約二二〇〇ㄹ付近で現れたという結果がでている。この結果は安曇野市内でも特に深い数字で、三川合流地点で、基盤岩が特に深い凹地状になっていることを示す。

このように、松本盆地の地下は、ご飯（砂礫）を盛った茶碗（基盤岩）を傾けたような構造に例えることができる。砂礫は間隙が多く、地下水が浸透しやすいが、下位の基盤岩には浸透しにくいいため、地下水は砂礫層に貯えられる。そこに山地と盆地内の降水や河川水が間断なく流入するため、茶碗の中は常に地下水で満たされる。地下水は長い時間をかけて流れ、地表付近の河川水と混じりあいながら犀川、高瀬川、穂高川の三川合流地点で湧水となる。

穂高川と烏川

中房川と乳川が合流した穂高川と、烏川の合流地点にかかる穂高橋を渡ると、穂高川と烏川の河原の色が違ってくる。穂高川の河原は白く、烏川の河原は灰色に見える。

穂高川は、白色の花崗岩類と、花崗岩類の風化した砂が多いため、河原は白っぽく、水流は青みを帯びて見える。一方烏川では、花崗岩類に加え泥岩やホルンフェルス、チャートなど黒く灰色の堆積岩の割合が高くなるため、穂



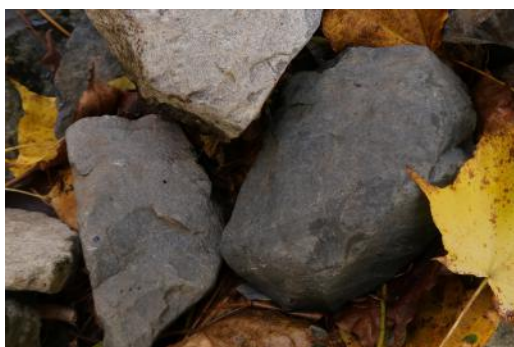
烏川（左）と穂高川（右）の合流部（穂高橋下流、東から）

高川に比べ河床が灰色味を帯び、暗く見える。こうした河原の岩石は、供給源となる上流の山地の地質を反映している。穂高川は、上流域が花崗岩地帯のため白い河原となり、烏川の上流域は花崗岩類と堆積岩が分布するため、暗い色の河原となっている。

山地の地質

穂高の山地の地質は、付加体と呼ばれる堆積岩類と、花崗岩類によって構成されている。

付加体とは、海洋プレートの沈み込みにより、海洋の堆積物が大陸側に付加され形成された岩体を指す。満願寺の



黒色の泥岩と灰色の砂岩（林道一の沢沿い）

西、浅川山一帯には、中生代に太平洋に堆積した付加体の岩石が分布していて、黒色緻密な泥岩や、灰色の黒色緻密な砂岩、ホルンフェルス、チャートなどを観察できる。この地質は堀金地域、三郷地域にも分布し、三郷地域で珪質泥岩から産出した放射虫化石は、ジュラ紀の年代を示す。



有明花崗岩（中房川）



曲り沢花崗岩（曲沢）

浅川山一帯を除く山地では、マグマが地下深部で固結し形成された岩石である花崗岩類が大部分を占める。付加体に貫入し、境界部分では付加体に熱変成を与えている。穂高地域の花崗岩は、一ノ沢花崗岩、冷沢花崗閃緑岩、曲り沢花崗岩、西股花崗岩、有明花崗岩類に分類され、有明花崗岩類が大部分を占める。有明花崗岩類は、北は白馬村の唐松岳の北方まで、西は断層に切られながら槍ヶ岳の北方まで分布する巨大な岩体をなす。有明花崗岩中の黒雲母を用いた放射性同位体の年代測定では、約六五〇〇万～六三〇〇万年前の値が得られている。この年代は、白亜紀後期～古第三紀初頭にあたる。

（横山幸子）

2 湧水で潤う水辺で暮らす生きものたち

豊富な湧き水のしくみ

安曇野市の平野部は、東西南北から流れてくる河川が運んだ厚い砂礫層（扇状地）の上に位置している。周辺の山々も含め安曇野に降った雨や雪、農業用水や河川の水はこの砂礫層にしみ込んで地下水となる。地下水は犀川、高瀬川、穂高川の合流付近（三川合流部）へ流れくだり、豊富な湧き水として地表にあらわれる。

三川合流部付近ではこうした湧水を利用してわさびの栽培が盛んにおこなわれている。幹線道路を外れて集落の中を進むと、ちょっとした谷間にもわさび畠がつくられ、安曇野らしい水辺の景観をつくっている。

水鳥に運ばれる植物

その一方で、現在は放棄されたわさび畠もみられ、そこにはヨシやオオカワヂシャなど湿地を好む植物が入り込んでいる。これが適度な隠れ場所ともなり、こうした放棄地は水鳥たちが羽を休める場所にもなっているようである。

穂高の矢原で、平成二八年（二〇一六）にススヤアカバ



わさび畠の放棄地に育つススヤアカバナ。
白毛に覆われていることは特徴のひとつ。

ナという植物が長野県ではじめて確認された。国内で最初に報告されたのは平成一四年（二〇〇二）と比較的新しい植物であり、まだ日本では生育地が少ないと思われる。いずれも耕作放棄水田などの湿った環境である。報告された生育地が渡り鳥のルート途上にあることから、渡りをする水鳥の羽に付着して散布されている可能性があると考えられている。なお、和名の由来はサハリン南部のススヤ川河口で記録されたことからつけられた。

アオサギのコロニー

三川合流部には松本平最大級のサギのコロニー（集団営巣）がある。営巣するサギはアオサギが最も多く、他にダイサギやゴイサギも見られる。そもそこのコロニーは穂高古厩にあつたものだが、営巣していた森林が伐採されたため、この場所へ移り住んだものである。三月ともなればオニグルミなどの高木の枝に大きな皿状の巣を造り、子育てする様子を観察することができる。巣の数は四〇〇ほどあるといわれ、大型のサギが餌を運んで舞い降りる姿は迫力がある。子育ての時期にはカラスが巣に侵入し、卵や雛をくわえて持ち去る様子も見られる。

三川合流部の明科側にある御宝田遊水池はコハクチョウやカモの飛来で知られるが、穂高側でも珍しい野鳥を見ることが出来る。冬鳥として飛来するクイナもそのひとつで、普段は護岸の枯草に隠れているが、周囲を警戒しながら水際を素早く走り抜ける姿がある。

（松田貴子、那須野雅好）



クイナ



アオサギのコロニー

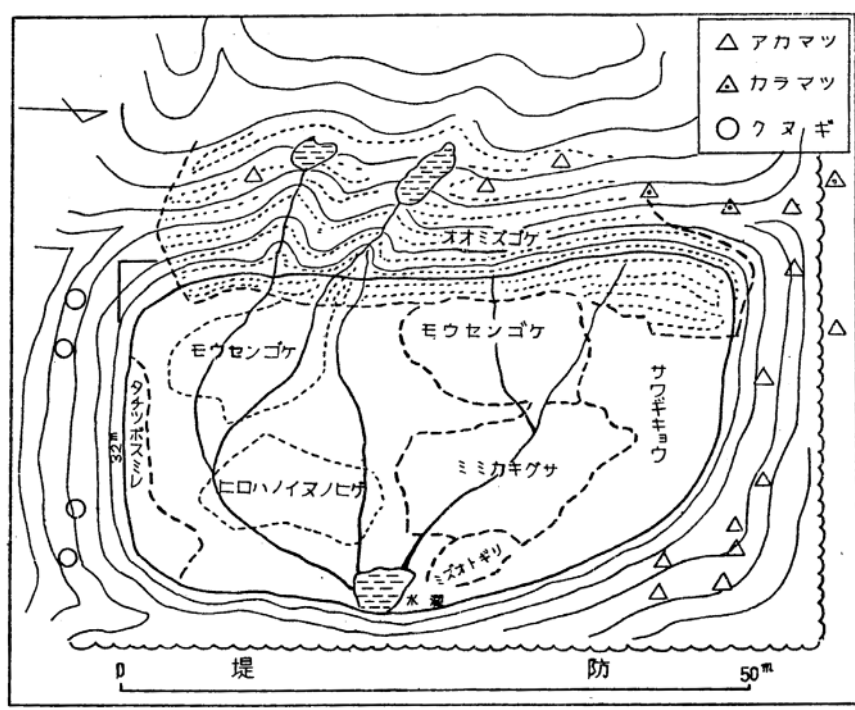
湿地の生態系が息づいていた「牧の堤」

貴重な湿生植物の宝庫だった

穂高牧地区に「牧の堤」と呼ばれるため池が二箇所あり、西側の標高の高いほうは上の堤、東側の低いほうは下の堤と呼ばれている。このうち下の堤について、過去の植生の記録が残っている。どんな植物があったのだろうか。

昭和三十一年（一九五六）に刊行された『南安曇郡誌』には「霧ヶ峰を最小限に縮小したような所で、食虫植物があり、その他の湿生植物が豊富であるのに驚く」と述べられている。ここにはモウセンゴケ、（ムラサキ）ミミカキグサ、ヤマトキシソウといった、安曇野市内では現在絶滅したか、ほとんどみることができない貴重な湿生植物が群落をつくっていたようすが記録されている。食虫植物であるモウセンゴケは湿原の約四五％も占めていた。

現在も上の堤の上流ではいくつもの流れが網の目のように広がり湿った土壌が広がっており、もともとそうした湿潤な立地だったことがうかがえる。これを利用してため池がつくられたのだろう。



牧の堤の湿生植物の分布（昭和26～27年（1951～52年））
（『南安曇郡誌 第一巻』）



下の堤のハイヌツゲーオオミズゴケ群落（昭和39年（1964））

オオミズゴケは中間湿原に広く分布する。ミズゴケの仲間は環境の変化に極めて脆弱であることから29種すべてが長野県版レッドリストの絶滅危惧Ⅰ類に選定されている。

一面にミズゴケ群落が広がっていた

その八年後、昭和三十九年（一九六四）六月にミズゴケの研究者によって、右図の山際に広がるミズゴケ植生の調査が行われた。堤は八年前よりも水量が増して水面が広がったが、明るく開けた環境のもと、ミズゴケ湿原は維持されていた。

この調査ではオオミズゴケ及びシタミズゴケが優占する群落が確認された。どちらの群落もミズゴケの植被率（一畝×一畝の調査枠を覆う植物の割合）は七五〜一〇〇割を占めており、中間湿原と呼ばれる湿原である。ミズゴケ湿原は低温・過湿の環境下で、時には数千年という長い歴史をかけて形成される貴重な植生である。調査ではミミカキグサ類は消失していたが、モウセンゴケのほかノハナシヨウブ、ザゼンソウなど湿生の植物たちが数多く確認された。

現在、護岸工事や植林によって大きく環境が変わったが、堤の周辺では湿地の痕跡をみることができる。



下の堤 北側から南部を撮影（昭和39年（1964）6月）



下の堤 南側から北部を撮影（昭和60年（1985）8月）

安曇野から姿を消したハッチョウトンボ

ハッチョウトンボは日本最小のトンボとして知られ、翅を広げた大きさ（開長）は約一〇センチで、ちょうど一円玉くらいである。ちなみに日本最大のトンボはオニヤンマで開長は一五〇センチに達する。安曇野市でハッチョウトンボの記録のあるのは牧の堤だけで安曇野市版レッドリストでは危機的水準まで減少している種として、「絶滅危惧Ⅰ類」にランクされている。平成四年（一九九二）に刊行された『穂高町誌 自然編』には「ハッチョウトンボ（失われていく自然のひとつ）」と題して、このトンボの生態がまとめられている。開発により池の生物多様性が失われていく現状を憂い「希少な食虫植物やハッチョウトンボが姿を消す」と記述している。当時、ここにはキイトンボ（安曇野市絶滅危惧Ⅱ類）も生息していた。

昭和六〇年（一九八五）八月撮影の写真には、渇水期ということもあり、ため池の一面にスゲ類とみえる植物が生育しているようすが写っている。このときはまだハッチョウトンボは健在で、雄、雌ともに低い植物の先に止まる姿が見られた。その後、堤は護岸工事がなされ、現在もため池としてその役割を果たしているが、残念ながらハッチョウトンボの姿を見ることはできない。

（松田貴子、那須野雅好）



ハッチョウトンボ♀（昭和60年（1985））



キイトンボ交尾（昭和60年（1985））



ハッチョウトンボ♂（昭和60年（1985））

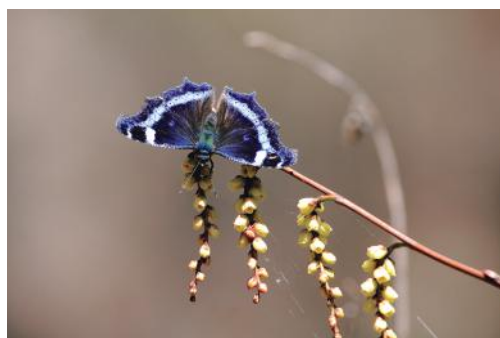
4 松尾寺・満願寺の春

早春のチョウたち



参道を飛ぶヒメギフチョウ

田淵行男（一九〇五〜八五）が牧に居を構えた後、蝶の研究に打ち込むきっかけとなったのがヒメギフチョウだったともいわれている。黄色と黒のんだら模様の小さなアゲハチョウが、林床を覆うカタクリやシヨウジョウバカマの花を求めて飛ぶ姿は美しい。田淵のヒメギフチョウの観察フィールドは主に満願寺近くの川窪沢川であった。ここから松尾寺近くの山麓では今でもヒメギフチョウの姿を見ることが出来る。四月二〇日前後が安曇野における出現日であるが、昨今



キブシの花で蜜を吸うルリタテハ

は暖冬も手伝ってか、四月四日に発生するなど出現が早まる傾向にある。ひと月ほどの間に食草のウスバサイシンの葉裏に真珠のような卵を産み付けて姿を消す。

早春の花木のキブシは、ブドウの房のような花を



境内に多いシヨウジョウバカマ

付ける。成虫で越冬したチョウたちに人気があり、シートハ、エルタテハ、アカタテハなどのタテハチョウの仲間が多く集まる。ルリタテハは光沢のある青い帯が特徴のタテハチョウであるが、成虫で冬越ししたとは思えないほど鮮やかな翅の色が残っている。

初夏の野鳥たち

ヒメギフチョウで幕を開けた山麓が初夏の装いになると、美しい夏鳥たちが姿を現す。その代表格がオオルリとキビタキであろう。オオルリの雄は目の醒めるような青い羽が、キビタキは黒地に黄色やオレンジ色が映え、いずれも人気のある野鳥たちである。ウグイス、オオルリ、コマドリは鳴き声の美しさから「日本三鳴鳥」と呼ばれるが、満願寺や松尾寺の周辺は、それら



「日本三鳴鳥」のオオルリ♂（上）と
コマドリ（下）



花立てで水を飲むヤマガラ

サンショウクイ♂

すべてに出会える可能性のある観察ポイントなのである。また、同じ時期にやって来るサンショウクイも会いたい鳥である。「ピリッ、ピリッ」という声が山椒の味を連想させることからその名が付いたといわれる。

松尾寺の墓地で興味深い光景を見たので紹介したい。一羽のヤマガラが墓石や石灯籠の間を飛び回っていたが、花立ての縁に止まったかと思うと水を飲み始めた。ここは秘密の水場だったのである。ヤマガラは「おみくじ」を引く芸などでも知られる人懐こい野鳥である。人工物もうまく利用しながら暮らしている様子が見える。

（那須野雅好）

5 花崗岩と水晶山

水晶の山

安曇野から西山を眺めると、富士尾山の南の山肌に、白い崖を見つけることができる。実際に登ってみると、尾根上にざらざらした砂が広がり、風化した花崗岩が顔を出している。この岩肌の周辺の山地は、通称「水晶山」と呼ばれている。水晶とは、大きく成長した石英の結晶の一般的な呼称である。富士尾山、水晶山、離山の一帯は、水晶の産地である。

有明花崗岩

穂高の山地は、満願寺西側の浅川山周辺を除き、ほぼ全域に花崗岩が分布している。花崗岩は地下深部でマグマが徐々に冷却されて形成された岩石である。穂高地域の山地の大部分を占める粗粒な花崗岩は、有明山の名をとって有明花崗岩と呼ばれる。有明花崗岩は、鉱物が粗粒な岩相が主体的である。平べったくツヤのある黒雲母、黒い柱状の角閃石、透明感のある石英、白い斜長石、桃色のカリ長石などで構成される。河原で風化していない小石を観察する



風化した花崗岩が露出した水晶山の尾根

と、結晶面が光を反射してきらめく。

水晶を産する水晶山一帯では、粗粒な主岩相とは異なり、細粒な結晶の岩相を示す。麓から見える白い崖もこの細粒な花崗岩と、花崗岩中の鉱物が風化しばらばらになった砂である。この細粒な有明花崗岩の中の小さな隙間に、石英、長石、黒雲母などの結晶が大きく成長することがある。

子どもたちと水晶

水晶は、岩体の風化、崩落によって、周辺の花崗岩とともに土砂として麓に流れ出す。現在、水晶山周辺で水晶を見つけることは難しいが、かつては美しい水晶の集合体も発見されたという。昭和の頃には山の斜面を少し掘れば水晶の塊を見つけることもできたようだ。

牧で育ったある男性は、子どもの頃、離山でよく水晶を探したという。立派な水晶を手に入れると、学校で仲間たちに披露し、交換しあっていた。兄弟の拾った見事な水晶の塊から、六角柱状の結晶を、こっそり打ち欠いて持ち出したこともあるらしい。水晶は、子どもたちの宝物だった。

(横山幸子)



粗粒な有明花崗岩 濡らすと観察しやすい



成長した鉱物(富士尾山産)



実寸大

黒水晶(離山産)

6 急峻な地形がつくる、有明山の自然

有明花崗岩

穂高の里から西をみると、ひととき目立つ有明山。その雄々しくも端正さを感じる山形から、『信濃富士』とも呼ばれる。前項の「花崗岩と水晶山」で述べたように、有明山をはじめ穂高の中へ北部の山地は主に花崗岩で形成され、その名も「有明花崗岩」と名付けられている。この有明花崗岩によって、ごつごつした急峻な地形がつくられたのである。

見事なサワラ林

県道中房線を中房川に沿って上っていくと、有明山から流れくだる黒川沢と合流する。この黒川沢に沿って「表山」と呼ばれる有明山への登山道が整備されている。これを登っていくと、ガラガラした岩礫の多い斜面に成立している見事なサワラ林をみることができる。現在、有明山は国有林となっているが、それ以前には里山として利用され、サワラの材を伐り出し



登山道沿いのサワラ

ていたという。サワラは根元から二〜三メートルの位置で多数枝に分かれし、枝分かれした部分が肥大化しているようすが観察できる。いわゆる『あがりこサワラ』と呼ばれる樹形である。この樹形は雪上伐採した後に萌芽した枝を育成し、

伐採を繰り返すと形成されることが知られている。なかには直径一桁近い大きさの巨木もあり、迫力がある。

安曇野市の西の標高一〇〇〇〜一五〇〇㍎付近、沢沿いで湿気があり、苔むした岩礫が重なり表土がほとんど形成されていないような斜面では、このようなサワラの自然林が分布している。この植生にみられる特徴的な植物にフジシダやホンシヤクナゲがある。いずれもサワラ同様、独特の厳しい環境で生きる植物たちである。

妙見滝、白河滝

有明山登山道沿いには、妙見滝、白河滝という二つの見事な滝があり、登山の見どころのひとつとなっている。滝の周辺は開けた空間となっており、妙見滝ではヨツバヒヨドリ、シモツケソウ、ヤマブキシユウマ、ミヤマカラマツなどの明るい環境を好む草本植物が多くみられる。白河滝から山頂まではかなり急登となり、登山には注意を要する。

山頂は三つのピーク

有明山は北岳、中岳、南岳と三つのピーク



白河滝

をもつ。北岳が最も高く、標高二二六八㍎。まだ高山帯には達しておらず、チョウセンゴヨウ、コメツガ、カラマツといった樹木がみられるが、強風や積雪のために樹高が低い。

修験の山として知られていた有明山。それを裏付けるような、北アルプスとはまた違う風格をもつ自然が魅力である。

(松田貴子)

7 中房温泉と天然記念物

中房温泉の場所

中房温泉は安曇野市の北西の穂高有明の山中に位置する。北側から東側には常念山脈から松本盆地へ尾根が伸びており、中房温泉の東側には標高二二六八㍎の有明山が見える。西側には北アルプスの常念山脈が走っており、中房温泉の北西側には標高二七六三㍎の燕岳がそびえたつ。また、温泉施設の南側には合戦沢を挟んで中房・燕岳登山口があり、ここが北アルプスへの玄関口となっている。

周囲の地質

中房温泉は有明花崗岩からなる急峻な地形に囲まれている。一般に有明花崗岩は非常に堅く緻密である。周辺の花崗岩中には北東―南西走行で北西に傾斜する断層と、北西―南東走行で南西に傾斜する断層が存在する。これら断層は破碎が進んでおり、周囲の花崗岩中には断層活動による亀裂も発達している。中房温泉の湧出口は北東―南西方向に推定される断層に沿って並んでおり、信濃坂断層に関連する断層破碎帯や亀裂を通り湧き出していると考えられる。

加えて花崗岩の風化（マサ化）が進んでおり、もろく崩壊しやすい。そのため中房温泉の近くを流れる合戦沢の上流には崩壊地が発達している。ここは土石流対策のため、砂防堰堤などが建設されている。

温泉施設自体は人工的に造成された地盤の上に建っており、付近は合戦沢の扇状地堆積物からなる傾斜地である。また、周囲の堆積物は土石流堆積物、崖錐および古期崩壊堆積物、温泉堆積物、新期崩壊堆積物、現河床堆積物から構成される。

温泉の湧出機構と泉質

温泉は北部および西部山地斜面・山麓部にある花崗岩の破碎帯から直接湧出するものと、中房川の河床および右岸山際の河成堆積砂礫中から湧出する。合戦の湯や大弾正^{だいでんしょう}における湧出は前者に当てはまるものであり、九三度から九四度の高温である。中房温泉付近の標高は、一五〇〇㍎前後であるため、水の沸点は九五度〜九六度であり、ほぼ沸騰した状態で湧き出していることになる。これは中房温



大弾正

泉の特徴のひとつであり、同じ信濃坂断層上の源泉を利用している安曇野市堀金烏川の入浴・宿泊施設「ほりでーゆ（四季の里）」や同三郷小倉の「ファインビュー室山」がボーリングにより地下深くから低温の温泉水をくみ上げていることとは対照的である。泉質はほとんどが単純硫黄温泉またはアルカリ性単純温泉である。また、焼山付近一帯は常に微弱な水蒸気を含んだ噴気が盛んな地域であり、最高で九四度に達する。周囲にはミョウバンやイオウなどの噴気生成物が分布している。また、熱帯および亜熱帯に分布するミズギが温泉の熱により生育していることなど、特徴的な周囲の植生も注目すべき点である。

膠状珪酸および珪華

まず膠状珪酸^{けうじょうけいさん}とは、温泉湧出口付近に形成される好熱性微生物のバイオマット（コロニー）と温泉水中の珪酸成分がつくり出す、独特なゼリー状の形状を呈するものである。

「中房温泉の膠状珪酸および珪華^{けいか}」は昭和三年（一九二八）一〇月四日に国の天然記念物に指定されており、膠状珪酸という呼称は現在学問的には使われていないが、歴史的な呼称を尊重するという観点から、平成二二年（二〇一〇）二月二二日の指定地域一部解除後も引き続き用いられている。平成二三年（二〇一一）三月三十一日刊行の『天然記念

物 中房温泉の膠状珪酸および珪華保存管理計画』（以下、保存計画）に係る調査によると、膠状珪酸は従属栄養細菌、化学合成細菌、シアノバクテリア、光合成細菌などの多様な好熱性の原核生物の集合体であるバイオマットと、それに吸着する温泉水中の珪酸成分からなるものであることが明らかになっている。

次に珪華とは、温泉水に多量に含まれている珪酸成分が、湧出後の温度低下によって析出し、堆積したものである。



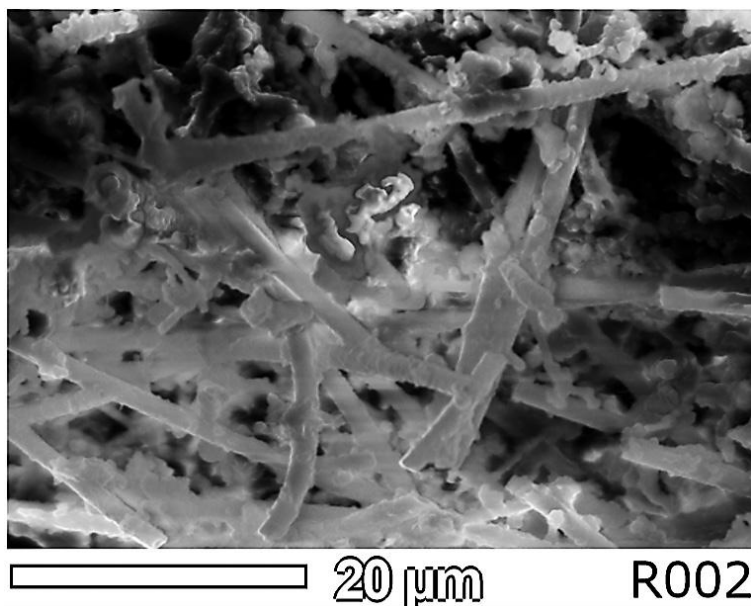
大弾正で見られる微生物のバイオマット

色は白色ないし灰色を呈し、一般に著しく多孔質である。中房温泉の珪華は層状に重なる堆積物と、熱水により変質した花崗岩の表面上に生じる皮膜状の主に二つに分けられる。後者は噴気地帯や湧出口付近に限って見出される。温泉水の付着した花崗岩表面におい

て、温度低下と水の蒸発によって珪華が析出し、皮膜を形成したものと推定されている。対して、層状の珪華は主に標高一四六五メートルから一五〇〇メートルの範囲で「滝ノ湯」の斜面や「大弾正」及び「薬師の湯」から高度差一〇～一五メートルの斜面に分布している。内部は不均質で、珪化した植物遺体を多量に含み、花崗岩などの岩片が含まれることがある。また、「白滝の湯」下流側には、花崗岩を覆う厚さ一メートル以上



「白滝の湯」付近の珪華。
珪華の塊に葉の印象化石が見られる。



珪華を拡大したもの。微生物コロニーにシリカの球状体が付着している。
(1μm (マイクロメートル) = 1/1000mm)

の珪華の露頭が存在する。さらに、保存計画に係る地質調査によると、温泉の家屋下にも部分的に厚さ約二層に及ぶ珪華の存在が予想されている。これらの珪華は微生物のコロニーにシリカの球状体が付着沈殿することによって形成されたと考えられている。多様な微生物がシリカの沈殿にどのような影響を及ぼしているかは今後検討する必要がある。

温泉と明礬採掘

中房温泉の歴史は温泉と明礬採掘^{みょうばん}鉱山の二つの側面から成るものである。記録では享保九年（一七二四）に松本藩が編纂した地誌『信府統記』の中に出てくるものが初出である。当時はすでに地元の人々に知られ、利用されていたようである。代々温泉経営に関わってきた百瀬家の文書（以下、百瀬家文書）によれば、弘化三年（一八四六）には温泉株の譲渡が行われたとあり、温泉業はこの年から始まったと考えられる。明礬採掘については「百瀬家文書」にある文政一二年（一八二九）が最も古い記録である。保存計画に係る調査では、噴気帯で白色と黄褐色の噴気生成物が認められており、前者はタマルガル石、後者はソーダ鉄ミョウバン石と鉄を含むミョウバン石であり、これまでミョウバンとされていたものの大部分がタマルガル石であることが明らかになった。採掘自体は「臨検調書」の中に明治四年（一八七一）に休止との記録があるが、国内でも三ヶ所のタマルガル石産出例であり、今後の研究次第ではさらに新たな鉱物等の発見に結び付く可能性がある。

（高山裕司）

8 田淵行男、一の沢登山道

「蝶の道」と名づけた登山道

田淵行男は、現在の安曇野市穂高牧地区に疎開したのを契機に高山チョウの生態解明に心血を注いだ。その主な拠点は常念岳で、生涯で二〇六回の常念山行を果たしている。

牧と常念岳を結ぶのが一の沢登山道である。田淵はここを「蝶の道」と呼んで、道中の道草を楽しんだ。『山の絵本 安曇野の蝶』（一九八三）には次の一文が載っているが、一

の沢登山道と出会ったチョウたちへの思いがよく表れている。

常念山脈に源を発した烏川が安曇野にくりひろげた巨大な扇状の大地なだらかな砂礫の丘落葉松の疎林と桑畠に囲まれた牧の寓居を一步踏み出すと

そこから始まる華麗な蝶の道

次から次へと 色とりどりの蝶に出迎えられ見送られて心も弾む常念一ノ沢 朝の道 装いを競い 模様をこらして蝶の飾る希望の夏山 蝶の道（後略）

現在、「蝶の道」はどうなっているのだろう。登山口にあたるヒエ平まではすでに舗装されていて、田淵のように麓から歩いて登る者はほとんどいない。林道が未舗装であった頃は、道中の所どころに沢水の染み出しているところがあり、群れて吸水するチョウたちで賑わっていた。この中には高山蝶のオオイチモンジも含まれていたという（田淵談）。



一の沢登山口近くにある山の神



高山蝶オオイチモンジの吸水集団（上高地）

河川環境であろう。七月中旬ともなれば高山や山地の草花が咲き乱れ美しい。こうした花の間を縫って、クモマベニヒカゲ、ベニヒカゲ、タカネキマダラセセリなどの高山チョウの飛ぶ姿を見ることができ。「蝶の道」の面目躍如といったところだろう。また、数は少ないがクモツマキチョウも忘れてはならない存在である。五月下旬から七月上旬にかけて、残雪の山を背景に橙色の翅先をはためかせて飛ぶ姿は美しい。田淵はこのチョウを初めて採集したときの興奮を著書の中



マルバダケブキで蜜を吸うクモマベニヒカゲ

前頁下段の写真は上高地の林道で吸水するオオイチモンジの集団である。昔の一の沢ではこんな光景が見られたに違いない。林道の多くが舗装化されている今日、チョウたちの吸水環境は寂れる一方である。一の沢で「蝶の道」の面影を残すのは、

胸突八丁手前の



タカネキマダラセセリ

で紹介している。危険な沢をつめている最中の出来事であり、「その折の早業を順序だてて説明できない。無我夢中の執念が思いもかけぬ超能力を発揮したのだろう」と当時を振り返っている。



アザミで蜜を吸うベニヒカゲ



クモツマキチョウ

胸突八丁の植生

さて、チヨウたちでにぎわう胸突八丁周辺の植生を見てみよう。一の沢沿いに登山道を上っていくと、標高二〇〇〇㍍あたりで急に視界が開いてくる。沢のすぐ脇の道ををさらに上ると、沢沿いの右手斜面には色とりどりの花たちが姿をあらわす。ここでは一の沢に沿って急傾斜の谷地形が形成されている。特に南東向きの斜面は、西ノ北西の風が吹くことから雪の吹き溜まりができやすく雪崩が発生しやすいといわれる。また崩壊しやすい地質ということもあり、一帯の斜面は樹林が成立しにくい環境となっている。

時には大規模な崩壊もみられ、登山者は植生ごと崩れ去った斜面を横にみながら、崩れ落ちた岩礫の上を息を切らして登ることになる。自然のダイナミズムを肌で感じる場面でもある。



令和2年（2020）にみられた大規模な崩落。
樹木も根こそぎ崩落している。



このような斜面に生育できる樹木は、雪崩の強い圧力に負けずしなやかに適応できるダケカンバなど限られた樹種だけで、高茎草原こうけいそうげんが広い範囲を占める。いわゆるお花畑である。

草原には多様な高山植物が生育している。特に七月から八月にかけて、開花は盛りを迎える。七月はニッコウキスゲやクルマユリ、オオバギボウシ、ミヤマカラマツが咲き、八月になるとシモツケソウやソバナ、センジュガンピ、チョウジギクなど、季節の移り変わりとともに華やかに咲きつづく。このお花畑は一の沢登山道において、グリーンシーズンの見どころのひとつとなっている。

（那須野雅好、松田貴子）

9 北アルプスを拓いた人々

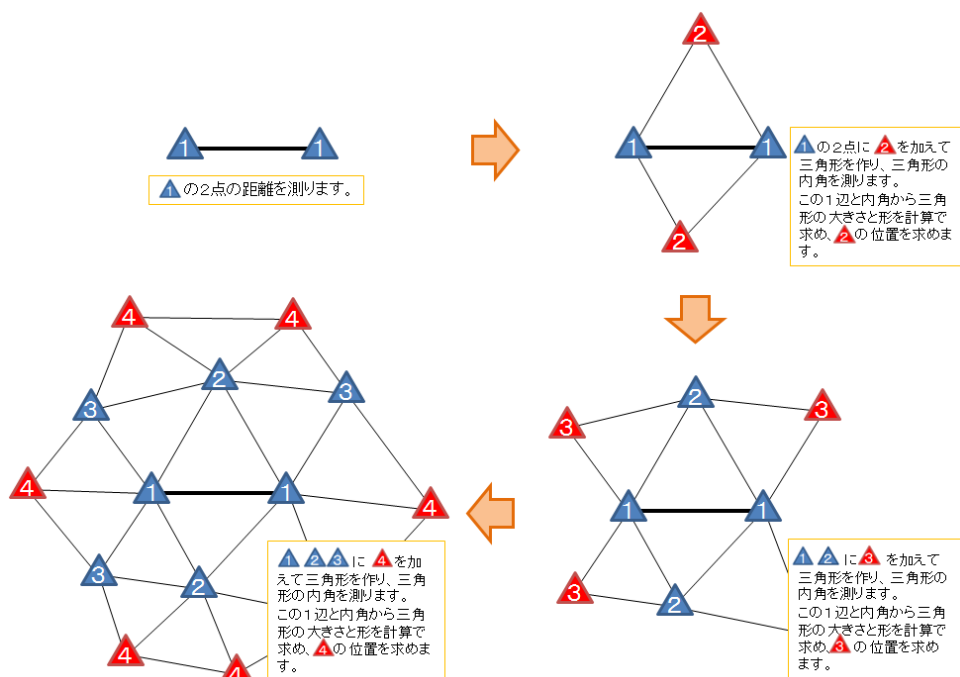
明治期の測量登山

正確な地図が無い時代の登山は、大変困難であった。そのため「探検登山時代」と呼ばれている。明治中期から陸軍参謀本部陸地測量部は、五万分の一の地形図作成のため、測量登山を全国の山々で行なった。

明治四〇年（一九〇七）、測量官・柴崎芳太郎による剷岳の四等三角点選点の際、山岳会の小島烏水らと激しい初登頂争いが繰り広げられた。このことを題材にした新田次郎の小説『剷岳点の記』（一九七七年）が平成二一年（二〇〇九）に映画化され、測量登山の様子が広く知られるようになった。

三角測量の最初は、測量に適した場所を探すことから始まる。遠くが見通せて、相手からもよく見えて、安全に仕事ができなくてはならない。したがって、必ずしも山の最高地点とは限らない。

一等三角点の選点はその十数年前（一八九三〜九四）、白馬岳、前穂高岳、前常念岳などで行われ、二等三角点の選点は明治三五年（一九〇二）燕岳や槍ヶ岳などで行われた。山本茂実の『喜作新道』（一九七一）によると、槍ヶ岳の二



三角点の測量

三角形の網を作り、三角形の各点の位置を求めていくのが三角測量です。

出典：国土地理院ウェブサイト (<https://www.gsi.go.jp/sokuchikijun/sankaku-survey.html>)

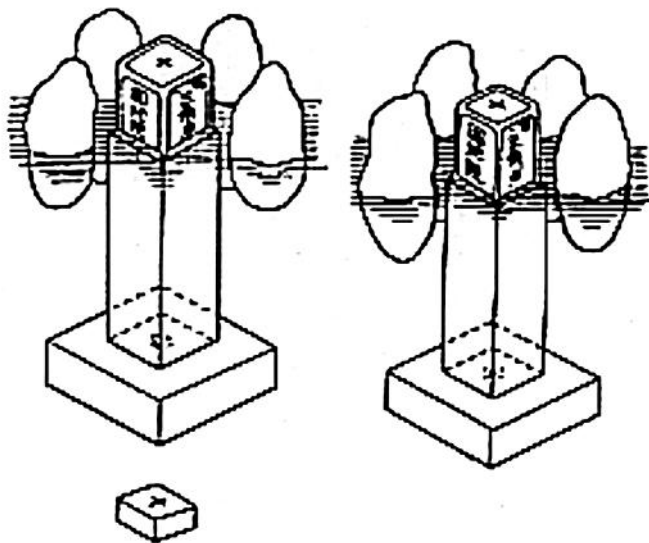


安曇野市最高標高地点、大天井岳（標高2,922m）の三等三角点の標石。明治39年に設置されたもの。

等三角点造標には、カモシカ猟の名人であった穂高牧の小
林喜作が参加し、数十詰以上ある御影石の標石を槍ヶ岳山
頂まで運んだと記されている。

安曇野市の最高標高地点の大天井岳に三等三角点の選点
が行われたのは、明治三十九年（一九〇六）で、同じ年に小
島烏水も常念山脈の縦走（燕岳―蝶ヶ岳）を行っている。
途中大天井岳と常念岳を目指したのは、当時槍ヶ岳より高
い標高をもつと信じられていたからだという。小島烏水の
著作には、「泊まったのは、二の俣の小舎」で、「荒削りの
石の塊に挟まれていて、その塊を土台として、蒲鉾形の蓆
小舎が出来ている」と記されている。この石室は元々猟師

らが使っていたもので、大天井岳の三等三角点の選点の際
は測量官たちがこれに手を入れて使用した。陸地測量部は、
大正二年（一九一三）までに飛騨山脈の地形図に関わる図
幅の大半を刊行した。探検登山時代は幕を閉じ、精度の高
い地形図は安全な登山に大きな役割を果たすようになって
いった。



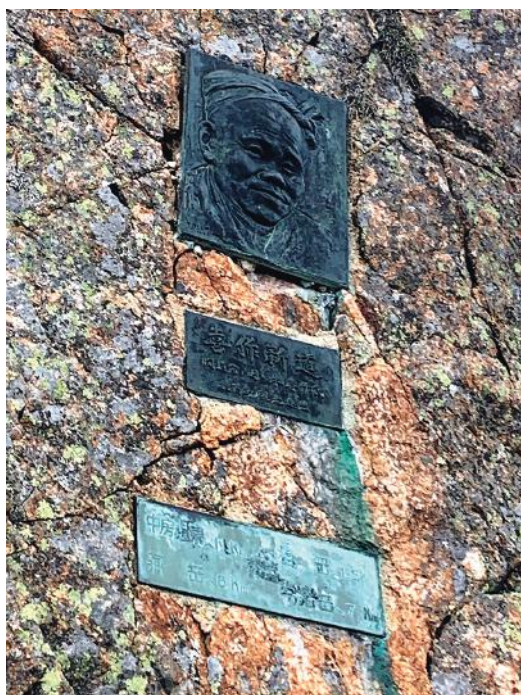
標石の構造

上部から順に、柱石、盤石、下方盤石があり、平地部などには4つの防護石も
あります。盤石と下方盤石は、もしものために復元できるように設置したもの
で、それぞれの中心線が一致しています。ただし、高山地などでは下方盤石が
ないものもあります。

出典：国土地理院ウェブサイト (<https://www.gsi.go.jp/MUSEUM/TOKUBE/KIKA5-sanka6.htm>)

大正期に急ピッチで進められた登山環境の整備

大正四年（一九一五）六月、焼岳が大爆発して大正池が出来たことで、上高地が一躍注目を集めた。また翌五年（一九一六）七月の信濃鉄道（現大糸線）の松本～大町間全通開通によって、北アルプスへの関心はさらに高まった。北アルプス南部では、その後の五、六年の間に、登山道、小屋の整備、山案内人の組織化など、登山の環境整備が急ピッチに進められた。大正七年（一九一八）、有明口登山案内人組合（現有明登山案内人組合）が発足、翌年には烏川口案内者組合（現常念口登山案内人組合）が発足した。中



小林喜作のレリーフは彫刻家小川大系の作で、昭和47年10月15日に大天井岳の新道分岐点近くに設置された。

房温泉七代目経営者の百瀬彦一郎が小林喜作に依頼し、大正九年（一九二〇）に完成した大天井岳頂上直下の分岐点から、赤岩東鎌尾根伝いに槍ヶ岳に至る新道によって、有明駅から馬車や徒歩で中房と燕岳を経由し、槍ヶ岳へ至る道のはおよそ半分に短縮された。その後はほとんど高度を落とさず槍ヶ岳まで到達できるようになり、登山者にとって大きな助けになった。この新コースは小林喜作を「山の先輩」と呼び慕っていた画家の吉田博によって、喜作新道と名付けられ、北アルプス屈指の人気コースとして定着していった。

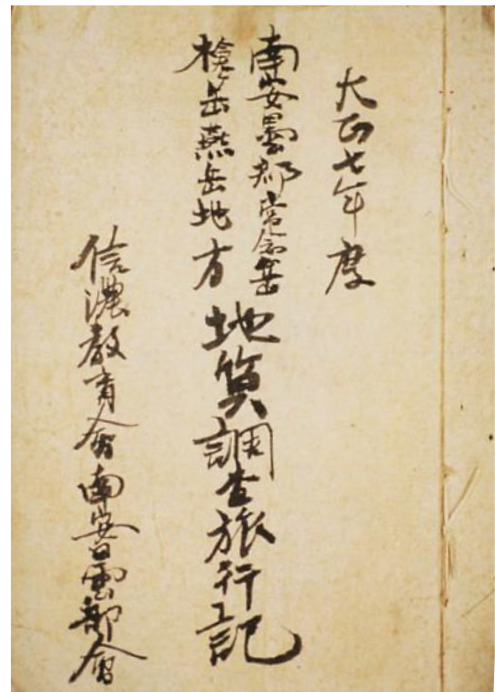
教育界も北アルプスに着目、学校登山に発展

大正六年（一九一七）、信濃教育会の支会、南安曇部会（現安曇野市教育会）は、豊科出身の実業家・丸山盛一（豊科出身）からの寄付金六〇〇円を基に、二ノ俣と槍沢に石室の整備を行った。南安曇部会はこの石室を利用して、同年から大正九年（一九二〇）までの間、北アルプス一帯の地質調査を行い、さらに大正七年（一九一八）から大正十年（一九二一）までの間、動植物調査を行った。その成果は『南安曇郡誌』（一九二三）にまとめられ、調査を実施した教育者達が生徒を自ら引率し、学校登山という実践的な教育に発展させた。文書館所蔵の「大正一四年度西穂高尋

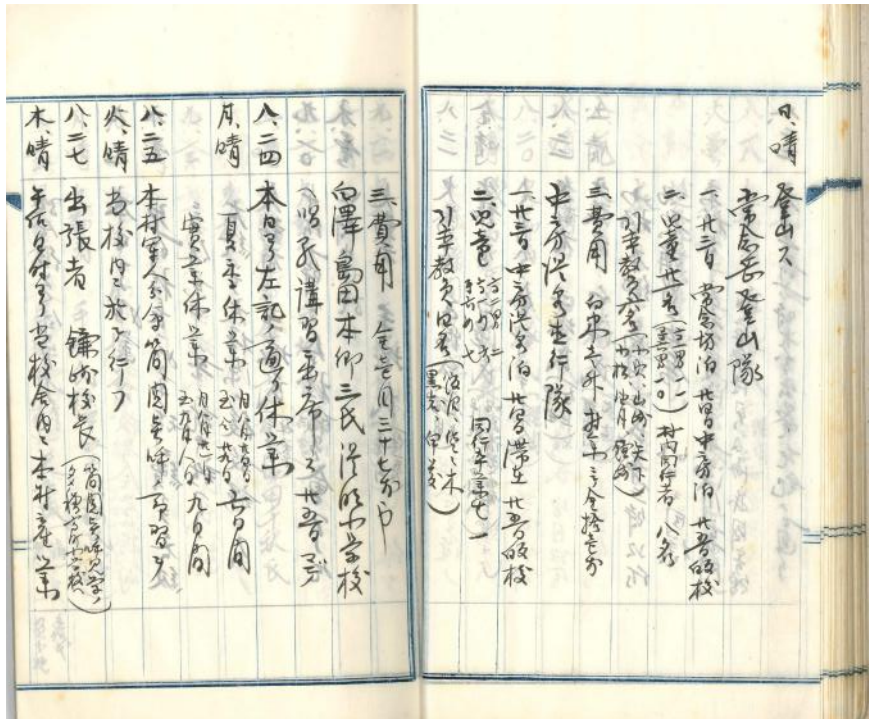
常高等小学校学校日誌」には、常念岳への集団登山（八月二三日～二四日 児童二十一人、教員六人、村内同行者八人）の記録が残っている。

地形図の発行、山案内人組合の発足、相次ぐ新道や山小屋の開設、学校登山の実施など、登山をめぐる環境が整備されたことで、登山者数が増加し、いわゆる「大正登山ブーム」が到来した。

（財津達弥）



信濃教育会南安曇部会発行
「大正七年度南安曇郡常念岳槍ヶ岳燕岳地方地質調査旅行記」（安曇野市教育会蔵）



「大正十四年度西穂高尋常高等小学校日誌」
（安曇野市文書館蔵）

北アルプス・燕岳とその周辺の高山

燕岳／常念乗越の岩石

合戦尾根を登りきり、燕山荘から燕岳山頂へ向かうと、「イルカ岩」「メガネ岩」など、奇岩が次々と現れる。稜線には、灰色の冷沢花崗閃緑岩が分布し、一部に暗色の貫入岩が観察できる。斜面には花崗閃緑岩の風化した砂礫が広がり、コマクサの群生地となっている。

燕山荘から大天井岳に向かう縦走路では、桃色／白色の有明花崗岩類が現れる。有明花崗岩類は、加藤碩一氏により構成鉱物の量比や粒形などからA・B・C型に分類されており、燕山荘から大天井岳までは、粗粒な有明B型花崗岩が主体となる。大天井岳山頂はB型よりやや細粒な有明A型花崗岩が広がる。

大天井岳の南の、常念乗越にかけての稜線では、灰色中粒の西股花崗岩が露出する。この区間では、稜線の西側の斜面がなだらかで、東側が急崖となっている非対称な地形が明瞭である。西の日本海側から吹き付ける強烈な風により、雪が積もらず、岩石が凍結と融解を繰り返すことで、砂礫化し、なだらかな斜面が形成されたと考えられている。

北アルプスの隆起と浸食

花崗岩は、地下数^{km}でマグマが徐々に冷えてできる。燕岳から常念乗越までの縦走路でみられる岩石は、地下深くから現在の標高まで隆起し、稜線に姿を現している。

常念山脈の花崗岩類が地下で生まれた頃、まだ日本列島は大陸の一部で、日本海も存在していない。日本列島は大陸から離れ、おおよそ現在のような形になったのは、約一五〇〇万年前と推定されている。さらに約三五〇〇～三〇〇万年前に北アルプスは隆起を開始し、約一六〇万年前にはすでに常念山脈は二〇〇〇^m程度の標高となっていたと考えられている。現在でも、北アルプスは年に数^{ミリメートル}隆起している。

一方で、北アルプスは氷河時代には氷河による浸食を受けている。槍穂高連峰の涸沢カールなどが有名だが、東天井岳から常念岳への稜線の西側斜面でもカールが確認されている。氷河期が終了し、現在に至っても、北アルプスは強烈な風雨や雪などにより風化・浸食を受け続けている。地下深くで生まれた岩石を持ち上げ、さらに削り取ってしまいう自然の力が働いている。



非対称山稜（北から）



燕岳のメガネ岩



常念乗越付近の西股花崗岩



大天井岳の岩屑



大天井岳 (2922m)

低温や強風、乾燥にさらされる高山

人間の影響を受けずに、その立地の環境のもとに成立する植生のことを「自然植生」という。安曇野市における代表的な自然植生のひとつが、北アルプス、およそ標高二五〇〇メートル以上に広がる高山帯の植生である。高山植物ははるか昔に繰り返された氷期が去り、気候が温暖になる中で高山に登って、生き残った植物たちである。

低温、強風や乾燥にさらされる非常に過酷な環境のために、樹高の高い森林は成立できず、逆にこの環境にこそ適応したさまざまな高山植物の植生がみられる。

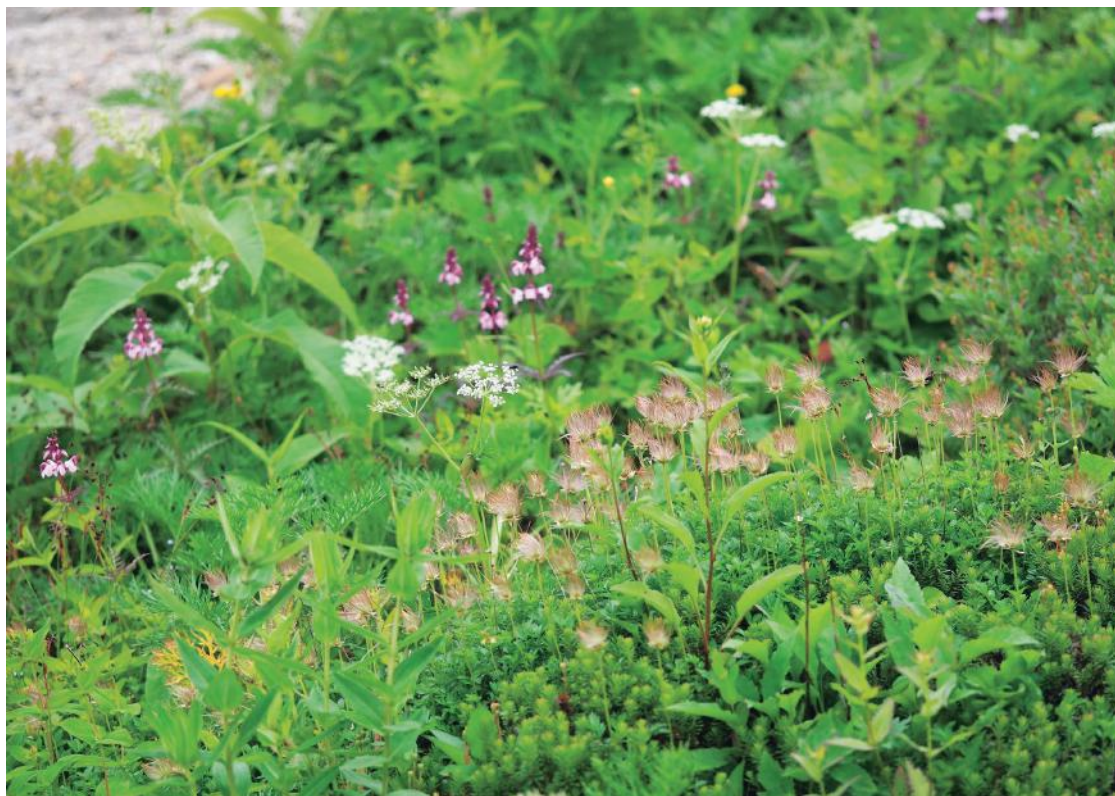
燕岳と北燕岳の植物

地元中学校の登山の山としても知られる燕岳は、中房温泉の登山口からおよそ六つの道のりである。コマツガやオシラビソの針葉樹林帯をのぼっていくと、標高二四五〇メートルあたりからハイマツがあらわれはじめ、ダケカンバの樹高が低くなり、視界が広がっていく。いよいよ尾根にたどり着くと、白い花崗岩が織りなす美しい眺望が登山者を迎えてくれる。

燕岳周辺はコマクサの群生地としても知られる。コマクサは尾根に近い斜面で、砂質の風化した花崗岩が広がる立



花崗岩の砂礫地に群落をつくるコマクサ



北燕岳の東斜面では多様な高山植物がみられる（写真はチングルマ、ヨツバシオガマ、ハクサンボウフウなど）

地に群落をつくっている。こうした砂礫地は「風衝斜面」と呼ばれ強風にさらされるとともに、凍結・融解などの作用で砂礫が絶えず動く環境にある。このためコマクサのように根を深く広く張り、乾燥に強い植物しか生きることができないのである。

また北燕岳の東斜面は吹き溜まりによる雪田（遅くまで雪が残るところ）がみられる。雪田周辺は雪の残り具合や土壌水分、微地形などの変化によって、さまざまな立地環境がつくられている。それに応じて実に多様な植生が形成され、いわゆる「お花畑」が形成される。

六月、雪解けが進んだところから高山の植物たちが続々と茎を伸ばし葉を広げ、夏にかけて次々に開花していくようすは圧巻である。

（横山幸子、松田貴子）



稜線の岩礫に育つミヤマキンバイ



(上) 春羽(繁殖羽)のライチョウのつがい

(左) 純白の冬羽のつがい



氷河の落とし子「ライチョウ」

ライチョウの仲間は北半球に広く分布していて、その多くは大陸に住み狩猟鳥とされている。しかし、ニホンライチョウは日本の山岳信仰における恩恵を受け、古来より「神の鳥」として丁重に扱われてきた。そのためか人を見ても脱兎の如く逃げることはない。おそらくは日本人の精神性が他の生きものに反映した好例なのではないだろうか。燕岳から始まる「表銀座」のハイマツ帯ではそんな彼らの姿をたびたび目にすることができる。所作は緩慢、時に俊敏。

捕食者に見つからないことが最大の処世術であり、季節に合わせてどのように羽を春、秋、冬と年三度も生え替わらせる。主食は植物であるが成長の過程で虫などもついばむ。つがい関係は基本的には不変、オスは体を張ってメスを見守り、メスは命を懸けてヒナを育てる。毎年夏に生まれ出るヒナたちは、その年の初冬には成鳥と同等の大きさに成長し共に冬を越す。純白の冬羽の姿に出会うのは非常に困難であるが、冬山に登る機会があれば、その愛らしい姿を見ることができかもしれない。

登山道で出会う生きものたち

燕岳登山口でもある中房温泉から森林帯を経て稜線に出るまでの道中では、魅力的な生きものと出会いが期待できる。樹のウロに新鮮な”おがくず”が溜まっていれば当たり。そのフカフカのベッドでホンドモモンガが寝息を立てているかもしれない。夜行性だが昼間でもウロから顔を出すこともある。目が合ったらそっと見守ろう。岩場の隙間からはホンドオコジョが現れる。中房温泉付近でもその姿を目にすることも

あるが、稜線上に落

ちているフンなどの

痕跡から高山帯の岩

場での遭遇率が高そ

うである。雑食で木

の実からライチョウ

のヒナまで幅広く口

にするが、なにぶん

「山の妖精」と呼ば

れるほど愛くるしい

容姿のため会えると

大変嬉しい。見た目

に反して非常に大き



ねぐらのウロから顔を出すモモンガ

な口を開け、牙を剥き出し「シャーッ」と鳴く。

ヒナを守る母ライチョウと睨み合いをしているのを目撃したことがあるが、決死の気迫の母親には敵わない様子でおずおずと退散していった。ニホンカモシカも中腹から稜線まで広い範囲で遭



冬毛のオコジョ

遇する。切り立った岩場の上に立つ姿を見ることがあるが、その身軽さに「本当にウシ科なのか」と感嘆する。写真で紹介した他にも魅力的な生きものは数多くいる。多様に満ちた生態系はまさに地域の宝だといえるだろう。

(高橋広平)



ウシの仲間のカモシカ

受け継がれた棚田とその景観・植生

昔のままの棚田が残された

穂高牧、満願寺方向から川窪沢川が流れくだっており、そこから取水される水は牧地区の多くの水田を潤している。その一角、川窪沢川と集落の間に、農地整備されずに昔のままの姿を残す棚田が広がっている。戦後、市内のほとんどの農地が整備されるなか、この地域でも整備の計画が上がったが、結局、実施には至らなかった。

このことによつて昔から息づく自然と景観が、現在に受け継がれた。田畑や畔、道や側溝がつくる曲線の景観は安曇野でも限られたところに残っていない。ここでは耕作のみならず、畔や堰の土手がこまめに草刈りされており、手入れが行き届いた印象を受ける。有機肥料を使ったり農薬をなるべく使わないなど、自然環境に配慮された耕作地も多いという。



側溝や畔のようす。在来植物の植生が維持されている。
下のピンク色の花を咲かせているのはツルボ。

豊かな植物相が明らかに

豊科郷土博物館では、平成二九～三〇年（二〇一七～一八）にかけて、棚田とその周辺のすべての植物種を調査し、標本作製した。その結果、およそ二八〇種の植物が確認された。大きくない



面積にこれだけの種数が生育していることは驚きであり、それだけ多様な環境が存在していることを示している。

重機を伴うような大規模な造成工事が行われると、土壌は完全にリセットされ、植生は一変する。また農地整備によって水はけがよくなることで湿田は乾田化される。つまり、昔ながらの水田は排水が悪いために、稲刈りの頃や農閑期も「じめじめ」した土壌環境が残っている。これが水生植物や湿生植物にとっては重要なポイントなのである。農地整備や耕作放棄によって姿を消した植物は多いが、この棚田ではミズマツバやアゼトウガラシなど、湿ったところにみられる県や市の絶滅危惧種も確認されている。

こうした水分環境のほか、三面張りではない側溝や石垣など半自然の環境がまとまった面積で残されており、そこに耕作や草刈りなど人の手が入ることによって、さらに多様な環境が生み出される。こうして長い歴史をかけて育まれた、人と自然が織りなす豊かな生物多様性が維持されている。

(松田貴子)

1 他谷遺跡



他谷遺跡の発掘調査区（東から）

他谷遺跡は、穂高牧の川窪沢川左岸に広がる縄文時代の集落である。標高は六五〇メートル前後で、東に松本盆地を望む絶景の地である。この遺跡では、平成一一年度に農業基盤整備事業に伴う発掘調査を行い、A～D地区の四つの調査区から縄文時代中期の竪穴住居跡四五軒・配石遺構・土坑のほか、弥生時代の再葬墓、平安鎌倉時代の建物跡など多様な遺構が見つかった。



穂高牧の縄文遺跡

北アルプス山麓の縄文集落

安曇野の北アルプス山麓の地中には、縄文時代の集落跡が多く眠っている。穂高牧だけでも、山崎遺跡・草深遺跡・神谷遺跡・他谷遺跡・荒神堂遺跡・新林遺跡・十三屋敷遺跡・離山遺跡・堰下遺跡が点在している。

これらの遺跡を時期別に見ると、新林遺跡・離山遺跡で、縄文時代早期の押型文土器と呼ばれる土器片を確認してい

る以外は、縄文時代中期後半の土器が各地から採集されている。これまでの発掘成果からみても、縄文時代中期後半に穂高牧の縄文集落の人口はピークを迎えたと考えてよい。

発掘調査をしていると、遺跡の立地に関して、近隣の方から「この遺跡は水の便が良かったから」、「水害を受けにくい高台だから」などと教えてもらうことがある。穂高牧の縄文集落は、まさにこれらの条件に合致する立地で、水の利は良く、河川からは程よい比高がある。加えて、山の恵みにも事欠かない。しかし、それだけの理由で縄文時代中期後半の集落が、この地に密集するであろうか。離山遺跡と新林遺跡の直線距離は約一雫、新林遺跡と他谷遺跡の直線距離は一雫を下回る。松本盆地西縁では、縄文時代中期の大集落は約四雫間隔で所在するという研究成果があるが、穂高牧ではもっと間隔が近いようである。この原因として、物質的な効率に加え、人と人との社会的距離のような見えないルールがあるのかもしれない。

縄文土器彩々

他谷遺跡出土の縄文土器には、穂高地域を代表する多彩さがある。

写真の土器は「ひろみとってつきどき 広耳把手付土器」という名称で、平成三〇年（二〇一八）九月二七日に「信州の特色ある縄文土



広耳把手付土器

法は珍しい。全体的に力の抜けた印象と相まって、静かな芸術性を感じる不思議な土器である。

他谷遺跡では、「広耳把手付土器」の対極ともいえる力強い縄文土器も見つかっている。竪穴住居跡S B 28から出土した土器がその代表である。縄文時代中期の中頃に作られたこれらの土器は、当時の縄文文化の中心地である八ヶ岳山麓地方の影響を色濃く受けている。特に目を引くのは上段中央と左上の土器で、サンショウウオを表現したような文様を立体的に作出する。この土器群には、躍動感あふれる動的な芸術性を見て取れる。

器」全一五八点のひとつとして長野県宝に指定された。全高二〇・三センチメートルとやや小ぶりなこの土器は、左右に張り出した把手に円い透かしが入り、胴部の文様は刺突しとつによる列点で描かれる。縄文時代の土器製作者は、しばしば刺突列点を用いるが、点描で立体を縁取る本例のような技



他谷遺跡SB28出土土器

愛らしい土偶

土偶とは、主に縄文時代に作られた人形ひとがたである。粘土で成形し、土器のように焼成している。

他谷遺跡の集落が盛行した縄文時代中期には、東日本全域で土偶製作が活発となる。他谷遺跡からも、一点の土偶が出土した。土偶は、頭部や胴体がバラバラになった状態で出土し、欠損箇所が多く、完全な形に復元できることは少ない。他谷遺跡出土土偶も、一点全てが何らかの欠損のある状態で見つかった。しかし、この中には優品ともいえる土偶がいくつかあり、写真の土偶はその一つである。



他谷遺跡SB34出土土偶

縄文時代中期後半、松本盆地とその周辺では唐草文からくさもんと称される文様を特徴とする土器が盛んに作られた。この土器を生活に取り入れた文化を唐草文土器文化と呼ぶ。他谷遺跡も唐草文土器文化の代表的な集落跡である。唐草文土器文化の中に見られる土偶は、板状の胴体の下に突き出たお尻を持ち、短めの腕は真横か少し上方に向けて広げる。全身を沈線で装飾し、顔も沈線で表現する。目は曲線や渦巻で描くため、目が回ったような表情の土偶もある。写真の土偶はお尻の出っ張り具合が弱く、腕も真横になっていることから、同じ仲間でもやや新しそうである。

土偶に関する論考には、土偶は何者か、何のために作られたかといった視点が多いが、その答えは謎に包まれたままである。ともあれ、謎は謎として、縄文中期の土偶を無心で眺めてみると、そのとぼけたような表情に癒され、嫌な気分からしばし解放されたような心持になれる。

(土屋和章)

2 離山遺跡

離山遺跡は、穂高牧の烏川左岸に広がる縄文時代の集落跡である。遺跡は標高七六〇㍎前後に広がっており、南側では標高差約五〇㍎の急崖下に烏川が流れる。遺跡の南東には遺跡名にもある標高約七八〇㍎の離山が所在する。

明治時代以来、土器・石器が多量に採集できる遺跡として離山一帯は注目されており、昭和四六年（一九七一）に、ゴルフ場造成に際して穂高町教育委員会が発掘調査を実施した。

配石遺構と縄文人の祈り

配石遺構とは、石を集めて作った墓や祭祀の痕跡である。環状列石のように整然と石を配したのもあれば、雑然としているものもある。

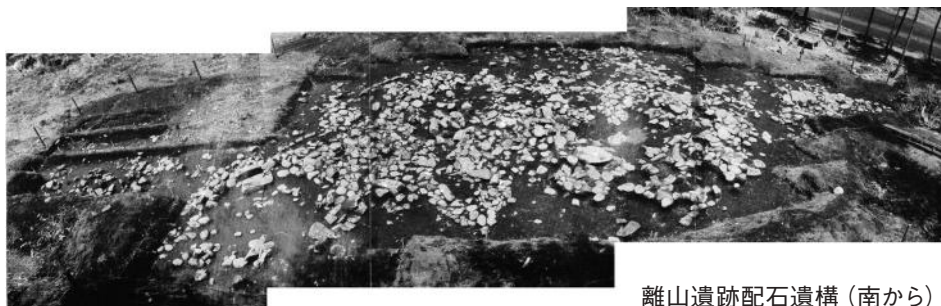
離山遺跡の発掘調査では、三二×一六㍎の範囲に隙間なく大小の石を集めた配石遺構が見つかった。一見すると石が雑然と集められているだけの遺構であったが、詳細な観察の結果、調査者は少なくとも三〇の単位に分けている。離山遺跡の配石遺構は長期にわたって形成された遺構要素の集合体であり、その期間は縄文時代後・晩期を中心とし



離山遺跡遠景（北西から）

ている。配石を単位ごとに分類すると、立石を伴う環状列石風のもの、立石を伴う集石ないし配石遺構、立石を伴わない集石ないし配石遺構、平たい石を縦に並べて環状に配置するもの、平たい石を直線状ないし環状にそのまま並べたものに大別できる。これらの配石の下部を調査すると、大半にピット（小穴）が掘られており、土器・石器のほか、土偶、耳飾り等の遺物、木炭・灰、シカなどの骨が出土した。なお、人骨は出土していないと報告されている。

離山遺跡の配石遺構が伝える「縄文人の思い」とは、どのようなものであろうか。考古学者の小林達雄氏は、土偶、石棒等の生業に直結しない道具を「第二の道具」と呼称した。離山遺跡の配石遺構からは、第二の道具が特徴的に出土していることから、祭祀的な意味があることは異論のないところであろう。



離山遺跡配石遺構（南から）

ここで特に注目したいのは、配石遺構周辺から六三点も出土した注口土器の注口部である。注口土器とは、現在の急須や土瓶のように注ぎ口がついた土器で、離山遺跡の縄文人は、この注ぎ口部分のみを、おそらく選択的に、配石遺構に持ち込んでいた。前述の上部配石・下部ピット・第二の道具の出土は、それぞれ直接対応するものではないが、一定期間にこの場所です繰り返し同じ行為を行い、場の特殊性を高めていった結果と考えられる。

私たちの課題は、場の特殊性を示す具体像にどこまで迫れるかである。離山の縄文人は、どのような祈りを込めて石のモニュメントを数百年にわたり作り続けたのだろうか。

（土屋和章）



離山遺跡出土注口土器の注口部

3 弥生時代の穂高地域

これまで穂高地域では、国道一四七号線沿線や穂高神社付近で、弥生時代後期の土器が採集されていたことから、この付近に弥生時代後期の集落が存在したであろうという予測がされていた。近年の調査成果は、この予想を裏付けるだけでなく、新しい知見ももたらすものとなっている。

芝宮南遺跡の発見

先述の離山遺跡は、縄文時代晩期に大配石遺構を造り終えると、人々の痕跡は追えなくなる。弥生時代の初頭に、穂高牧の他谷遺跡で、土器を棺とした再埋葬と呼ばれる墓が見つかったているが、それ以外は弥生時代初頭の人々の生活は見えてこない。再び人々の生活の痕跡を確認できるのは弥生時代中期前半である。

平成二六年（二〇一四）、穂高南小学校のプール改修工事に際して、弥生土器が出土した。この場所は、遺跡として認識されていなかったため、この一報をうけ慌てて現地向かうと、多量の土器片が土中に埋まっているのを目の当たりにした。芝宮南遺跡の発見である。

実は、この付近では縄文時代晩期～弥生時代中期の土器



芝宮南遺跡の土偶（左：正面、右：背面）

が散発的に出土している。穂高交流学习センター「みらい」の図書館部分からは縄文時代晩期終末の土器片、南原遺跡・藤塚遺跡からは弥生時代中期の土器片が見つかったている。

長野県内では、この時代の遺跡では竪穴住居跡が見つからず、土器・石器だけが出土することが多い。穂高地域でも、同様の傾向であるといえる。

芝宮南遺跡では、弥生時代中期前半の土器・石器がまともに見つかった。他の時代の遺構・遺物は存在しないため、当該期の単純遺跡といえる。特に注目したいのは、調査区の南側から土偶の体部片が出土したことである。土偶は、縄文時代に特徴的な人形ひとがたの土製品である。ところが、芝宮南遺跡の弥生人は、縄文時代の伝統を継承していたため、弥生時代に入っても土偶を保有していたことになる。

この土偶には、体の前後に細い線で模様が描かれている。これは、芝宮南遺跡の弥生人たちの服装を表しているのかもしれない。

地下一・八畝の弥生集落

弥生時代後期後半になると、長野県では長野盆地を中心とした箱清水式土器の文化圏と伊那谷を中心とした中島式土器の文化圏が形成されていく。前者は壺や高坏をベンガラで赤く塗ることを特徴とし、後者は赤く塗らない土器を使用する。松本・諏訪地域は、これら二大文化圏の中間に位置し、それぞれの文化的様相を取り入れた集落が生まれてくる。



地下1.8メートルで見つかった竪穴住居跡

等々力町巾上巾下遺跡では、平成二八年（二〇一六）に、駐車場造成で大きな雨水浸透施設を作る際、地下一・八畝から弥生時代後期の竪穴住居跡の片隅が見つかった。この遺跡では、

過去にも弥生時代後期の土器片と磨製石包丁が採集されていて、弥生時代集落の存在は予測されていたため、竪穴住居跡の確認はその証拠となる発見である。

竪穴住居跡からは、赤く塗られた土器と共に、北陸地方から搬入されたと考えられる土器片が少量出土した。過去に見つかっている石包丁は、孔が一つで、これは伊那谷の特徴ともいえる。箱清水式と中島式の二大文化圏の中間にある穂高地域では、これら双方の土器・石器だけでなく、遠く北陸地方の土器まで取り入れた多様な生活様式を作り上げていたのである。弥生時代後期は、後の統一国家形成に向けて世の中がまとまり始めた時代でもある。安曇野の弥生人は地の利を生かし、多方面と交流を持って生き残りをはかったといえるのではないだろうか。

（土屋和章）



等々力町巾上巾下遺跡出土弥生土器

4 穂高古墳群

古墳とは、比較的大きなマウンド（土盛り）を持つ古代の墓のことをいい、このような古墳を築く文化が盛んであった時代を古墳時代と呼んでいる。一般的に古墳時代は、卑弥呼の墓が築かれた三世紀の終わり頃に始まり、七世紀末に都が奈良に遷されるまでの約四〇〇年間とされている。またその間は、前期、中期、後期、終末期と時代区分がなされ、それぞれ時代によって、古墳の形や使い方、被葬者、副葬品に違いがある。

安曇野市内には、現在、一〇〇基余りの古墳があることがわかってはいるが、そのすべてが後期から終末期、年代でいうと六世紀後半から七世紀後半までに築かれた古墳である。そのうちの約八〇基が穂高地域の西山山麓を中心に分布している。この時代の古墳の多くは、それまでの地域を束ねていた有力者のお墓というものから、現在の私たちのお墓、「〇〇家先祖代々の墓」に近い、家族墓に変わってきている。よって、これまで調査をされた古墳の中には、三

体とか複数の遺体が埋葬されている例もある。これら古墳が築かれた次の時代、つまり奈良時代には、安曇平には安曇郡が置かれ、その中には、高家、八原（矢原）、前科、村上という四つの郷（ムラ）があったと、『和

名類聚抄』という書物に書かれている。穂高地域は、その

中の矢原郷があった地域と推定され、これら古墳は、矢原郷の前身にあたるムラに暮らしていた人々のお墓と考えられている。奈良時代の郷は、二〜三の里で構成され、里は五〇戸単位で形成されているとある。したがって、戸毎に古墳を築いたと考ええると、古墳数とほぼ一致する。

古墳の形状は、横穴式石室をもつ直径一〇メートル前後の円墳で、主に沢沿いに分布していることから、昭和四〇年代、穂高町教育委員会は、AからHまでの支群に分類している。



A1号「陵塚」外観(上)と石室内部(下)

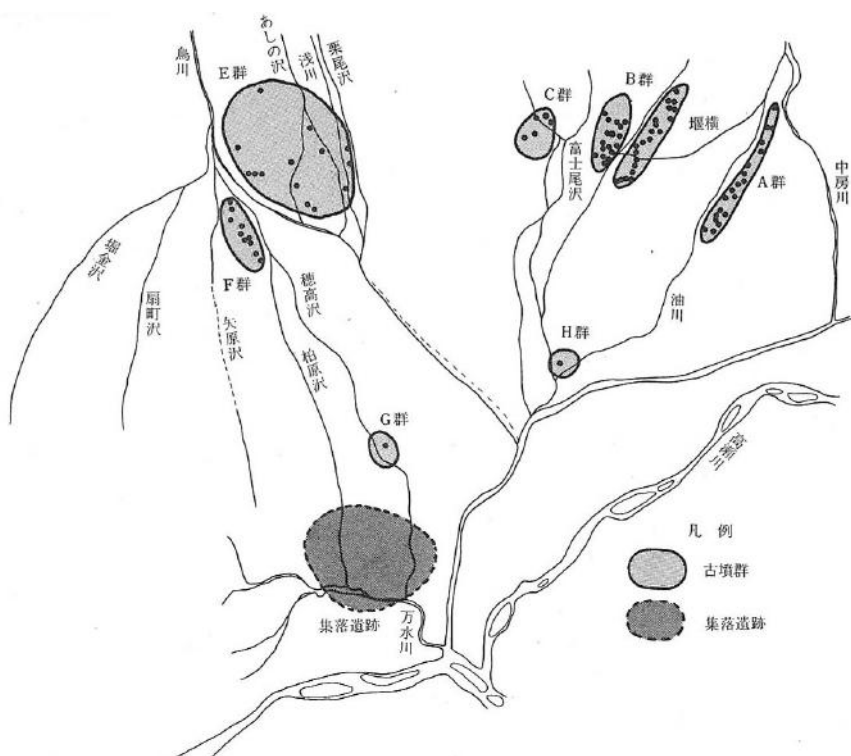
石室を構築する石材は、築造場所近くに数多く散在する花崗岩や、河川から河原石を運び構築している。中には自然に存在する大岩を壁に利用するB1号（ぢいが塚）や、自然の洞窟を石室に利用しているD1号（魏石鬼岩窟）など珍しい例もある。石室への入口は、概ね南側に設けている。

穂高町教育委員会の分類（支群）と代表的な古墳

- A群… 中房川から分流する油川沿いに分布
A1号（陵塚） A6号（犬養塚） など
- B群… 天満沢川沿いに分布
B1号（ぢいが塚） B3号（連塚） など
- C群… 富士尾沢川沿いに分布
C1号 など
- D古墳… 中房川左岸の山中に位置する単独墳
D1号（魏石鬼岩窟）
- E群… 川窪沢川、あしの沢等、牧地区に分布
E6号（狐塚1号墳） など
- F群… 烏川から分流する柏原沢沿いに分布
F9号（二ツ塚） など
- G古墳… 烏川扇状地扇央に位置する単独墳
G1号（上原古墳）（註1）
- H古墳… 天満沢川下流左岸に位置する単独墳

H1号（耳塚大塚様）（註2）

（註1） 上原古墳の東で昔、直刀が出土したとの話があったため、ほ場整備に先立ち、平成一二年（一九九九）周辺の試掘調査を試みたが確認されなかった。



『穂高町誌 歴史編上・民俗編』（1991年）より



A-6号 (犬養塚) 出土といわれる馬具飾り (有明山神社蔵)
左: 鉄地金銅張 雲珠 右: 鉄地金銅張 杏葉



有明古墳群出土土器 (有明山神社蔵)
平成29年開催 古墳展より (豊科郷土博物館)

(註2) 八面大王の耳を埋葬したと伝わる。これまで調査はされておらず、現況から石室も観察できないことから、古墳であるという確証は得ることができない。

なお、明治時代、大正時代の文献に掲載されている古墳の分布図には、現在よりも多い数の古墳が記載されていることから、その後、消滅してしまった古墳も多いことがわかる。

古墳の副葬品

前期・中期古墳の被葬者は、地域を束ねる権力者であったため、その権威を示す装身具や鏡、武器等の副葬品が多数出土する。一方、後期、終末期になると、ある程度の身分の者まで、古墳を築くようになるため、副葬品も被葬者が生前大切にしていた実用品的なものが多くなる。これまで穂高古墳群から出土したとされる副葬品としては、左記の遺物が知られている。

装身具 (一) 内は、材質等を示す。

勾玉 (ヒスイ/碧玉/メノウ/水晶など) 切子

玉 (水晶) 管玉 (碧玉など) ガラス小玉 白玉

など 耳環 (金/鉄地に、金張・金銅張・銀張を施したものなど) ブレスレット (青銅)

武器

直刀 (鐔、鞘関連の部品も含む) 鉄鏃など

馬具

轡など馬具全般。主として実用品としての馬具



鳳凰形金銅製飾板（複製）（長野県立歴史館蔵）

明治20年代、有明の古墳群から発掘され、玉類、金銅製鈴などとともに宮内省（現宮内庁書陵部）へ奉納される。また一部は、その後有明山神社へも奉納されている。

が多いが、中には飾り馬具も見られる（金銅製鈴、金張、銀張を施した金具・杏葉・雲珠など）。後期古墳から馬具が出土することは全国的にも珍しくないが、穂高古墳群では、その割合が高いかもしれない。

土器（供膳具としての須恵器 土師器）

坏・蓋、高坏、提瓶、平瓶、横瓶、長頸壺など

しかし残念なことに穂高古墳群の多くは、明治時代頃、盗掘を受け、ほとんどの副葬品が散逸してしまっている。

一部は地元の神社等に奉納されたものもあるが、出土した古墳を特定することのできる遺物は少ない。

平成元年（一九八九）、奈良県の藤ノ木古墳の発掘調査が行われ、大量に出土した副葬品の中で、金銅製の冠に付いた鳥形の飾り金具に注目が集まる。鳥をモチーフにした飾りはあまりなく、類似するデザインの物が、明治時代、有明古墳群（穂高古墳群）から出土し、宮内庁へ奉納されているという注目で注目された。現在、宮内庁書陵部に保管されているこの飾り板は、「鳳凰形金銅製飾板」と呼ばれているもので、大きさが、長さ・幅とも四センチメートルの鳳凰で三翼を有し、中央に小孔があり、紐状のもので装着した痕跡が残るものである。正倉院御物の中の「幡（旗）」にも類似した飾り板を縫い付けている例があるという。

穂高古墳群を築いた人々のムラ

昭和六二年（一九八七）、国道一四七号線白金歩道橋の北東、藤塚遺跡内で発掘調査が行われ、古墳時代後期の住居址三〇軒、掘立柱建物跡五棟が発見されている。発掘された建物跡は、部分的に重なっており、同時に存在していたのではなく、一定期間内で、建替えを行いながら営まれたムラであることがわかる。また、掘立柱建物跡の中には、一間×五間、二間×五間といった細長い建物が存在し、こ

れらは馬小屋ではないかと考えられている。また、住居内からは、本来古墳から出土することが多い須恵器の高坏や耳環（耳飾り）などが出土していることから、穂高古墳群を築いた人々のムラであることがわかる。その他矢原周辺の遺跡からも、同時代の住居址の発見がある。

次にムラと古墳分布域との位置関係である。前述のとおり、古墳は山麓の沢沿い中心に分布している。矢原周辺のムラから一番近いF群までの距離は、直線で、約八^三である。なぜ、これほどムラから離れた沢沿いに、古墳を築くのか。

仮説1：…自分のムラへの導水と水田開発のための水源となる沢の上流に古墳を築いたのではないかというもの。

仮説2：…水田開発とともに重要であった馬の生産のための牧場周辺に古墳を築いたとするもの。（沢沿いは、古墳を築くために必要な石が得やすいこともある。）など

様々な仮説があがってくる。しかし、同時にいくつかの疑問も沸いてくる。

その1：…古墳一基を築くのにも、かなりの労力が必要である。なぜ六世後半、突如、古墳が築かれ始めたのか。集落遺跡もそれに呼応して大きくなる。その政治的背景には何があるか。

その2：…自分たちのムラへ導水するための沢の上流に古墳を築いたとすれば、それぞれの沢の下流に集落遺跡がな

ければいけないが、矢原周辺以外、有明地域には集落遺跡の発見がない。今後、新たな発見があるのか。

その3：…古代安曇郡の高家、矢原、前科、村上の四つの郷の内、矢原郷と推定される穂高地域のみ、古墳の築造数が、他の郷に比べ極端に多い理由は、何によるものなのか。など、解明してほしい課題は尽きない。今後の調査研究に期待するところである。

当時の人々の暮らしは、「水田開発と、そのための水路開発」「馬の飼育」「古墳の築造」「他地域との交易」など。おそらく分業体制であったと考えられる。穂高古墳群も、七世紀中葉になると、ヤマト王権の規制がかかったことにより、新たな古墳築造は減少し、七世紀後葉にはほぼ造られなくなったと考えられる。しかし、市内の古墳の石室からは、八世紀代の土器が多数出土している状況から推察し、お墓としての利用はしばらく続いたことがうかがえる。

（山下泰永）

5 矢原遺跡群

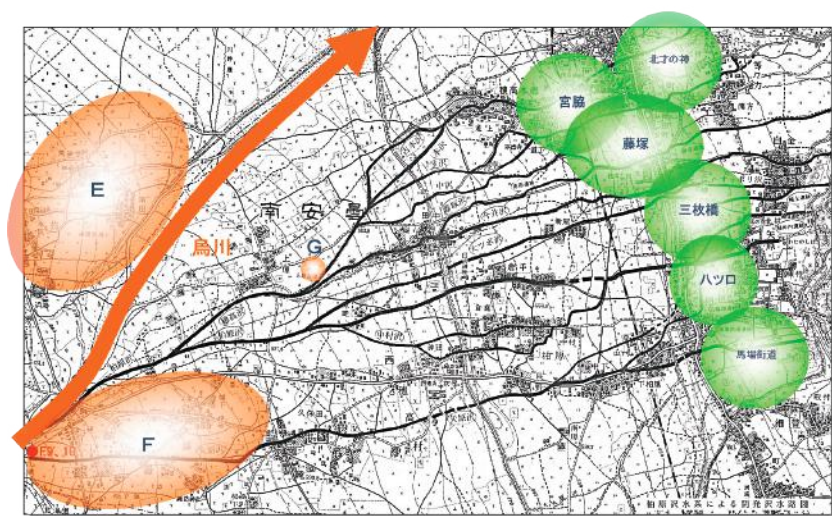
歴史的背景

平安時代の『倭名類聚鈔』(九三一〜九三七)によると、古代、安曇郡には、「高家・八原・前科・村上」の四郷があつたとされ、その中の八原郷は、今の矢原を中心とした地域で、平安時代後期に成立したとされる矢原御厨(皇大神宮領・庄)もこの地域であろうと推測されている。また、矢原に関するその他の記述としては、『兼仲卿記』(一一一九)・『兵範記』の太政官符(一一五七)・『吾妻鑑』(一一八六)・後醍醐天皇から伊勢大神宮祭主藤原隆実に下した綸旨(一二三二〜一二三六)・『神鳳鈔』(一一九三)などがある。『神鳳鈔』には、「内千九百九十一町矢原御厨」との記述があり、その広大さを示している。

地理的環境

穂高地域の矢原周辺は、烏川扇状地の扇央から扇端に位置し、古代から現在に至る長期にわたり生活が営まれてきている地域である。そしてこの地域に分布する古代を中心とする遺跡群を総称して矢原遺跡群と呼んでいる。

しかし、同じ扇状地内の扇央から扇端に位置する地域であっても矢原より南は、古代の遺跡の密度が薄い地域となる。この差を生



烏川扇状地 烏川からの導水(水路開発)と矢原遺跡群

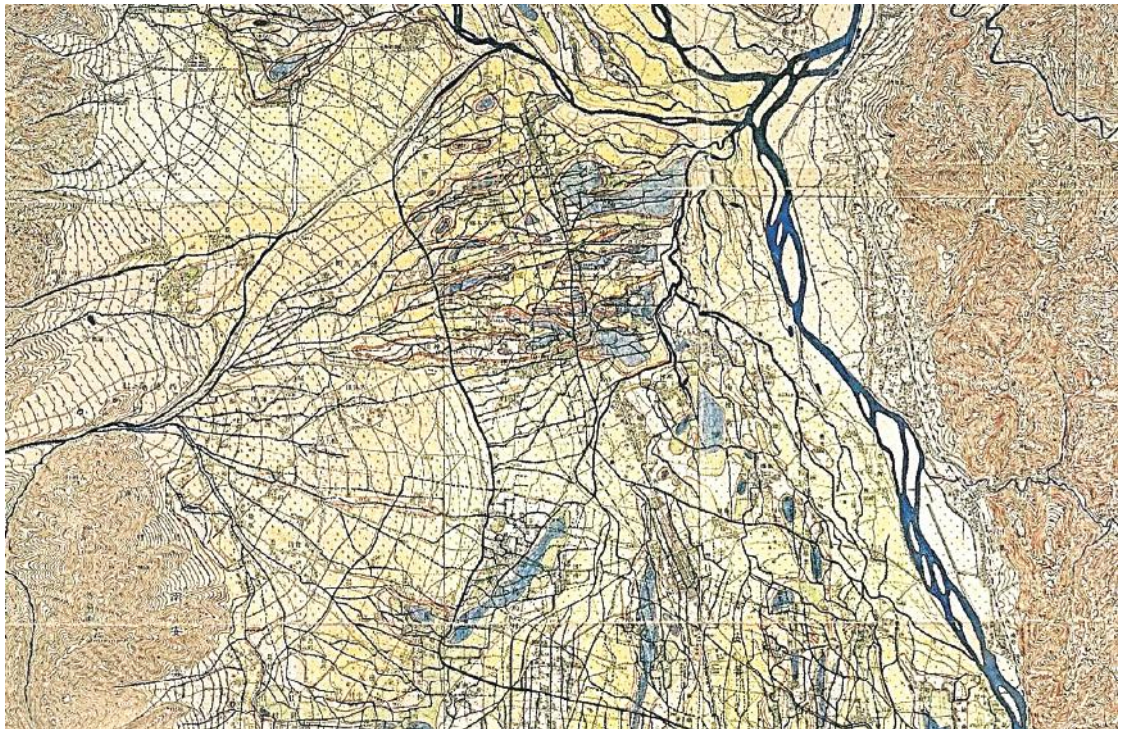
る。この差を生む大きな要因としては、私たちが生活を営むうえで重要な生活用水や、新たな田畑を開墾するための農業用水の確保が、容易な地域か否かという点である。矢原遺跡群への導水源は烏川である。古代も今と同じように、烏川の流れは須砂渡口を出て真っ直ぐ東に

流下せず、扇状地の北の縁に沿って流れていたと考えられている。また、今のような強固な土手を築いていない当時は、大雨が降ると決壊し、濁流は真っ直ぐ東に流下し、矢原周辺までくると、網の目状に広がったものと考えられる。

矢原遺跡群内の発掘調査をしていると、水害で流され、土砂が流れ込んだ住居址がよく発見される。また、一方でその近くには砂利をほとんど含まない厚い耕土が堆積している場所も分布している。これらの土砂も厚い耕土も水が運んできたものである。また、同時に、比較的長い間、水が流れたことを示す、きれいにふるい分けされた砂と砂利の層もよく発見される。これらは一時的な洪水の跡ではなく、一定期間水が流れた河川の跡で、洪水で流れた自然流路に手を加えて整備したものと想像できる。

遺跡が立地する条件は、一見、水害に見舞われない安全な場所と思われるが、一概にそうでもなく、むしろ水害が起きやすくても、導水し易く、近くに耕作に適した厚い耕土がある場所を選んでいるといえる。

つまり、烏川扇状地内であっても矢原より南の地域は、烏川が扇状地の北の縁を流れている間は、同水系の水害は受けることはないが、かわりに導水は容易ではないため、集落としての発展は、いわゆる横堰、矢原堰や拾ヶ堰などの開発が行われた以降となる。



小穴喜一 『土と水から歴史を探る』(1987年) より
河川以外の青く塗られた箇所が耕土が深い場所を示す

これまでの調査から、矢原遺跡群全域では、弥生時代後期、古墳時代初頭から後期、奈良時代、平安時代とすべての時代の住居址が発見されている。しかし、明らかに集落として大きく開始したのは、古墳時代後期六世紀後半からで、西山山麓を中心に分布する群集墳の築造時期に一致する。これまでの調査結果に限って言えば、六世紀前半以前は、数軒単位の家が点在する程度で、大きな集落を形成することはない。

六世紀後半以降の遺跡の様相も、地域により特徴がみられる。ある一定期間だけ集落が営まれ、それ以降、全く住居址を築かなくなってしまう藤塚遺跡（註1）・三枚橋遺跡（註2）など。一方、洪水被害を受け、盛衰しながらも集落が営まれている馬場街道遺跡とその周辺の遺跡（註3）などがある。前者の遺跡は、水田開発（水路開削も含む）のためのムラで、目的が終了すると次の開発の場所へムラが移動したのではないかと考える。ムラがあつた場所はおそらく水田に変わったのであろう。

また、八ツ口遺跡（註4）のように古墳時代後期から平安時代全般にわたり生活が営まれた特異な遺跡もある。この場所は、上流から流れてきた河川をさらに下流に分流している地点であることから、水を管理するための重要な集落であつたのではないかと考える。

そこからは、住居よりも水田経営を第一に考える矢原遺

跡群の人々の姿が見えてくる。

（註1）国道一四七号線白金歩道橋北東の藤塚遺跡は、古墳時代後期七世紀前半に限定された集落（詳細は穂高古墳群参照）

（註2）国道一四七号線白金歩道橋から、南へ一〇〇〜二〇〇㍔、国道の東・西側に広がる三枚橋遺跡は、古墳時代終末期から平安時代前半にかけての集落

（註3）国道一四七号線柏矢町交差点東、県道柏矢町田沢停車場線周辺の馬場街道遺跡、中在地遺跡、五輪畑遺跡、宮地遺跡が該当

（註4）国道一四七号線柏矢町交差点から北へ約

四五〇㍔、国道の東側

（山下泰水）



藤塚遺跡
古墳時代後期の集落から出土した土器

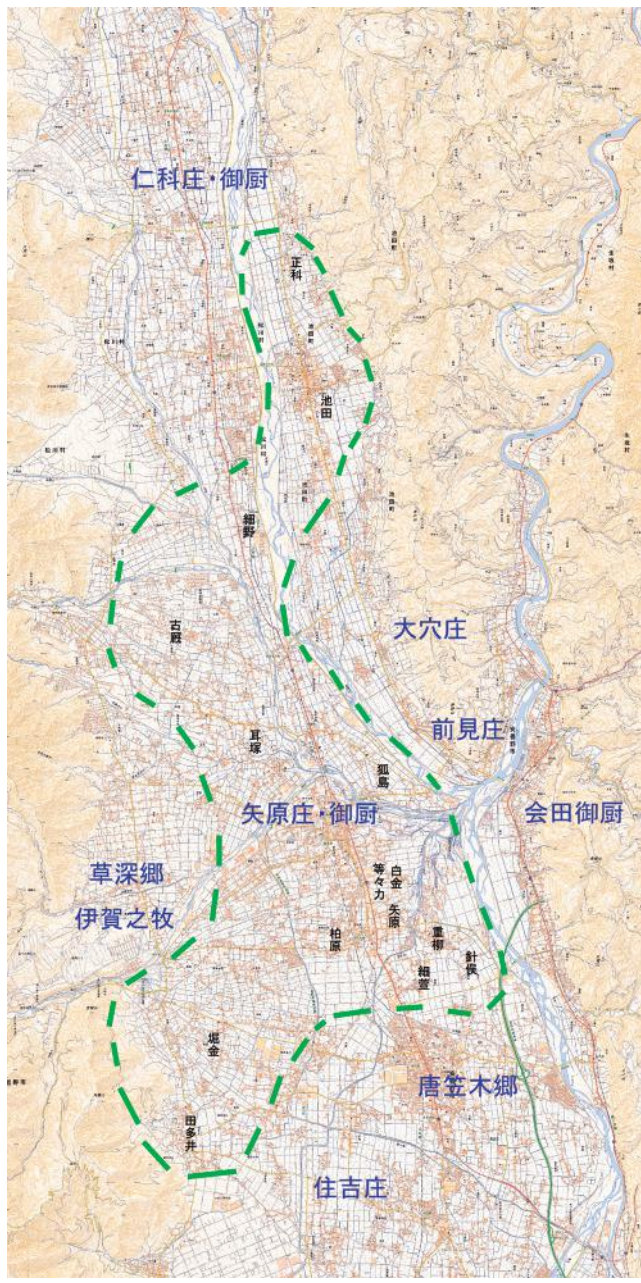
現在の安曇野へ続く 古代から中世

八原郷

奈良時代に安曇郡が成立し、八原（矢原）、高家、前科、村上^の四郷が置かれる。矢原地区は、柏矢町交差点から穂高支所の延長二^きほどにわたって古墳時代から平安時代前

半の遺跡が続いている。八原郷の中心地であった可能性が強い。その後、平安時代後半になると遺跡はさらに周辺に拡大していく。

矢原庄・矢原御厨



矢原庄・御厨の推定範囲

平安時代末になると開発が進み一二世紀の初め、中臣家信が伊勢神宮に寄進して矢原^{やばらの}御厨に、支配者が国司になると矢原郷と呼ばれる。ところが、平正弘は領主の時代、保元の乱（保元元年（一一五六））で崇徳上皇に従って敗れ後白河天皇の支配に変わり、その後、後白河院（上皇）院御領の矢原庄と

変わる。鎌倉時代に伊勢神宮側が訴え矢原御厨は復活する。矢原神明宮はもともと伊勢神宮の分社で、神宮領を鎮めるために勧請されたといわれる。支配者が国司、伊勢神宮、院と変わるが、現地の村の姿が大きく変わったわけではない。面積は一八九一町歩と記され、全国の御厨の中でも最大級である。その範囲は、室町時代に穂高、堀金、豊科、松川、池田などに及んだと推定される。

猪鹿牧と草深郷

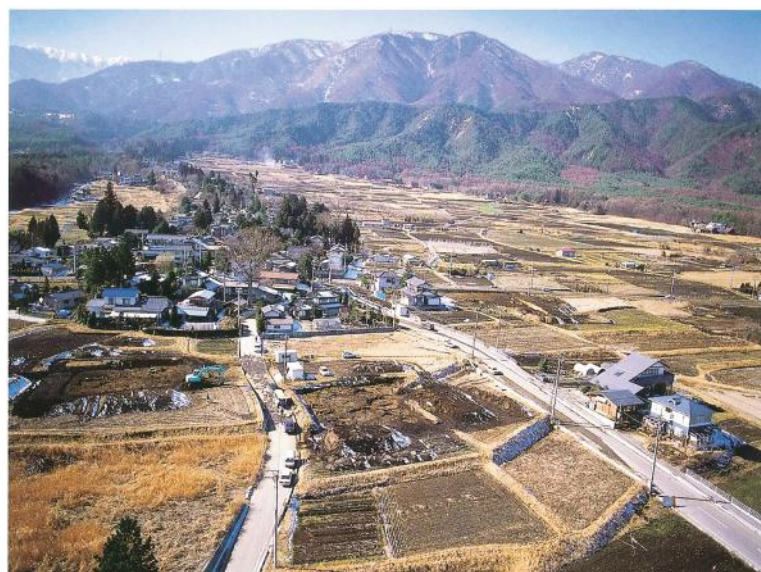
一〇世紀に編集された当時の百科事典、『延喜式』に、朝廷の直轄牧場の御牧が記される。信濃国に一六牧あり、その一つに猪鹿牧がある。その後、荘園と同じ性格になり、「伊賀之牧」と記され中世まで継続する。ただその支配者はわからない。場所は、烏川西側の牧地区が有力である。鎌倉時代の終わりには隣接して、草深郷が登場する。

発掘された中世の村

他谷遺跡からは、平安時代の村跡が発見されている。ただ継続しているかわからない。平安時代末から中世は、掘立柱建物跡や竪穴建物跡



中国製の青磁碗
(他谷遺跡出土 平安時代末)



他谷遺跡から満願寺方向をのぞむ

が発見され、大きな村があったことがわかる。鎌倉時代の遺物には、龍泉窯系青磁Ⅰ類碗（画花文碗）や手づくねの土器皿がある。付近からは、一九七〇年代の水田拡張の際に備蓄銭が発見されている。その中に永楽通宝や洪武通宝があることから、埋納された時代は室町時代の可能性が強い。牧地区には中世の大きな村が存在し、川窪沢川上流の満願寺との関連も考えられる。

(原 明芳)

7 上人塚

昭和五四年度県営圃場整備事業に先立ち、穂高町教育委員会は事業区域内に所在する上人塚の発掘調査を実施した。



発掘調査前の上人塚（南西から）

この調査の概要は、調査員である中島豊晴氏（なかじま とよはる）が『長野県考古学会誌』第三六号に報告している。なお、上人塚は調査後に地元同意のもと除去され、その後圃場整備事業が実施された。

上人塚の発掘調査

上人塚は、穂高柏原の水田地帯にかつて存在した単独塚で、東流する烏川扇状地上の自然堤防上の東端、海拔約五六一メートルの地点に構築された饅頭形の塚である。

昭和五三年（一九七八）八月の予備調査を経て、同年一二月に本発掘を実施した。墳丘は南北一〇・四メートル・東西一〇・〇五メートル・高さは、黄褐色の基盤（地山）から最頂部まで一・九一メートルを測る。墳丘表面から一一五～一六〇センチメートルの深さでは、骨片・木片が出土した。また、墳裾付近の水田床土から寛永通宝が、墳丘北側から一一世紀の土師器（はじき）が出土したことから、上人塚の築造年代は一一世紀～江戸時代と推定できる。

発掘成果のうちでも特筆すべきは、調査者が「水平盤状集石群」と呼ぶ礫群（れきぐん）である。封土の中央頂上部分を覆う黒色土層を除去すると、二〇×二五センチメートル・二五×四〇センチメートルほどの花崗岩（かこうがん）を主とした河原石二〇〇余個が、直径二メートルの円盤状の範囲に五〇センチメートル程度の水平の層をなして分布していた。この水平盤状集石群から遺物の出土はない。

この特異な遺構と骨片などの出土から、調査者は上人塚

を中世の埋葬施設と位置付けた。

入定伝説

昭和七年（一九三二）発行の『南安口碑傳説集』なんあんこうひでんせつしゅうには、上人塚についての口碑が二編掲載されている。

西穂高村南原に上人塚と呼ばれる塚がある。四周は田になつてゐて、現在は三五・六坪の地になつてゐる。昔高僧が無實の罪によつて此地に生埋にされて数日の後絶命した處で、これを上人塚とも生人塚とも書く。塚の頂上で足踏みをするごとくと反響する。それで子供達はまたごとくと山とも呼んでゐる。この反響はこの塚の頂上の中央に立たねばしない。

一説、昔上人が来て、里人に自分を生埋にして呉れと頼んだ。そこで里人がこの上人を埋めてやつた。すると中から数日間鐘の音がチンチンと聞えてゐたが、次第に細つて遂に死んだのがこの塚である。

このように上人塚は、いつの頃からか入定伝説をもつた。上人塚という呼称も、この伝説に基づくものと言える。この伝説にある、「ごとくと」という反響音や「チンチン」

という鐘の音の描写は、伝承の聞き手の感情に直接訴える効果を有しているが、発掘調査の結果、空洞や鐘は見つかつておらず、現実を反映した伝承とは言い難い。

上人塚とは何だったのか

発掘調査の結果、上人塚が伝承にあるような鐘と空洞を有する入定塚である可能性は低いことが分かった。では、上人塚とはいったい何だったのだろうか。

一般的に塚は、墳丘状の盛土である。塚として認識できる大きさの盛土を築造するためには、明確な目的、組織的な労働力が必要とされる。土木工事が機械化されていない時代、いったん塚を造つてしまえば簡単に壊すことはできなかったであろう。かつて造られた塚には、後世に土地の境界や道標としての役割も付加され、現代まで利用され続けているものもある。この現象は、他の考古学的遺構にはあまり見られない特徴と考えられる。

上人塚に関して言えば、当初は埋葬施設であつた盛土が、江戸時代には土地の境界標としての役割も与えられている。このように複数の役割をもつ塚が壊されたりしないように、いつの頃からか入定伝説を持つようになったとも考えられるのではないだろうか。（土屋和章）

1 武士たちの中世安曇郡

県歌「信濃の国」にも歌われた戦国武将「仁科の五郎信盛」は、わずか数年間ではあったが安曇郡一帯を支配していた。だがほとんどの古文書では、「盛信」と記名されており、「信盛」と書かれたものはわずかである。

この仁科盛信、実は仁科氏の出身ではない。当時甲信地方を支配していた戦国大名・武田信玄の五男である。安曇郡の武士たちの統制を強化するために、仁科氏の継承者として送り込まれたと考えられている。

仁科氏は安曇郡で最も力を持った武士であった。だが、安曇郡南部、今の安曇野市域に先に勢力を伸ばしていた細萱氏のことも忘れてはならない。

穂高地域へと勢力を広げた細萱氏

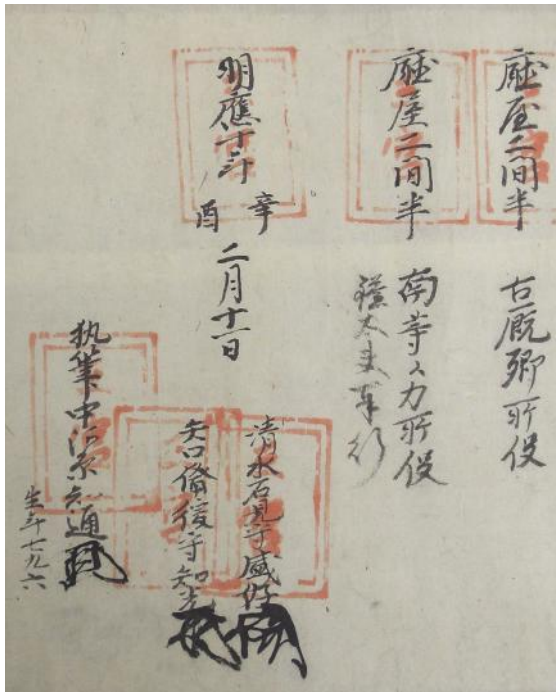
細萱氏の館は、現在の豊科南穂高、細萱区の殿村にあった。

史料上に同氏が最初に登場するのは、室町時代後期の文明一五年（一四八三）である。この年は穂高神社の遷宮が行われ、その費用は周辺の郷村に割り当てられた。これを記した文書『三宮穂高社御造宮定日記』には、大祝（おおほうり）最

上位の神職）また大旦那（施主）として「盛知」という人物が見える。天文一八年（一五四九）の遷宮では、宮奉行「大伴知光」なる人物が祭事を取り仕切った。

さらに堀金岩原にあった大同寺の薬師如来像を納めた厨子には永正一六年（一五一九）の年号が入り、「細萱治部少輔大伴高知」の名が書かれている。

細萱氏は、代々「大伴氏」の子孫を称し、諱に「知」の字を通用した。そのため、同じような名乗りをしている蟻ヶ



『三宮穂高社御造宮定日記』
(明應10年(1501)) (穂高神社蔵)

崎の犬甘氏いぬかいの庶流（分家）であると考えられている。

犬甘氏出身の一族には島内の平瀬氏、内田を領した村井氏などが見られるが、細萱郷を領した細萱氏は、ここを拠点に、穂高神社や堀金地域にまで勢力を及ぼしていたことが読み取れる。

仁科氏の発展

一方、仁科氏の出自は、平清盛の孫・維盛これもりの子孫とか、陸奥むつの安倍氏の流れを汲むという言い伝えなどがあり、定かではない。ただし確実な史料では、一貫して平氏を名乗っている。その本拠地であった安曇郡北部には、鎌倉時代初期に伊勢神宮を領主とする仁科御厨にしのみくりやが置かれ、のちに仁科庄しのしょうという荘園につながる。仁科氏はこの荘園を経営する一族として力をつけていったと考えられる。

仁科氏が史料上に初めて姿を見せるのは、平安時代末期の治承三年（一一七九）である。大田市八坂にある藤尾山覚音寺の千手観音像の胎内に納められた木札にはこの年号が入り、「大施主平朝臣盛家 芳縁女大施主伴氏」と墨書されている。

また鎌倉時代の承久三年（一二二一）に後鳥羽上皇が幕府に対して起こした承久の乱では、仁科盛遠もりとおが上皇方として北陸道で戦った記録が見られる。

室町時代、地方では国衆くにしゅうと呼ばれる有力な在地領主が台頭した。周辺地域に一族の者を庶家として分出して、本家にあたる惣領家との結びつきを強め、親族同士で結束する。さらに近隣の土豪や地侍といった小領主を傘下に組み込んで勢力を拡げる動きが見られた。

応永七年（一四〇〇）、信濃守護・小笠原長秀に対して、村上氏や海野氏ら信州国内の国衆たちが反乱を起こした。大塔合戦おとうかっせんである。この時、「大文字一揆」と称して小笠原氏に対抗した国衆連合の筆頭に仁科氏がいた。この仁科勢の中には、仁科惣領家の弾正少弼盛房だんじょうしょうひつのほか、千国氏や沢戸（澤渡）氏といった庶家がみえ、穂高氏や戸度呂木（等々力）氏ら傘下の武士たちの名も見える。なお、『穂高町誌』は、ここで言う「穂高氏」を細萱氏のこととしている。

この後、仁科氏は安曇郡南部に勢力を広めた。仁科庶家として堀金氏、古厩氏、渋谷見氏、日岐氏などを分出している。

また穂高神社の祭祀は、細萱氏出身の神職が中心となつて行われてきたが、天文二四年（一五五五）以降、遷宮の大旦那は仁科氏に交替している。これより少し前に安曇郡を制圧した武田氏が、仁科氏との関係を強めたことが影響しているのではないかとする見方もある。



平瀬城跡(右)と川合鶴宮神社(左)(ともに松本市島内)
天文20年の主戦場については、この両方の説がある。

武田氏の安曇郡侵攻

甲州(山梨県)の戦国大名・武田晴信が松本平への侵攻を始めたのは、天文一七年(一五四八)のことである。この年の七月、武田勢は、塩尻峠(現在の勝弦峠^{かつつるとうげ})に陣取っていた信濃守護の小笠原長時を攻め破り、松本平に進軍した。さらに武田氏は、仁科氏^{どうがい}の一族であった仁科道外^{どうざい}と上野介盛政を調略して味方に引き入れ、小笠原方の背後を攪乱する。

天文一九年(一五五〇)に入り、武田勢が犬甘城を攻め落とすと、林大城、深志城など松本平の主だった城は守りきれないと判断して自落した。

以後、武田氏は深志城を整備して松本平支配の拠点とし、安曇郡への侵攻の足がかりとした。

翌二〇年一〇月、晴信は仁科氏庶家の堀金氏を味方に引き入れると、自ら出陣して松本市島内の平瀬城を攻めた。平瀬城では頑強に抵抗したようで、城方の二〇四人が討死にしている。武田勢は余勢を駆って小岩嶽城にも攻め寄せ、放火して引き揚げた。

これに対して小岩嶽城ではさらなる抵抗を見せたようだ。天文二一年八月、晴信は自ら軍勢を率いて小岩嶽城を攻撃する。同月一二日、城主が自害して落城した。この時の様子を甲州の僧侶が書き残した記録『勝山記』には次のように書かれている。

この年も信州へ御働き候、小岩タケと申す要害をせめおとしめされ候、打取る頭五百余人、足弱取る事数を知れず候

城方は五〇〇人以上が討ち取られ、平瀬城の時以上の犠牲者を出した。さらに、「足弱」老人や女性、子どもたちが略奪されたという。

城の中には地元の民間人や非戦闘員も避難していたのだろう。しかし落城したら敵方と見做されて略奪の対象となった。彼らは甲州に連行されて身代金と引き換えに親族に返



小岩嶽城跡 (小岩岳)

されるか、或いは奴隸として人買いに売られたと考えられる。戦国時代の戦場は、略奪の場でもあった。貧しい人々は戦場の村々で略奪を働いてまで食いつないでいかななくてはならず、その対象は物だけでなく人にも及んだ。戦いの時代に起こっていた悲劇である。

ところで、この時自害した小岩嶽城の城主は誰か、はつきりとはわかっていない。古厩氏という説が有力だが、その一族の小岩氏と主張する人もいる。いずれにせよ仁科氏の一族であることは確かである。

翌二二年閏正月、仁科惣領家の修理亮盛康が武田氏に降伏。これをもって安曇郡はほぼ武田氏の掌中に入った。事実上、小岩嶽城の戦いが仁科氏による最後の抵抗であった。

おそらくこの合戦には城主とその部下たちだけでなく、惣領家などほかの仁科一門からも援軍が来ていたと考えられる。五〇〇人という多数の犠牲者の中には、城主の親族以外の仁科氏もいたのではなからうか。

武田氏の統制と仁科氏

永禄一〇年(一五六七)、すでに出家して信玄と名乗っていた晴信は、信州、甲州、上野(群馬県)の家臣たちに対して自らに忠節を誓う起請文(誓約書)を提出させた。これに前後して、信玄の嫡子・義信らが謀叛を企てたために切腹させられている。この起請文提出は、家中に広まった動揺を鎮め、信玄のもとに一致して外敵に向かうための措置だったと考えられている。

現在、上田市の生島足島神社にこの起請文八三通が残っている。いずれも熊野那智大社が発行する牛玉宝印という神符の裏に書かれたもので、もし誓約に違反したら神仏の罰を受けて癪病(らびびょう)を発症し、死後は無間地獄に落ちるとあり、誓約者の花押(サイン)と血判が居えられている。

ここに仁科氏一族の起請文も残っている。当時、仁科氏の当主であった仁科盛政は単独で起請文を提出し、別に「親類被官」として堀金平大夫盛広、古厩平三盛隆、渋田見源介政長、沢渡兵部助盛則、日岐盛次、穂高左京亮盛棟ら

仁科庶家と、等々力^{ぶぜんのかみ}豊前守定厚らその部下たちが連名で起請文を出している。

この時、海野氏など他の国衆も同様に、一族の当主と、親類や家臣たちが別々に起請文を提出している。中には、一族の当主が「御上意様（信玄）」に逆心を企てた場合にはこれを諫め、聞き届けられない場合は、当主には従わず甲州方に忠節を尽くすと書かれているものもある。つまり武田信玄は、国衆の結束に楔を打ち込み、彼らが団結して反抗することのないように手を打っていたと考えられる。

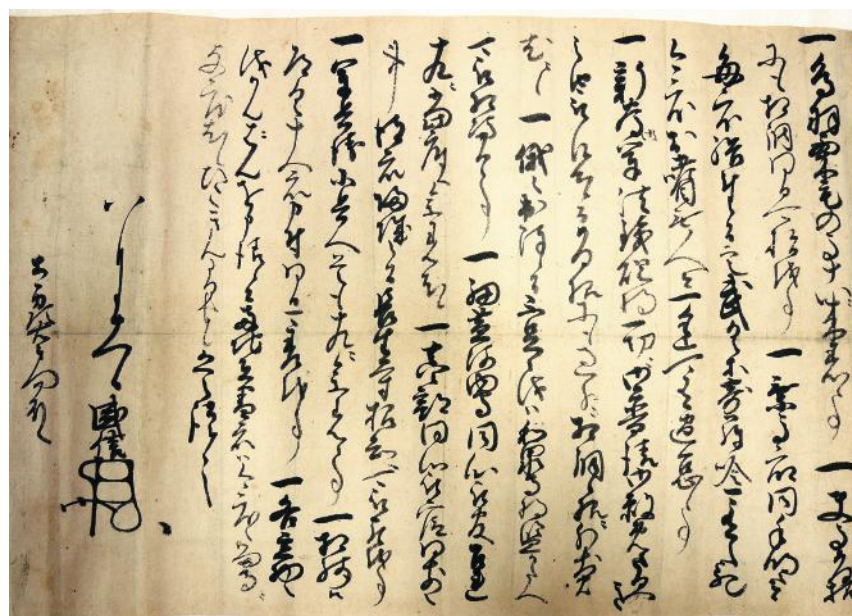
仁科氏の親類被官の起請文にはそのような文言はないが、仁科氏の当主である惣領よりも戦国大名武田氏への忠節を優先させることが期待されていたと考えて良いだろう。

安曇郡南部の武士たちを統率する仁科五郎盛信

この起請文提出の後、仁科盛政は史料から姿を消し、天正四年（一五七六）には仁科五郎盛信が初めて登場する。

現在、安曇野市に文書館に盛信の書状が二通収蔵されている（本陣等々力家旧蔵）。このうち年未詳八月一日付の書状には、馬を売買する市^{いち}のことが書かれている。安曇郡内の馬市は大町と真々部で開かれていたが、町の人々が嫌がったようで、この際だから穂高に集めてしまうようにとの指示が出されている。また同じく年未詳八月一日の書状に

は、今後の軍事行動に際しての準備やスケジュールが書かれており、宛所の等々力^{とどろきじう}右衛門尉^{えもんのかみ}を通じて真々部氏や渋田見氏、細萱氏らに指示が出されている。盛信は安曇郡の武士たちを統率するだけでなく、郡内の行政にも着手していたようである。



仁科盛信の書状（年未詳8月11日付）（安曇野市文書館蔵）

仁科一族の衰退と細萱氏の台頭

天正一〇年（一五八二）初頭、濃尾地方から畿内を中心に勢力を拡大していた織田信長は、甲信地方への侵攻を開始する。手始めに武田氏と親族関係にあった国衆・木曾義昌を寝返らせ、さらに伊那谷に軍勢を派遣して武田方の諸城を落城させていった。このころ高遠城を守備していた仁科盛信は、徹底抗戦の末に戦死する。盛信の兄で武田氏の当主であった四郎勝頼は抗戦しきれずに甲府を退くも、田野（甲州市）付近で追い詰められて自害した。ここに武田氏は滅亡したのである。

信長は、戦功のあった部将に甲信地方を分け与え、安曇・筑摩両郡は木曾義昌の領するところとなったが、わずか三ヶ月後にこの体制は崩壊する。家臣の謀叛により京の本能寺で信長が横死したのである。

その後の混乱の中、深志城を手に入れたのは、小笠原長時の子息・貞慶^{さだしん}であった。貞慶は深志城を松本城と改称し、二木氏ら安曇郡の土豪・地侍層の支持を受けて松本平の平定に乗り出す。越後の戦国大名・上杉氏を後ろ盾にしていた近隣の国衆と戦いを繰り返して、勢力を拡げていった。

小笠原氏は天正一〇年から一一年の間に、生坂の日岐氏を破り、また会田の岩下氏を滅ぼした。しかし上杉方に内通する家臣もいて、露顕したら容赦なく誅殺した。親戚筋

にあたる稲倉城主の赤澤氏も切腹を命じられている。

天正一一年二月には、小岩嶽城主・古厩因幡守盛勝^{いんぼのかみ}に逆心の容疑がかかったため、松本城に呼び出して深夜に殺害してしまう。さらにこれと連携していた明科の塔原城主・海野三河守幸貞^{みかわのかみ}に討手を差し向け、塔原城を攻め落とした。小笠原勢が小岩嶽城に向かったところ、城内に塔原城から運び込まれた兵糧が山積みされていて、籠城する準備が整えられていた状況だったという。さらに仁科氏の庶家であった白馬の沢渡九八郎盛忠も捕縛した。こうして仁科一族の多くが勢力を失っていった。

仁科氏の代わりに安曇郡を統治したのが、細萱氏であった。細萱河内守長知^{かわちのかみ}は、満願寺の寺領を安堵（保証）する文書を出すほか、それまで仁科惣領家が行っていた仁科神明宮の遷宮も取り仕切った。

戦国時代の末期になって、仁科氏のような大きな勢力がいなくなったことで、再び細萱氏が安曇郡内で台頭するのである。

この後、歴代の松本城主は次第に在地領主たちの権力を縮小させていく政策を取るようになった。武士という生業を続けるのであれば、土地から離れ城下に集住することを余儀なくされていく。中小の在地領主の中には領地を手放して、藩から支給される俸禄で生活する武士となるものもいたが、細萱氏ら一部の者たちは農村に入り、村役人としての道を歩むことになる。（逸見大悟）

2 穂高神社の祭礼

安曇野市内の神社の中で最も古くからの歴史を伝えるのは、穂高神社である。平安時代に完成した「延喜式」^{えんぎしき}には、律令法の細則が定められており、その中に名神大社^{みょうじん}として「穂高神社一座」が載せられている。名神大社とは、特に靈験が著しいとされ、国家的な事変に際してその解決のために祈願を行う神社のことである。穂高神社が古代から靈験あらたかな神社として重要視されていた。

連綿と続く遷宮祭

六年または七年に一度斎行される遷宮祭。最近では、二〇年に一度、三殿ある本殿のうちの一殿を造り替える大遷宮が平成二十二年（二〇〇九）に、本殿の修理を行う小遷



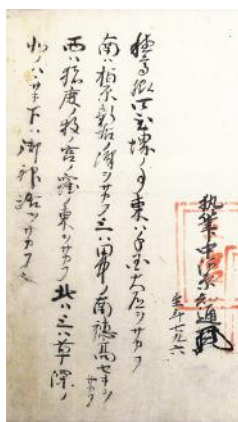
小遷宮の本殿遷座祭
(平成28年(2016))

宮が平成二八年（二〇一六）に行われた。

穂高神社には、室町時代に遷宮を行った際に書かれた古文書が残されている。『三宮穂高社御造宮定日記』^{さんのみや}と呼ばれる巻物で、文明一五年（一四八三）から天正一三年（一五八五）の約一〇〇年間のうち、一回分の遷宮の記録が残る。欠損箇所も多いが、保存状態の良い文書もあり、遷宮の際の郷村への割り当てを読み取ることができる。北は松川村の大和田や池田の庄科、東は明科七貴の荻原や松本市島内の平瀬、南は旧梓川村の角影や大妻、古幡牧まで広範囲に及ぶ。それぞれ粃、白米、錢、幣帛^{へいはく}などの負担や、鳥居や玉垣、神殿などの建築を割り当てたりしている。また文末には必ず次のような文言が書かれる。

穂高ノ郷四至堺ノ事、東ハ千国大道ヲサカフ、
南ハ柏原新居ノ澤ヲサカフ、上ハ田中ノ南、穂高セキヲ
サカフ、
西ハ猪鹿ノ牧ノ宮ノ窪ノ東ヲサカフ、北ハ上ハ草深ノ
北ノハ、サキ、下ハ御神路ヲサカフ也

祭礼の年は聖域となる穂高郷の四至すなわち四方の境に



『三宮穂高杜御造宮定日記』の冒頭と末尾（明応10年（1501））（穂高神社蔵）

櫛を立てて結界として域内の穢れを禁ずる四至^{しし}櫛立^{さかきだて}の神事が行われた。

中世の櫛立ての場所はわからなくなっているが、現在も本殿遷座祭の一〇〇日前を期してその推定地で行われている。

遷宮祭のクライマックスは、修繕や造替が成った本殿へと神霊をお戻しする本殿遷座祭である。五月の寅の日寅の刻（午前三時ごろ）、御神体を絹垣で囲まれた御羽車^{おはぐるま}という神輿に似た神具に奉載してお遷しする。この時だけは一切の照明を消し、神職の警蹕^{けいひつ}という先払いの声だけが響く中で行われる。



四至櫛立の神事（平成28年（2016）1月）

御船祭りの歴史

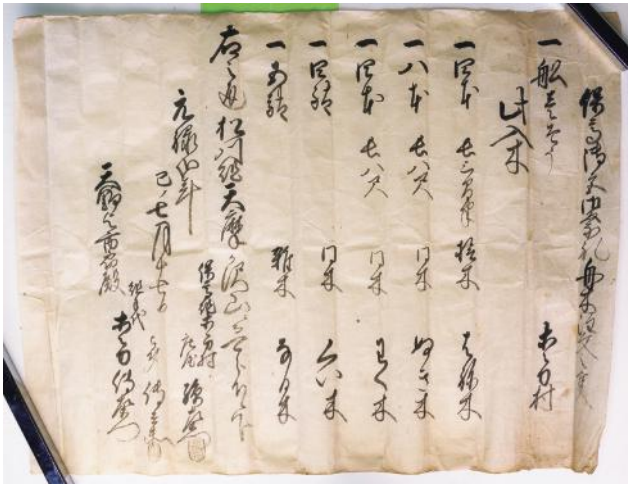
穂高神社の御船祭りについて、その発祥を漁労や航海を生業としていた古代の氏族・阿曇氏（安曇氏）に求める向きもあるが、はっきりしたことはわからない。

『穂高神社史』を著した宮地直一^{なおかず}氏は、穂高神社の御船行事について、たまたま恰好が似ているから御船と呼ぶのであって、航行する船に由来するものではないという。もともとは、祭りに先立って神霊をお迎えしていたころの遺風であり、船形はお迎えした神霊を招代^{おきしろ}（依代^{よりしろ}）にのりうつらせるためのものだと言明する。そして御船が神楽殿の周囲を三周するのは神霊の降下を念ずるために祭場を何度も引き回す風習を形式化させたものと位置づけている。

また三田村佳子氏は、毎年八月に行われる諏訪大社下社の例大祭でも船型の神輿が出されており、江戸時代の延宝

七年（一六七九）にすでに行われていた記録があるという。これは穂高神社の御船祭りに関する最古の史料よりもさらに前の時代である。とすれば、諏訪大社の祭礼の形式が安曇野に広まってきたとも考えられるが、それも現段階では確かなところはわからない。

穂高神社の御船祭りに関する最古の史料は、近年まで江戸時代の正徳五年（一七一五）のものと考えられてきた。しかし平成二四年度に安曇野市教育委員会が行った古文書調査で、さらに古い時代の史料が発見された。これは本陣



御船祭りに関する現存最古の古文書
(元禄2年(1689)) (安曇野市文書館蔵)

等々力家所蔵していた古文書の中から見つかったもので、元禄二年（一六八九）七月一七日の日付が入っている。等々力孫左衛門ら等々力村の村役人が、保高組組手代の等々力伝左衛門を通じて松本藩の代

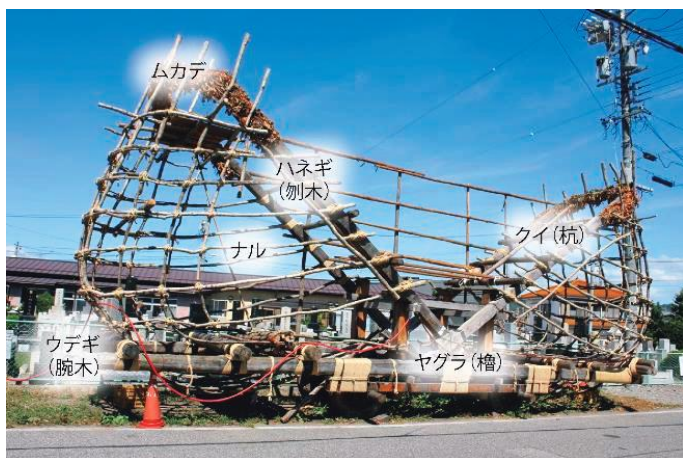
官・天野与市郎へ提出したもので、「保高御宮御祭礼」で船を一艘出すので、その用木を松川組の天摩沢山から伐り出させてほしい、との願い出である。

御船の「はね木」として桧四本、腹を作るための「なる木」として雑木五駄が書かれているが、ほかの「ぬき木」「わく木」「くい木」というのははっきりしない。当時まだ御船には車輪がなく、船型の神輿であった。さらに神霊の乗り物なので、すべてを新しい材で作らねばならず、古材の使用は厳禁とされた。御船に車輪がつくようになったのは、江戸時代後期からである。

御船祭りの担い手 今

現在、穂高神社の例大祭は、毎年九月二六日が宵祭、翌二七日が本祭と定められている。本祭の日には、穂高神社の若宮に祀られている阿曇連比羅夫が、船団を組んで百済救済に向かい、白村江の戦いで戦死した日にちなんでいるとされている。

例大祭には、毎年、穂高区、穂高町区、等々力町区から一艘ずつ計三艘の子供船と、穂高区、穂高町区・等々力町区の両町区から一艘ずつ計二艘の大人船が奉納されている。これらの御船の製作と、御船のヤマに飾る人形飾り物は、穂高区では睦友社が大人船と子供船を、両町区では健壮団



両町の大人船の骨組み（穂高町・等々力町）
（西牧尚人撮影（平成24年（2012）））

が大人船を、穂高町区の子供船を一真会が、等々力町区の子供船を七星会が担当している。

御船の製作は、どの団体も八月の盆明け頃から準備を始める。前述のように、船の部材については、昔は毎年新調することを基本としていたが、今は昔とは違い、御船の骨格をなす櫓や車輪、腕木やはね木などは、破損しない限り、毎年使いまわしている。しかし、その他の御船のハラなどを作るナルは、毎年、山から伐りだしてくる。ナルとは、

ハラなどを作る部

材の総称で、コナラ、クヌギ、ヤマザクラ、カエデなどで、大人の腕くらいの太さで、柔らかく撓る木が良しとされている。

御船の船上の人形飾りを行う場所をヤマと呼ぶ。

人形飾り物の題材は、各団体の人形師が中心となっており、お祭りの数ヶ

月前から何枚もの絵コンテを書きながら、熟慮を重ね決定する。場面が決定すると人形制作が始まる。人形の頭は、各団体でこれまで制作してきた頭が数多くあるためそれを再利用することが多い。しかし、ちょうどよい頭がない場合は制作する。頭となる材は、昔は桐材などであったが、最近では発泡スチロールなども使う。胴体は、針金や番線を芯に藁と和紙・新聞などで肉付けして形を作る。衣装は、東京の生地専門店で買い出しに行き、女性の皆さんが中心となり仕立てている。

題材としては、健壮団、一真会、七星会は、戦記物が多く、その年放映されている大河ドラマの一場面を再現することもある。一方、睦友社は、神話や伝説・説話などを題材にすることが多い。

盆明け頃から、健壮団は、仕事が終わってからライトを照らしながら、その他の団体も毎週日曜日などに集まって、作業を行い、お祭りの一週間前までに、骨組みを完成させる。その後は、人形師が描いた絵コンテを見ながら、背景を作成し、宵祭の午前中までには、人形も飾り、御船の周りの幕も張り終える。

夕方、翌日の船の曳行が始まる地点まで曳いていき、ライトアップして地元の皆さんにお披露目をする。両町区の大人船は、旧道沿いで穂高町区と等々力町区の境界で、等々力町の郷蔵跡地の南側である。穂高町区の子供船は、穂高



等々力町区の子供船



穂高町区の子供船



穂高区の子供船

駅前ロータリー北側へ。等々力町区の子供船は、北城公園
南西へ。穂高区の子供船・大人船は、穂高神社南神苑であ
る。

睦友社も健壮団も、今は御船祭りに特化した、いわゆる
お祭り青年的組織であるが、明治・昭和中頃の書類を見る
と、講演会や講座を開催し、地区の防災から普請を行うな
ど、青年団活動を行っていることがわかる。

穂高神社例大祭 本祭当日

地元の小・中学校では、運動会などの代休を、この日に
当てるなどの配慮をし、大人は仕事を休む。午前中、各御
船の前後のハラには、男物、女物の着物を飾り付ける。正
午近くなると、法被を着た各地区の役員、子供、大人が、
御船のスタート地点に集まり、御船のハラに乗り込んだお

囃子に併せて曳行が始まる。

なお、お囃子連の構成員には大人もいるが、主となるのは地元の小中学生で、盆明けころから皆で集まって練習を重ね当日を迎える。また、お囃子の曲は、現在、各御船二～三曲あり、動いている時、止まっている時、神社に入る時、オフリヨウの時など曳行の場面ごとに曲を替えて演奏している。

穂高区の子供船と大人船は、一二時四五分頃南神苑を出て、東へ進み、穂高支所の西側を通り、大門の鳥居から入って、午後一時には南神苑に戻る。一方、正午頃各場所をスタートした両町区の大人船、穂高町区の子供船、等々力町区の子供船の三艘は、午後一時過ぎに旧道と穂高駅前通りの交差点南側の、旧保高宿の枳形があった場所に集結する。そこでしばし休憩した後、午後一時半過ぎ、等々力町区の子供船、穂高町区の子供船、両町区の大人船の順に鳥居をくぐって神社境内に入り、南神苑に到着し、全五艘がそろって記念撮影を行い、お披露目する。その後、大人の御船の前後のハラを飾っていた着物を取り外し、「御船神事」の準備を行う。神楽殿では浦安の舞が奉納され、拝殿では三時から神事がはじまる。

神事が終了すると、三時四五分頃から松川村鼠穴の茅野氏が持つ三階菱の幟旗を先頭に、近隣の神社の氏子総代が幟旗を持ち続き、神楽殿の周りを三周する。この所作を「御

布令の儀」(おふりよう渡し)と呼んでいる。御布令の儀が終了すると、いよいよ「御船神事」(オフネによるおふりよう渡し)が始まる。南神苑より、等々力町区の子供船が入場し、神楽殿の周りを三周し東の大鳥居から退場する。続いて穂高町区の子供船が、それが終わると穂高区の子供船が同様に御船神事を行う。その後両町区の大人船が入場し、神楽殿を二周し、三周目に入る時、穂高区の大人船が入場し、「御船神事」のクライマックスと呼ばれる、御船同士のぶつけ合いが始まる。ぶつけ合いの回数を決まってい

ないが、拝殿前で数回、最近では、観光客も多いことからサービスで神楽殿の北側でも行っている。なお、ぶつけ合いの最中もお囃子を止めることはない。このぶつけ合いの意味としては、両町区の御船の女



三階菱の旗を先頭に境内を三周する「御布令の儀」



健壮団（左）と睦友社（右）の大人船のぶつかり合い

ハラに穂高区の御船の男ハラをぶつけることから、「五穀豊穰、子孫繁栄」の祈願の形であるとも伝わる。御船のぶつけ合いも概ね五時頃には終了し、両町区の御船も三周目を終え、大鳥居から退場し、穂高区の御船も三周し同様に大鳥居から退場する。その後、各御船は、御船を組み立てた場所に戻り解体される。

穂高神社式年遷宮祭の大飾り物

穂高神社の地元では、各区を代表する三人の人形師と穂高町区・等々力町区の健壮団、穂高区の睦友社が中心となり、御船祭りの飾り物、遷宮祭の大飾り物を制作し、奉納してきていた。

こうした中、平成十一年（一九九九）九月、人形師の技術の継承が急務であるという判断から、「穂高人形・御船祭保存会」が発足し、翌年、穂高人形研修館が、穂高神社北神苑の御船会館南隣に建設される。研修館の各部屋には、当時の人形師の名前をとって「小平教室」（一真会）、「牛流教室」（七星会）、「保尊教室」（睦友社）が開設される。各教室では、御船祭り及び穂高神社式年遷宮祭に奉納する人形飾り物の制作を行うと共に、後継者の育成事業に取り組んできている。

現在では、安曇野市内各所で行われる御船祭りはもとよ

り、松本市内、南信地域からも飾り物の依頼がはいる。

前述の『三宮穂高社御造宮定日記』によると、穂高神社の式年遷宮祭は、古くから行われてきていることがわかる。

明治時代に行われた遷宮祭では、境内の杜を背景に、蚊帳などを使って山や大岩を表現し、その前に足場を組んで大掛かりな人形飾り物を奉納している記録写真が残る。十数メートル離れた松本からも巨大な飾

り物が見えたなどという逸話もある。これら人形飾り物は、いつごろから飾り始めたのか。かつて代々庄屋を務めてきた小川家の文書に、正徳三年（一七一三）神社境内に「熊坂長範の場」を飾ったとの記録があったという。しかし、残念ながらその古文書は現在、行方不明となっている。

式年遷宮祭の穂高人形飾り物は、人形師にとっては、日ごろの研鑽、力量を披露する重要で晴れがましい舞台である。また、今も昔も、多くの氏子が、この穂高人形飾り物を楽しみに待っている。

（逸見大悟、山下泰永）



小遷宮祭の人形飾り物
（平成28年(2016)）

上から
七星会「加藤清正の虎退治」、
睦友社「天孫降臨」、
一真会「桜井の別れ」

満願寺

伝説の寺を歩く



微妙橋と地藏堂

夕闇が濃くなったところ、烏川の東から西山の山腹を眺めると、一点の灯火が見えるという。だが川を西へ渡ると、見えなくなってしまうそうだ。これは「満願寺のお小僧火」と呼ばれ、住職に激しく折檻されて死んだ小僧の怨念が小さな灯火となって毎晩明滅している——という話が『南安曇郡誌』に採録されている。

また「南安口碑伝説集」には、この寺の東山に住んで人をさらっては悪事を働いていた大天狗がお小僧火を見て、恐れ驚いて他国に移ってしまった、という話も伝えている。穂高牧の古刹・栗尾山満願寺は、不思議な伝説に彩られた寺である。

坂上田村麻呂が創始した寺

明治二八年（一八九五）に作成された「古代仏堂取調書」には、満願寺開創の伝説が書かれている。

奈良時代の天平年間（七二九―七四九）に唐沢山の奥にあった長者池という小さな池から一寸八分の黄金の千手観音像が出現した。平安時代には征夷將軍・田村利仁（坂上田村麻呂を指す）がこの観音の霊夢により中房嶽の妖賊を



弘治2年 (1556) 満願寺再興勸進状

退治したという。そこで田村將軍は一尺二寸の琥珀^{こはく}仏を彫刻し、先の黄金仏を胎内に安置して祀った。これが満願寺の本尊の由来である。

あの世につながる満願寺

坂上田村麻呂が創始したという伝説は、満願寺最古の古文書にもみられる。弘治二年（一五五六）の年号が入ったこの文書には、満願寺の由緒が書き連ねられているが、書かれた目的は焼失した伽藍の再建にあった。この文書は寺の再興のため浄財を集める趣旨^{こうむ}を謳った勸進状である。

「殊に貴賤道俗の哀憐を蒙り、信州栗尾山精舎^{しょうじや}を再興せしむるを請う状」という表題のあとに続くのは、この寺が「極楽の東門」「閻魔王宮の最前」に位置し、浄土へと生まれ変わる道筋にあることや、本尊千手観音のあらたかな利益である。

御堂の前を流れる川を三途の川と呼ぶ。ここに架かる橋は、善人は速やかに渡ることができるが、罪人は渡れない。人の罪が明らかになる橋という。また左右にある山を死出山と名付け、ここから死後に生まれ変わる六つの世界（六道）への道が分かれ、一百三十六もの地獄の有様が繰り広げられるという。

安曇平の西山山麓に置かれた当寺が、山を西方浄土に見

立て、目の前の川と両側の山を境に、あの世へと旅立つ場所であると考えられていたことを示す貴重な古文書である。

現在まで残る「あの世」空間

北の沢には屋根付きの廊下橋が架かっている。江戸時代には「無明橋」、現在は「微妙橋」と呼ばれている。現在の橋は明治三十九年（一九〇六）、東穂高村に住んでいた木曾福島出身の大工・瀬川伊勢松らが建築したものである。牧の杣であつた寺嶋徳蔵が、寺嶋和佐市の持山から伐り出した材が使われた。

橋の床板の裏面には梵字で陀羅尼が書かれており、「御経橋」とも呼ばれる。ここに書かれた「普遍光明清浄熾盛如意宝印心無能勝大明王大随求陀羅尼」をわずかでも聞いた者は一切の罪障を消滅し、よく読んで心に留めておけば様々な災厄を免れることができるという。

微妙橋を渡ると、地藏堂と賽の河原がある。賽の河原は、親より先に死んだ子どもたちが向かう死出の山路の裾野にあるという。現世にいる父母兄弟のため、石を積んであの世から回向する場所である。

地藏堂には「千体仏」と呼ばれる小さな地藏菩薩の木像が並んでいる。昔、子どものない親がこの木像を借りていき、子が生まれたら、倍にして返すということが行われて



微妙橋の床板の裏に書かれた陀羅尼

いたらしい。

賽の河原で悲しみに暮れている不幸な子どもたちを現世に呼び戻す行為と感ずるのは考え過ぎだろうか。

復興する満願寺と松本城主の庇護

さて、戦国時代に焼失した満願寺の復興は、弘治二年から三〇年近くのちの天正一〇年（一五八二）ころに本格化する。それまで甲信地方を治めていた武田氏が滅亡し、度重なる戦乱の末に、小笠原貞慶が松本城を拠点として安曇・筑摩両郡の支配を固めていった。小笠原氏は、領内の神社を保護する政策も進める。



年未詳2月10日 小笠原氏黒印状

特に満願寺は、栗尾観音を管理する別当寺として庇護を受けた。小笠原氏は、建築に携わる大工である番匠（ばんじょう）たちに一日ずつの作業を命じたり、寺領を安堵（保証）するなど、積極的に保護した。小笠原氏に続く歴代の松本城主も満願寺を庇護した。

幕府要人とのつながり

松本城主を務めた水野氏は、江戸城中での刃傷沙汰がもとで改易の憂き目に遭う。だが家名は残されて信州佐久郡七千石の領主から再出発した。

この水野家を再び盛り返したのが、水野出羽守忠友と、その養子となった忠成であった。忠友は一〇代將軍・家治に仕える中で頭角を現し、若年寄、側用人を歴任して老中



老中・水野忠成が描いた宝珠の絵（満願寺蔵）

まで昇りつめた。また駿河国（静岡県）沼津に領地を与えられ、幕府の命令でこの地に城を築いた。次代の忠成も一代將軍・家斉のもとで出世し、老中となっている。ともに朝廷から従四位下・侍従に任じられ、「沼津侍従」と称した。

満願寺にはこの「沼津侍従」と署名された宝珠の絵の掛軸が残されており、本堂正面に

掲げられた寺号額にも同様の署名がある。水野忠成の筆と考えられ、満願寺が老中と何らかのつながりを持っていたことが窺える。

参詣道・栗尾道と十返舎一九

江戸時代、満願寺は観音札所として安曇・筑摩両郡の人々の信仰を集めていた。寛文六年（一六六六）までに成立した信濃三十三番札所の二十六番に数えられている。また安曇野市域及び旧梓川村域にわたる川西三十四番札所も宝暦



藤森与兵衛建立の道標（穂高悠生寮前）

七年（一七五七）までに整えられたが、満願寺はその一番、巡拝の出发点となるにふさわしい寺であった。

今も、豊科の新田から満願寺へと向かっていった栗尾道の痕跡がわずかに残っている。沿道には元禄二年（一六八九）の銘が彫られた道標

が立つ。新田町村の庄屋・藤森与兵衛の建立という。栗尾道はこのほかにも何本か設定されていたようだが、現在は圍場整備などによる土地の改変で分からなくなっている。かつてはこれらの栗尾道を通って多くの参詣者が訪れたことだろう。

文化十一年（一八一四）には成相組の大庄屋・藤森善兵衛の案内で、江戸から十返舎一九が訪れている。一九はすでに、弥次さんと喜多さんの二人旅を描いた滑稽本『東海道中膝栗毛』を出版して人気を博していたが、この時は続編を執筆するための取材旅行であった。

信州栗尾山満願寺は、大同二年、田村將軍の開基にして、本堂千手観音、その外如意輪堂、焰魔堂、十王堂、すべて三十六堂、薨^{えが}をならべて、梁^{うつはり}に彫りものし、柱に画き、その結構いふばかりなし：

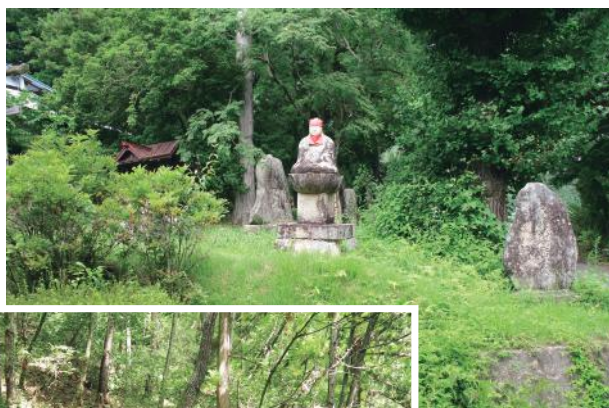
『続膝栗毛』にはこのように満願寺の威容が描かれている。満願寺は、松本城主のための祈祷を行う寺であるとともに、観音霊場として地域の人々の信仰を集めていたのである。明治初年、満願寺も松本藩の廃仏毀釈政策のため廃寺となる。だが満願寺出身の僧侶・丸山貫長らの尽力により明治十二年（一八七九）に復興を果たした。

満願寺を歩く

一枚の絵図



「信濃国栗尾山図」1892年（満願寺蔵）

参道のスタート
お地藏様

烏帽子岩

明治二五年（一八九二）、廃仏毀釈の復興から一三年経ち御開帳が行われた。その記念に「信濃国栗尾山図」が刷られ、その版木が残っている。今から一五〇年前の満願寺の姿を知る上で貴重である。豊科郷土博物館では、市民の皆さんと一緒に、この絵図を持って満願寺に向かった。

川窪沢川（別名栗尾沢）を渡る

橋を渡り斜面を登り終わると、一〇丁目の丁石を兼ねた地蔵菩薩像（寛政九年（一七九七年））が迎えてくれる。ここから本堂までほぼ一棧ちよつとの距離である。山ノ神を右にみながら歩いて行くと、烏帽子岩が右にある。昔の男子のかぶり物、「烏帽子」とよく似ている。弘法大師の石像



いよいよ境内へ

が納められる大師堂、法然上人を祭った法然堂を参拝して先へ進む。絵図には右手に死出乃山が描かれているが、参道からその頂上は見えない。

さいのかわら

右に別れ、杉並木、冠木門、その向こうに六地藏が見えてくる。ここ

からが境内である。北ノ沢に架かる微妙橋を渡る。三途の川、この世とあの世の境とされ、橋板の裏面には、梵字の経文が書かれ、お経橋とも呼ばれる。その傍にしだれ桜がある、絵図にも描かれており、樹齢は一五〇年以上になる。地蔵堂とその横の「川原地蔵」をお参りして、小石が積まれる賽の河原の横を通って参道を進む。

仁王門

急坂になり、道が細くなる。石垣が見え左に折れる。絵図にはここに冠木門（表門）が描かれており、かつてはここから境内であった。絵図では道は斜めに延びている、中房温泉に向かっていた。その先には制札場があり、左に折れ仁王門へ到着。門の額は「救療山」という額が掲げられる。山号「栗尾山」との関係は、気になるところである。きつい坂を登って行くとやつとお寺の建物が見えてくる。

本堂

大きな本堂（講堂）に到着。火災の後、一九世紀の前半に再建された建物である。「満願寺」の寺号額は、沼津侍従の筆による。かつて松本藩主であった水野氏が改易の後、沼津で復活し、老中になった時に水野忠成によって書かれ



本堂

本堂の西側に、長い石段が見える。その向こうは立ち入り禁止。かつてここには観音堂、「栗尾観音」、室町時代の終わりに建立された、大きな五間堂があった。残念ながら、戦後の火事で焼失してしまった。
 (逸見大悟、原明芳)

観音堂

本堂の西側にある。どうして、改易になった水野氏からいただいたのか、不思議。絵図が描かれて三年後に建立された聖天堂が西側にある。



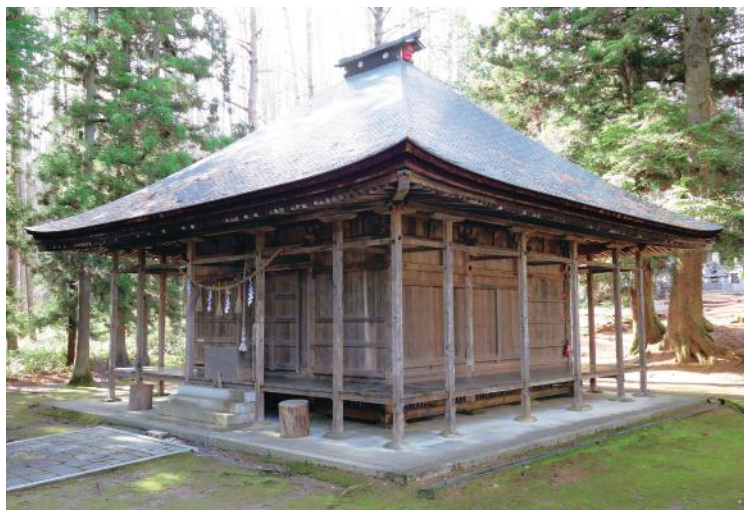
かつてあった観音堂（戦前の絵はがき（豊科郷土博物館蔵）より）

4 松尾寺

色かへぬ松尾寺なればおのつから

こゝにちとせをふるき霊場

十返舎一九の『続膝栗毛』に、こんな狂歌が載せられている。色を変えない常緑樹の松を寺号に冠している松尾寺



松尾寺薬師堂

なれば、ここにあるのは千年を経る、古い霊場だ、という意味である。松尾寺は『続膝栗毛』でも「栗尾の観音（満願寺）、松尾の薬師、宮城の不動（正福寺）」と並び称せられ、西山山麓の霊場として信仰を集めた。

仁科氏が建立した松尾寺薬師堂

『信府統記』によれば、松尾寺は弘仁二年（八一二）の創建、中興は大永八年（一五二八）で、仁科盛政が堂を建立したとする。室町時代に中興されたという伝承は、現存する薬師堂（本堂）によって裏付けられる。ただし、仁科盛政はこれより後の時代の人なので、古厩郷を領した仁科氏の支族・古厩の建立であろう。

薬師堂の建立が大永年間であることは堂内部の外陣板壁の墨書「甲州住人□信同道十人右□□ 天文三年□正月□日」から裏付けられるという。甲州（山梨県）に住む「□信」ほか一〇人が、大永八年から六年後の天文三年（一五三四）に当地を訪れた痕跡である。

薬師堂の規模は桁行・梁間ともに三間の寄棟造で、軒の出を非常に深くしている。建築



屋根を支える組み物



箱棟の鬼板

松本城主・水野氏の時代に描かれたとされる「信州安曇郡筑摩郡画図」には、「栗尾観音」（満願寺）とともに「松尾（寺）」が描かれている。栗尾観音は現在地より山奥の堂平から下りてきたと言いつたえられているが、この絵図が書かれたところには現在地にあった。対して松尾寺は、栗尾観音より高い場所に描かれている。薬師堂が室町時代の建立であったとしても、創建された場所から引き下ろされてきた可能性が考えられる。

山から下りてきた？真言宗寺院・松尾寺の江戸時代を支える巻斗^{まきと}が正方形であるのは、大町の盛蓮寺の観音堂に似ており、当時の安曇地方に建てられた寺院の特徴を反映しているといわれている。



満願寺より山奥にあったころの松尾寺（「信州安曇筑摩郡画図」（松本市立博物館蔵））

様式は、桁を支える実肘木^{さねひじき}の絵模様や、寄棟屋根の上の箱棟の両側に飾られた鬼板からも、室町時代の特徴が見て取れるという。また実肘木

『信府統記』が書かれた享保九年（一七二四）当時、医王山松尾寺は等々力町村の牛流山^{うりゅうざん}真龍院の末寺であった。真龍院も大規模な寺院であったが、仁科氏の流れを汲む古刹・松尾寺である。一地方寺院の末寺になった経緯については、今のところはわからない。

それから約七〇年後の寛政九年（一七九七）には、真龍院から独立し、山城国（京都府）の醍醐寺三宝院の直末となった。徳川幕府が全国の寺院を統制するために設けた本末制度の枠組みの中で、松尾寺は寺格の上昇を望んだようだ。文化十一年（一八一四）に出版された『続膝栗毛』では松尾寺の山号を「鶴尾山^{かくをざん}」と紹介している。あるいは、三宝院の直末に昇格したのを機に「医王山」から改めたものかもしれない。

十返舎一九は、『続膝栗毛』に松尾寺の狂歌を載せている。杓子^{しやくし}より薬師如来ぞありがたき

人をすくはせ給ふちかひは

食べ物^{すく}を掬う杓子よりも、人を救う十二の誓いを立てた薬師如来の方がありがたい、と述べる。穿^{うが}った見方をすれば、杓子は「釈氏」すなわち釈迦如来とを掛けているのではないか。薬壺を持って、病者をはじめとする困窮者に救いの手を差し伸べてくれる薬師如来の姿が、人々の信仰を集めた。寺格が上昇した背景には、民衆からの人気という下支えがあったようにも思われる。

（逸見大悟）

5 有明山の信仰と宮城不動

有明山は信仰の山である。

山体は、天照皇大神がお隠れになった天の岩戸を^{たちから}手力雄命が^{みこと}投げ飛ばしたものとされ、「戸放ヶ岳^{とはならがだけ}」の別名を持つ。また坂上田村麻呂が八面大王を退治する際にも、この地に祭られた「戸放権現」に祈願したと伝えられている。

有明山の開山

有明山では、山そのものを御神体とする信仰が受け継が



妙見滝



石門をくぐり抜ける登山道

明治六年（一八七三）には、扇町出身の倉田為吉が^{みやしろ}宮城の黒川沢から入る表口を開削した。沢を遡り、妙見滝、白河滝、石門などを経て、落合で馬羅尾口からの登山道と合流して山頂に至る。このルートは慶応三年（一八七六）

れてきた。現在の有明山神社でも、穂高神社から払い下げられた本殿はあるものの、祭礼の時も本殿の扉は開けず、拝殿の後ろの扉を開いて有明山を遥拝する。古来、御神体としての山を麓から遥拝する信仰形態があったが、江戸時代に入ると、山に入って修行する修験道が盛んになった。享保六年（一七二一）、板取村の修験者・宝重院^{ゆうじゅうかい}宥快らは、馬羅尾からの登頂に成功した。彼らが有明山の最初の登頂者とされる。



有明山中岳の奥宮での神事（平成23年（2011）7月）

に遭難者も出ている危険な山道であった。為吉は草の根や木の皮を食べ、そばがきで空腹をしのいだといい、一度は山中で失神したが信仰心によって蘇ったと伝えられることから、「木喰^{もくじき}天明行者」と呼ばれた。

これ以前の文化一二年（一八一五）には、田尻村と保高

村の行者によって、現在の有明荘の裏手から登山するルートでも登頂が果たされていた。以上の馬羅尾口、表口、裏口の三つのルートは今も登山者に利用されている。

また山頂付近のピークである北岳には松川村の有明神社の奥宮が、中岳と南岳には宮城の有明神社の奥宮が奉斎されている。

有明三社大権現から有明山神社へ

有明山の安曇野市側の里宮である有明山神社は、前身を有明三社大権現^{みやしろ}といい、江戸時代まで宮城の橋場地籍にあった。橋場から現在地に移り有明山神社と称したのは、明治に入ってからである。寺所出身の敬神家・岡村阜一^{ふいち}の尽力により、明治二年（一八八八）に移され、明治四年（一九〇八）までに一連の建築工事が竣工した。

この時に建てられた建物は、いずれも見応えがある。日光東照宮の陽明門を模して造られた裕明門は、明治三四年（一九〇一）の建築で、立川流彫刻師^{たてかわりゅう}の清水虎吉と大工棟梁の佐々木喜十が手掛けた。また格天井絵は京都の画家であった村田香谷、正面の随神は浜猪久馬・鑛一親子の作、背面両側の神馬は伊藤幸太郎の作である。

手水舎は飛騨の匠・山口権之正が手掛け、天井には龍の彫刻が樺一枚板に施されている。



有明山神社神楽殿の天井絵

同時期に建てられた神楽殿の小組格天井絵は、豊科の藤森桂谷が橋本雅邦らに呼び掛けて揮毫してもらったもので、五一名八一枚の日本画が天井を飾る。絵画、彫刻、建築とも、当代一流の作家の作品が眺められる神社として、美術的価値は高い。

宮城不動と岩上観音

有明山神社の東に五龍山明王院正福寺がある。言い伝えによれば、奈良時代の養老三年（七一九）、中房川南岸の狩闌山（狩闌山とも）の五龍滝から黄金の不動明王像が出現したため、仮堂を建てて安置し、高山寺と称したという。坂上田村麻呂による八面大王征伐の際にも、この不動明王に祈願してその目的を達した。田村麻呂は、八面大王の悪霊を防ぐため、彼らが籠った魏石鬼窟の上に観音堂を建てさせ、准胝観音像を安置した。のちに高山寺は焼失したが、戦国時代末期の天正一二年（一五八四）、松本城主・小笠原貞慶の庇護のもとで復興したという。

江戸時代に書かれた松本藩の地誌『信府統記』には、五龍山明王院として一項が設けられている。この中で、明王院の不動明王像と魏石鬼窟の上の准胝観音像が、ともに奈良時代の僧・行基の作であると書かれており、魏石鬼窟や岩上観音堂まで含んだ一帯が、明王院の寺域であったことが読み取れる。

現在、明王院の境内には安曇野市の天然記念物に指定された「正福寺の杉」が聳えている。胸高直径は一・八㍎、樹高は二・八㍎で、「子宝杉」と通称される。江戸時代後期、明王院は「宮城の不動」として十返舎一九の『続膝栗毛』にも取り上げられているが、ここに「貢おさ丸」こと藤森善

兵衛の狂歌が紹介されている。新田町村に住み、成相組の大庄屋を務めた有力者であり、一九とも親交のあった松本平の文化人である。

立ち杉はますぐにのびて明王の

利剣のなりにみやしろの山

不動明王が持つ利剣のように聳える真つすぐな杉。「子宝杉」を詠んだものかどうかはわからないが、宮城不動の御利益とともに、杉の名木が有名な寺院であったのだろう。

なお、明王院は明治初年の廃仏毀釈により一旦廃寺となる。その後再興の動きがあり、和歌山県の根来寺の末寺であった正福寺を引寺号として、五龍山明王院正福寺と公称した。



正福寺不動明王像

一方、岩上観音堂は、宝暦七年（一七五七）までに川西三十四番の四番とされた。准胝観音を安置する唯一の観音札所である。



魏石鬼の窟の上に建つ岩上観音堂

御詠歌

たづね入りのぼりむかへばみやしろの
（上）
（大悲）
いわのうへには大ひかゞやく

遥拝の対象から修験道の行場へと性格が変化した有明山、その修験道との関係は明らかではないが不動明王を安置する明王院、さらに坂上田村麻呂の伝説が付与されて魏石鬼窟の上に建つ観音堂、そして明治時代の美術を採り入れつつ整備された有明山神社。有明山とその周辺は、様々な特徴を持つ寺社が集まる宗教空間である。

（逸見大悟）

6 廃仏毀釈と復興する寺院

松本藩による廃仏毀釈

徳川幕府滅亡後の明治二年（一八六九）、諸大名は新政府に土地と人民を返上する版籍奉還はんせきほうかんを行った。これに対して新政府は改めて諸大名を知藩事ちはんじに任じ、その領国支配を承認したのであった。松本城主・戸田光則も同様に松本藩の知事となり、藩政改革に着手する。なかでも特徴的だったのが廃仏毀釈である。

明治新政府は、国の宗教を神道とするため、中世以来の長い歴史の中で融合していた神と仏を峻別する神仏分離令を発していた。それは飽くまで神と仏との識別であって、仏教を排斥する意図はなかったが、一部の敬神家や神職らの活動により、寺院や仏像を破却して僧侶の地位を取り上げる廃仏毀釈へと広がっていったのである。

この動きは松本藩に大きな影響を及ぼした。戸田知藩事は自らの菩提寺の全久院を廃し、率先して藩役人や領民の神葬祭への改宗を進めた。『松本市史』によれば、松本領内にあった一六四ヶ寺中、一二四ヶ寺が廃寺になったという。

穂高地域に及んだ廃仏毀釈の嵐

廃仏毀釈によって廃された寺院は穂高地域にも多い。真言宗の栗尾山満願寺、牛流山ごりゅうざん法雲寺真龍院、鶴王山松尾寺、曹洞宗の穂高山宗徳寺、梅林山正真院、安養山青原寺など、大小ほとんどの寺院が廃寺となった。

寺院の建物の多くは、学校に転用された。真龍院や真福寺などは、研成学校の支校として活用されたし、正真院の伽藍は山門を残して取り壊されたが、隠宅は有明学校の校舎として移築されたという。

復興する寺院

現在、穂高地域にも中世以来の古刹がみられるが、それは明治期前半に多くの人々の努力があったからである。

栗尾山満願寺の復興は、豊科熊倉出身の丸山貫長によってはじめられた。貫長は安政五年（一八五八）、一六歳の時に満願寺で得度した後、大和国（奈良県）の長谷寺で修業を積んでいた。満願寺が廃寺になったことを聞いて明治九年（一八七六）に帰郷し、復興のために観音講社をつくつ

て資金を集めた。同一年（一八七八）、貫長は大和の室生寺の復興のために再び信州を後にするが、後事を託された兄弟子の古幡貫善が、長谷寺の塔頭の良興院を移す形で翌一二年に復興を果たした。「満願寺」の寺号に復したのは、明治四二年（一九〇九）のことである。



宗徳寺（穂高）

宗徳寺は、明治六年に柏原村に開校した研成学校の穂高支校として転用された。同六年には穂高美学校として独立するが、一方で、敷地内では寺院再興の動きが始まっていた。明治一三年（一八八〇）、一五世の大磯良道は仮本堂を設けて復興に着手し、一七年には長野県令の許可を得て穂高山宗徳寺を再興した。

等々力の東龍寺もまた研成学校の等々力支校として利用されていたが、明治一二年の等々力の大火で本堂が焼失してしまった。東龍寺の前住職・若宮快龍は、この惨状を見て再興を思い立つ。快龍は明治一九年に境内地を買い受け、独力で庫裏を建立した。二四年には長野県知事の許可を得て山梨県下の東光寺からの引寺号により再興を成し遂げたのである。

廃仏毀釈は安曇平の多くの文化財を破壊した。だがその姿を今に留める寺堂伽藍は、復興に尽力した僧侶や檀信徒の足跡を静かに伝えている。

（逸見大悟）



東光寺（等々力）

7 本陣等々力家

穂高近辺には、等々力という名字が多い。拾ヶ堰を開削した等々力孫一郎は柏原村の住人であつたし、豊科南穂高の重柳の轟家も江戸時代には等々力を名乗っていた。ここでは等々力区にある本陣等々力家（屋号 本等）を紹介する。

等々力の地名の語源は「轟く」といふ。この辺りは穂高川や万水川、犀川も近く、大水の際の川瀬の音に因んだらしい。また大正時代にはワサビ畑が開かれる湧水地で、小さな川が何本も流れている。中世にはこのような低湿地を利用して開発が進められたようである。

仁科氏の被官として活躍

等々力氏が史料上に初めて登場するのは、室町時代の応永七年（一四〇〇）のことといわれる。仁科氏ら信濃の在地領主たちが信濃守護・小笠原氏に対抗した大塔合戦では、仁科氏の配下として「戸度呂木」氏が参加していた。その後も等々力氏は仁科氏に仕えていたようで、戦国時代の文書にも仁科氏の被官（家臣）として等々力豊前守定厚が登



欠の川と等々力城跡

場する。また、仁科五郎盛信が安曇郡の武士たちに指示を出した文書（安曇野市文書館蔵・等々力家旧蔵）は等々力次右衛門尉に宛てられており、盛信の指令は等々力氏を通じて武士たちへと伝達されていたことがわかる。仁科盛信が安曇郡を統治していたのは、武田氏が天正一〇年（一五八二）に滅亡するまでの数年間であつたと考えられるが、この間、等々力氏は仁科家中で大きな権力を持っていたことであろう。

なお、本陣等々力家の西北、欠の川沿いの小高い場所に等々力城跡がある。また現在の穂高公民館付近には北城（貝梅城）が築かれており、ともに低湿地の中の小高い場所を利用した等々力氏の城であつた。

「本陣」等々力家

等々力村には、松本藩の鴨の狩猟場があつて、江戸時代には松本城主も狩猟に訪れていたという。等々力家はその城主の休憩所として利用されたため「本陣」と呼ばれた。

水野氏が松本城主として統治していた一時期、等々力村は松本藩領から外れ、分家の水野^い壱岐^き守忠定領一万二〇〇〇石に組み入れられた。この水野御分家^{ごぶんけ}が領地を実質的に支配するようになったのは、正徳四年（一七一四）のことと考えられる。安曇郡では等々力村のほか狐島、一日市場、七日市場、住吉、田尻の六ヶ村、筑摩郡では南栗林、野溝、笹部、永田の五ヶ村が編入された。等々力家はこれら一ヶ村をまとめる組手代の役割を担っていた。

安曇野市文書館には「等々力家文書」一九三二点が収蔵されている。ここに興味深い古文書がある。

水野本家が分家領を切り離した直後の正徳四年九月、松本藩では穀^こ留^どめを実施し、水野御分家領を含めた他領と穀物を売買することを禁じた。等々力村など水野御分家領の村々には穀物を売買できる町場がなく、この決定は死活問題であった。一ヶ村は松本藩に穀留めをやめるようお願いしたが聞き入れられず、ついに江戸へ出て、老中への駕籠訴を行った。この決死の訴えが実を結び、正徳六年には穀留めをやめさせるという幕府評定所の裁定を勝ち取った。

この老中への直訴を断行した五人の筆頭に当家の等々力理右衛門の名がみえる。松本平に散らばっていたこの一ヶ村をまとめ、江戸への出訴を成功させた理右衛門の行動には、組手代として百姓たちの生活を守る責任感を感じられる。

文化財としての本陣等々力家

等々力家の正面の長屋門は切妻造りの平屋で、江戸後期の建築といい、市の有形文化財に指定されている。また母屋には殿様座敷などと呼ばれる四部屋^{しふぶ}が設えられ、須弥山石^{しゅみせんし}組みの庭園には松や百日紅^{さるすべり}などの樹木を植えている。母屋や庭園は江戸中期の作という。中でもビヤクシンは幹回り二・九三^ぶもある巨木で、市の天然記念物に指定されている。安曇郡の豪農の姿を今に伝える文化財である。

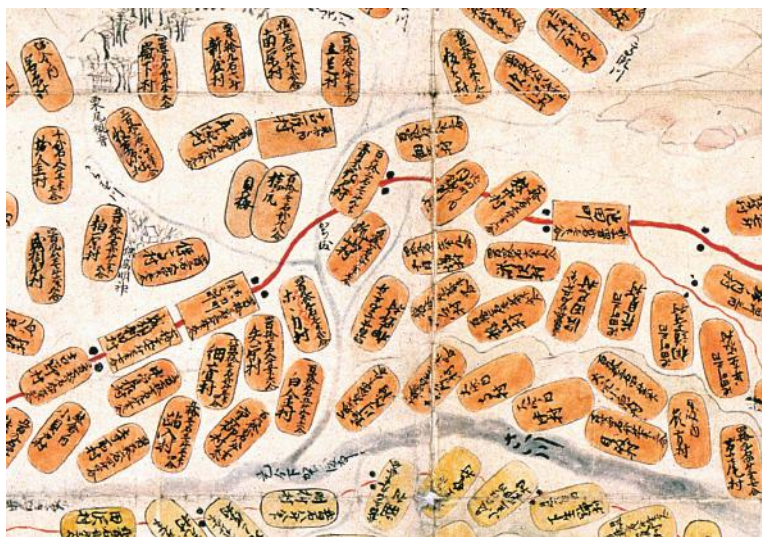
（逸見大悟）



等々力家の長屋門

8 糸魚川街道と保高宿

善光寺街道の旅を描いた滑稽本『続膝栗毛』。作者の十返舎一九は、その取材の旅で「善光寺にいたるに、松本より糸魚川街道へ出、栗尾松尾宮城などいへる霊場」へと向かった。



「信州安曇摩郡画図」(部分)
(松本市立博物館蔵)

江戸時代末期に出版された『善光寺道名所図会』^{ぜんこうじみちなしょずえ}でも「安曇郡の内は脇道なれどもこの序に名高く聞こえし所々を挙げ」て、穂高神社や穂高岳、満願寺などを紹介している。

このころ、松本から会田、青柳、麻績などの宿場を経て善光寺平に至る本街道も参詣者で賑わったが、名高い神社仏閣が点在する安曇郡を通る糸魚川街道も往来が盛んであったようだ。

糸魚川街道の変遷

明治七年（一八七四）の調査によれば、松本を発した糸魚川街道は、新田町村を経て保高町・等々力町の両町を通っている。貝梅村で穂高川を渡り、青木花見、青木新田、島新田、立足の各村を抜け、細野、松川、須沼、上一本木、下一本木を経て大町に至る。松本から糸魚川までの里程はおよそ一二〇里であった。

この街道の呼び名は、仁科街道、北国街道、北国脇往還、越後街道など、村によって異なっていた。公式に「糸魚川街道」と名称が統一されたのは、明治二〇年代のようだ。

このほか、島新田から高瀬橋を渡り、十日市場村、池田

町村を経て大町に続く大町道も糸魚川街道（支線）とされている。

江戸時代の前半、水野氏が松本城主であったところに「信州安曇筑摩郡画図」が作成されている（前頁参照）。ここには青木花見から高瀬川を渡り、内鎌^{ないがま}新田、林中、池田町といった高瀬川左岸の村々に街道を示す赤線が描かれており、これが本線と考えられていた。江戸時代に三回作成された「正保信濃国絵図」（正保四年（一六四七））、「元禄信濃国絵図」（元禄一四年（一七〇一））、「天保信濃国絵図」（天保九年（一八三八））でも同様なルートが描かれており、明治以前には高瀬川左岸ルートに主要道があったことがわかる。

冒頭に紹介した『続膝栗毛』でも、主人公・弥次さん喜多さん一行は、西山山麓の宮城不動に参詣したあと、この街道に出て高瀬川を渡り、池田町村で一泊している。

千国道

中世、安曇郡を縦貫する街道といえは千国道であった。千国道は複数あり、特に穂高郷の東を通る道は千国大道と呼ばれた。この道が糸魚川街道と呼ばれる向きもあるが、必ずしも一致してはいない。

『穂高町誌』や『南安曇郡誌』では、穂高郷より北は、貝梅から穂高川を渡って耳塚や古厩を通り、松川へ抜けてい

たと考えているが、穂高郷より南のルートについては諸説あり一定しない。

古厩郷は中房川から分かれた油川の水を引いて開発された郷村である。江戸時代初め、古厩郷と呼ばれていた地区には、今も中房川を水源とした町川が流れている。これに沿って走る南北の道が、かつての千国道だといわれている。

江戸時代、沿道には阿弥陀堂や庄屋の屋敷があり、今も郷蔵跡の標柱が立つ。これより北、道が鉤^{かぎ}の手に曲がったところに高根社が建てられていた（現在は大宮神社の境内に移されている）。鉤の手は、外敵が攻め寄せて来た際に、曲がり角で寄せ手の勢いを弱める役割を持たせた防御施設



高根社跡の手前で鉤の手に曲がる千国道（古厩）



古厩の郷蔵跡に置かれた力石
「三十二メ（貫）め古まや」と刻まれる。

である。古厩町の西には、掘がめぐらされた古厩氏の館があったというが、これと一体の防御施設とを考えても良いだろうか。

なお、西山山麓には宮城、新屋、牧、田多井、小倉をつなぐもうひとつの千国道があった。弥次さん喜多さんが訪れた宮城不動や松尾寺、満願寺などもこの周辺にある。信仰の道としての性格が強い千国道である。

保高宿のようす

千国道そして糸魚川街道は、経路の変遷こそあれ、大町と穂高、さらに松本方面へと人や物の流れをつなぐ道であった。保高宿（穂高宿）は、その街道に整備された重要な宿場のひとつである。

『善光寺道名所図会』にも次のように紹介されている。

此町の中央を小川流るゝ。左をほたか町村、右をとぐりき町村といふ兩次なり。七丁程相對して巷をなす。

「兩次」とは、異なる村が同じ宿場を成していることを意味するものか。松本方面から見ると、街道を挟んで左側（西側）が保高町村、右側（東側）が等々力町村である。

通りの中央を流れる小川は、矢原堰を延長した新堰の末流である。ほとんどの水が宿場の手前で欠の川へと放流されるが、一部が呑堰（生活用水路）として両町の間を流れ



寛政年間（1789-1801）の絵図に描かれた保高宿（個人蔵）
（赤線が道、宿場の中央を「矢原堰流末」が流れる。）

は、松本の城下町などにもみられ、外から入ってくる災厄から地域を守る役割を持たせていたと考えられている。今も享保一六年（一七三一）造立の青面金剛の石像や文政五年（一八二二）造立の二十三夜塔などがみられ、この一帯が信仰や葬送の場でもあったことが窺える。

一方、宿場の北にも鉤の手が設けられていた。ここに

ていた。

宿場の南の端には鉤の手が設けられ、そのすぐ東の墓地は、「地王堂原」があり、かつては十王堂が建てられていた。町や村の内と外とを区切る場所に十王堂が置かれていた例

も寛政一〇年（一七九八）造立の双体道祖神や万延元年（一八六〇）造立の二十三夜塔などが立ち並んでいる（一四五頁写真参照）。鉤の手と信仰の場、軍事的にも精神的にも宿場を守る役割を担った場所があるというのは興味深い。

保高宿を通った物資

戦国時代から明治時代まで保高宿の間屋を勤めていた井口家は、北の池田宿や南の新田宿の間屋への荷物の継ぎ送りを担っていた。

糸魚川方面からは塩や海産物の四十物あいのもののほか、年取り魚の生鰯が直送されていた。大町方面からは麻や煙草など、松本からは生活用品が行き来していた。

明治時代に入ると、運送馬や舟運により近隣はもとより、さらに遠隔地へと運ばれるようになった。酒や煙草、鶏卵や米などの食料品は近隣の町村で消費されるために出荷され、山繭糸は美濃国岐阜や越後へと運ばれた。なかでも生糸や蚕卵紙は武蔵の横浜まで輸送され、外国へ輸出された。

折しもヨーロッパでは一八四〇年代から蚕の微粒子病が流行していた。江戸幕府が欧米五ヶ国との間で修好通商条約を締結して貿易ができるようになってからは、病気の多い日本の蚕種の需要が高まっていた。そのため蚕の病気が沈静化する明治七、八年（一八七四、七五）ころまでは蚕卵

紙が盛んに生産されたが、それ以後は生糸の輸出が増加したため、糸繭の生産が一般的になっている。

やがて明治三五年（一九〇二）の篠ノ井線開通、さらに大正四年（一九一五）から翌五年にかけての信濃鉄道の開通により、物流はさらに活発化した。だが安曇郡を南北に移動する物流の担い手は、糸魚川街道を歩く人や馬ではなく、鉄道へと変わっていくのである。

（逸見大悟）



保高宿の十王堂敷地内に立つ青面金剛像と二十三夜塔（等々力町）

9 用水堰と水田開発

自然流を利用した灌漑

古来、安曇平では、北アルプスの前山から流れ出る沢水を農業用水として利用してきた。水田が開発されたのは、稲作に適した土（耕土）が三〇〜七〇センチと厚く堆積する地域である。穂高地域では、大坪沢などの水を利用して柏原郷が開発された。

有明地域を流れる油川は、中房川から分かれた自然流であった。現在、中房川からの取入口にはコンクリートの堅牢な水門が構築されているが、昔は巨石が立てられて水門を補強していたという。この川は現在の穂高北小学校の北側まで西から東へ流れているが、そこからは南へと向きを変え、天満沢へ流れ落ちる。古厩や耳塚を灌漑するために



油川の取入口（宮城）

流路が曲げられたと考えられる。

横堰の開削へ

中世までに開かれた堰には、高い

ところから低いところへ流れる縦堰が多い。だが近世に入ると、ほぼ同じ高さを保って流れる横堰が大规模に開削されるようになった。その背景には、さらなる水田開発が必要になったことが挙げられる。より多くの耕地を求めて、耕土の浅い地域へも水田を広げる必要があった。また従来の縦堰には水温が低く苗が傷みやすいという欠点もあった。水を温めながら同じ高さをゆつくりと流れる横堰なら、従来の水田でも増産が期待できた。このような需要に、測量や土木技術の向上が伴って横堰の開削が進んだのである。

矢原堰の開削

穂高地域で最初に開削された横堰は、矢原堰である。豊科の熊倉の段丘の下から取水して細萱集落の西で除沢の上に樋（水路橋）を架けて流す。この辺りから烏川扇状地の五四五の等高線上を北流させた。当初は大坪沢を終点としたが、のちに新堰が延長され、現在は穂高神社の北で欠の川へと放流されている。ここまでの総延長が八・三、平成二七年（二〇一五）現在の灌漑面積は四一六・二に及んだ。



除沢の上にかかる矢原堰の水路橋

当初、松本藩が工事に着手したが失敗する。そこで矢原村庄屋の白井弥三郎が藩に願ひ出て開削を買って出た。百姓に工事を任せることを渋る藩の役人に対し、弥三郎は自宅の庭の栗の木を伐って工事の難所と見込まれる場所に立て、もし失敗したらお役人様のお手を煩わせるまでもなく、自ら礫柱に上ります、と言って覚悟を示した。それを聞いた百姓たちは「弥三郎様を殺すな」と奮起して開削が成功したという。承応三年（一六五四）のことである。

拾ヶ堰の開削

矢原堰より高い標高五七〇㍑付近を流れる横堰の拾ヶ堰は、江戸後期の文化一三年（一八一六）に開削された。拾ヶ堰は当初から灌漑されていた一〇ヶ村から命名された「拾ヶ村最合新堰」の略称だったが、「柏原堰」とも呼ばれていた。ことほど左様に、計画の当初の目的は、柏原村に水を引くことにあった。この村の北部は古くから開発が進んでいたが、南部は耕土が浅く、また「黒ボク（または黒ぼ

へ）」という稲作に不向きな土壌が広がっていた。だが経験的に奈良井川や梓川からの水を引くことで地味が改善されるということを知っていたため、開削を思い立ったのである。保高組大庄屋代番の等々力孫一郎や柏原村元庄屋の中島輪兵衛、さらに勘左衛門堰などを改修した実績を持つ下堀金村作世話役の平倉六郎右衛門らが中心となって、何度も現地調査や測量を行い、農閑期の二月から五月上旬までに全長約一五㍎もの長大な堰を完成させた。

以後、穂高・堀金・豊科地域では水田面積が大幅に増えた。また烏川からの水を利用していた保高村などの拾ヶ堰の水を使うようになる

と、冷たい水とはいえ、烏川の水に余りができた。これを利用して拾ヶ堰より高い、上原や塚原、久保田や田中でも開田が進められた。

横堰の開削が灌漑される村だけでなく、その周辺の村々へも大きな影響を与えた好例である。

（逸見大悟）



柏原地域を灌漑する拾ヶ堰（柏原）

重要文化財 曾根原家 有明新屋

一七世紀中頃の民家建築

通称広域農道の「有明」の信号機から、塩尻鍋割穂高線を西へ四〇〇ほど進むと、屋敷林に囲まれた、石置き板葺き屋根の曾根原家住宅が見えてくる。住宅の周りには田畑が広がり、その佇まいからは、松本藩松川組新屋村の庄屋を務めた往時の面影が偲ばれる。



曾根原家住宅（新屋）

曾根原家住宅が建てられたのは、一七世紀中頃と推定される。この時代に建てられた民家で現存している例は、全国的にも稀少で極めて重要であるとして、昭和四八年（一九七三）六月二日、国の重要文化財に指定された。

昭和五二年（一九七七）には、文化庁の指導のもと解体修理工事が行われた。解体された建築部材

には、記号がふられ、加工や摩耗の痕跡、柱や梁の小さなキズ、ホゾ穴、柱痕などの詳細な観察と調査が行われた。その結果、曾根原家住宅は、建築された当初から何回かにわたり、間取り変更などの工事が繰り返されてきたことがわかった。また、それとともに建築当初の姿もほぼ明らかになってきたことから、この修理工事で可能な限り、当初の姿に復元されている。

曾根原家住宅の屋根

曾根原家の屋根は、昭和の初めに瓦葺きとなったがそれ以前は板葺きだったと伝わっていた。それを裏づけるように、瓦の下からは以前の板葺き材が見つかった。さらに一般的な板葺き屋根の民家に比べ三〇センチほど長い九〇センチの材が使われていたこともわかってきた。これらの材は、「みかん割り」という方法で、玉切りされた丸太から、次のように製材された。

① 直径五〇～六〇センチ 長さ九〇センチの玉切りした丸太を、ナタ、木製くさび、かけや、木槌を使って、縦に半割↓四分の一↓八分の一に割っていく。

② 「①」の材から柔らかい外側の白太部分を除き、硬い赤身部分を、包丁と呼ぶナタ状の工具と木槌を使って割る。後半は、包丁の歯を入れ、「へぎ」という方法で厚さ六^ミになるまでに割いていくことから、この板を「へぎ板」と呼ぶ。なお、へぎ板の平均幅は一二^{センチ}程とされた。この加工方法の利点は、木材の繊維を壊さないため、表面を鉋^{かん}かけた材よりも、水をはじき腐りにくい特性がある。なお、屋根材として幅が狭く使用できない材は野地板として、また最後に残る断面三角形の芯材は、屋根に載せる石の止めとして使っている。

これら屋根材に使う樹種は、現在の曾根原家では、杉材（その前が榎）を使っているが、昔はあまり拘らず大雨で上流から流れてきた木を割って備蓄し、補修材として使っていたという。中でも最も重宝された材は、生のうちは割り易く、乾燥すると腐りにくく丈夫な栗材であったようだ。

③ 曾根原家の大屋根の勾配は、一〇分の二・五と他の板葺き民家に比べ緩やか（他の民家は一〇分の三）になっている。へぎ板は、軒口のみ三枚重ねし、二枚目六^{センチ}、三枚目以降は九^{センチ}とずらして葺いていく。また、現在、へぎ板は所々釘で留めているが、昔は釘を使わず、重なり合う重さだけで葺いていた。ちなみに当時の釘は、一本一本小鍛冶で作っていたため、大変貴重で、現在の建築のように使えば、建築費の約二割が釘代になるぐらい高価だったとい

う。屋根裏の野地垂木^{のじだるき}を麻紐で固定している様は、正にその表れである。

④ へぎ板の露出部と差し水の影響を受ける先端から一五^{センチ}余りは、どうしても腐食が進んでしまう。そうした状況が顕著になった場合は、へぎ板の差し替えを行う。その方法は、一回目は裏返し。二回目は上下替え。三回目は裏返し。と、四回にわたり使用できる。その後は、腐食部分を切除し、屋根峰近くの調整用のへぎ板として使用していた。よって、落ち葉清掃と雪解け後のメンテナンスをきちんと行えば、百年余りもつとわれている。

なお、板葺き屋根は、全面葺き替えとなると屋根職人の力を借りないといけないが、部分的な差し替えであれば、素人でも簡単にできるのも特徴である。

曾根原家は、屋根だけを見ても、先人の知恵がたくさん詰まった文化財だということがわかる。（山下泰永）



へぎ板（長さ3尺）の加工

1 碌山を巡る人々

荻原守衛を支えた人々

日本の近代彫刻の祖として、わが国の美術史に名を刻む荻原守衛は、その短い人生の中で様々な人々と交流している。ここでは故郷安曇野の人脈に注目し、彼の人生を紹介したい。

明治一二年（一八七九）、東穂高村矢原に生まれた荻原と、同じく東穂高村白金の先輩である相馬愛蔵とその妻良



荻原守衛

との交流は生涯を通してのものであった。

「相馬兄を訪 桑摘みなす姉 良子の君と對談数刻 女学雑誌の事より宗教上信仰の堅と否の事に付き談あり（ア、才智ある婦女子の會話は実に喜しきものなり）」

荻原守衛の日記『つくまのなべ』（明治三三年（一八九九）五月三〇日）の記述である。相馬兄とは、相馬愛蔵、姉良子とは、相馬愛蔵の妻良（黒光）のことである。この時、荻原守衛は一九歳、矢原の自宅から、白金の相馬家に相馬愛蔵を訪ねると、相馬良が蚕の世話のために桑の葉を摘んでいた。そこでしばらく、購読している雑誌『女学雑誌』やキリスト教の信仰について話をしたことを日記に記している。年頃の青年らしく、異性との会話を喜ぶと同時に、先進的な考えを持った都会の大人への憧れを正直に記している。

矢原の荻原家から、白金の相馬家まで、実際に歩いてみると良い。さらに矢原の研成義塾の跡地（現在の矢原公民館）も含め、実に近い距離で臼井吉見の小説『安曇野』の舞台が始まる事に驚かされる。

相馬家へ嫁いだ良は、長尾奎太郎の油彩画《亀戸風景》を持参していた。これがおそらく安曇野に伝わった油彩画

の最初期のものであろう。写実的な描写は萩原の心を打ち、画家を志すきっかけとなった。

日記「つくまのなべ」に記された萩原を取り巻く人々の中で、相馬夫妻や井口喜源治の他に、しばしば登場する人物に望月直弥がいる。望月直弥の父は望月硯斎、祖父は望月章斎である。望月章斎は狩野派の画家であった。相馬黒光の著書『穂高高原』には章斎のエピソードが紹介されている（雀の章斎さん）。望月硯斎も章斎に学んだ画家で、安曇野市内の多くの神社の絵馬を手掛けており、今でもそれらの絵を観ることが出来る。その子である直弥もまた、雅章の画号を持つ画家であった。望月は東京の橋本雅邦に学んだといわれており、信州に戻ってからは各地の学校の美術教員をしていた。望月とおして、穂高時代の萩原は中央画壇の情報を得ていたのだろう。

「明けても暮れても巨大な山岳にさえぎられ、大きな家の煤けた梁の下にいてそれぞれの境涯はせまく、あかるい直観を欠き、あたらしく来て加わった者には各自の批評が窮屈にせり合う。」「芸術的雰囲気のみわめて薄く感じられるこの高原のうら寒い街道」（相馬黒光『穂高高原』一九四四）

相馬黒光の『穂高高原』に描かれた安曇野の情景は、どこまでも陰鬱で辛辣な言葉が並ぶ。仙台の元士族の家庭に

生まれ育ち、フェリス女学院、明治女学校に学び教養を備えた女性には、この時代の穂高は耐えがたい辺境の地であったのだろう。

東京専門学校（現在の早稲田大学）在学中にキリスト教



長尾空太郎《亀戸風景》（個人蔵）

の洗礼を受けた相馬愛蔵は、穂高に帰郷してから東穂高禁酒会を興し、村の青年たちに禁酒を勧めた。禁酒会は当初は宗教上の強制はなかったものの、相馬を兄と慕った荻原もキリスト教への関心を深めていくことになる。相馬と松本中学校時代に同学年であり、明治法律学校（現在の明治大学）を中退して小学校教諭となっていた井口喜源治もまた、禁酒会に参加し、キリスト教への関心を高めていた。

荻原は井口らとともに初めて上京した折には、黒光の恩師である明治女学校の巖本善治を訪ね、ますますキリスト教への志向を深めていった。明治三年（一八九九）一〇月、荻原はこの巖本を頼って上京し明治女学校の小庵に暮らしながら、小山正太郎の画塾・不同舎で学んだ。

穂高で養蚕業を営み、養蚕に関する著書も刊行していた相馬愛蔵は、妻とともに上京し、東京帝大前のパン屋・中村屋を買い取り、開業してからは、中村屋の発展に商才を発揮していった。

不同舎で学んでいた荻原は、さらに本場で絵画を学ぶことを望み、明治三四年（一九〇一）にニューヨーク、明治三六年（一九〇三）にパリへと渡ることになる。渡航にあたっては、兄弟から支援を得たものの、滞在にあたっては彼の地で働きながら、学ぶというものであった。ニューヨークでは幸いにも富豪フェアチャイルド家の学僕として働く



相馬黒光

ことができ、生活の安定を得て画家の修行に打ち込むことができるようになった。

パリへ渡った荻原は、オーギュスト・ロダンの《考える人》に出会い、その感動から彫刻家へ転じることを決める。しかし、学資が尽きた荻原はニューヨークへ戻らざるをえず、働きながら彫刻の基礎となる解剖学を学ぶ。この頃、画家柳敬助や彫刻家高村光太郎と知り合い交友を結ぶことになり、彼の人生に影響を与えている。明治三九年（一九〇六）に再度パリへと渡ると、アカデミー・ジュリアンの彫刻部で研鑽を積み、さらにロダンを訪ねて直接指導を受け、彫刻家としての歩みを進めている。この頃から「碌山」を号するが、これは夏目漱石の小説『二百十日』に由来している。荻原はこの小説を愛読し、パリで親友となっ

た画家齋藤与里と互いに「碌さん」「圭さん」と呼び合っていたという。

明治四一年（一九〇八）に帰国した荻原は、兄の本十の支援を受け、新宿にアトリエを構えている。新宿には中村屋の支店があり、パン屋の業務を手伝うこともあったようだ。中村屋にはいわゆる「中村屋サロン」が形成され、荻原と彼を慕う若い芸術家が集うことになる。

有明立足出身の山本安曇（本名菊一）は、東京美術学校で铸金を学んでいた頃から、同郷の縁から荻原の作品の铸造を手掛けていた。荻原から山本への手紙が残っている。



重要文化財 荻原守衛《北條虎吉像》石膏原型
(碌山美術館蔵)

「此間はお手紙と入場券難有ふ。昨日相馬家一同拝見に参りました。御世辞のない所铸造科が最も振つて居た。次に木彫がいい。君の（作品）中々おもしろいハンドルもいゝ、益々大にやるべしだ。（略）暇があつたら遊びに来たまへ。」

（一九〇九年三月三十一日山本菊一宛書簡）

山本から送られた東京美術学校卒業制作展の入場券を使って、展覧会を観た礼状である。山本の作品を褒めて、暇ができたら遊びに来るよう来訪を勧めている。

ほかの葉書にも「僕は毎金曜午後太平洋画会に当番だから遊びに来たまへ、試験はどうか、初まつたか」（一九〇九年六月十二日山本菊一宛書簡）とあるように、山本に対して一方ならぬ世話を焼く様子がわかる。

山本安曇は、やがて、母校の東京美術学校铸金科の教授を務めることになる。工芸の近代化に力を注ぎ、高村光太郎の弟で铸金科の高村豊周や、漆工科の山崎覚太郎とともに「无型」と名付けた工芸グループに参加し、日本の工芸界に新しい様式を取り入れていった。彼らの運動は、絵画・彫刻に比べて一段低いと見なされていた工芸の地位を向上させ、帝展に工芸部が設置される原動力となった。

山本安曇は荻原の《北條虎吉像》《宮内氏像》《女》などのブロンズ铸造を手掛けている。このうち《北條虎吉像》と《女》の石膏原型は重要文化財に指定される作品である。なお、石膏原型の《北條虎吉像》は碌山美術館、《女》は東

京国立博物館に収蔵されている。

《北條虎吉像》は、兄本十の友人の実業家北條寅吉をモデルに制作したもので、明治四二年（一九〇九）の第三回文展で三等賞を得ている。また、《女》は荻原の絶作となった作品で、明治四三年（一九一〇）、荻原死後の第四回文展に出品され文部省買い上げとなった作品である。

近代彫刻で、一人の作家の作品で重要文化財に指定され



荻原守衛《女》（碌山美術館蔵）

る作品が二点ある作家は荻原を除いていない。このことは日本の近代彫刻にとって、荻原がいかに重要な位置にあるかを示している。《女》のブロンズは碌山美術館の他にも、東京国立近代美術館・東京藝術大学などにも収蔵されている。山本安曇が鑄造して文展に出品した作品は現在、東京国立近代美術館に収蔵されている。なお、《女》の足元には「碌山作 安曇鑄」と銘が刻まれている。

（三澤新弥）

2 高橋節郎

画家としての高橋節郎

北穂高に多い高橋姓のなかで、「大東」を屋号としたのが高橋節郎の生まれた家であった。高橋同姓の中でも、とりわけ東に居住していたため、大東の屋号となったようだ。国の登録有形文化財に登録された旧高橋家住宅は茅葺の主屋と三つの土蔵から構成されるが、そのうちの「南の蔵」の白壁に、この屋号が記されている。

高橋節郎の祖父にあたる高橋未得（秋風庵未得）は、俳句を嗜む文化人であった。未得を顕彰する石碑が旧高橋家住宅の西の道路沿いに残っている。狐島の白狐神社に伝わる俳文による絵馬も未得の手によるもので、狐島の文化に



高橋未得の句碑

足跡を残している。

この大東の家に、松本電鉄創業家の瀧澤家から婿養子として迎えられたのが高橋太一である。高橋太一は近衛兵を勤めた後、銀行員として県内各地で勤務している。太一は美術を愛好し、近衛兵時代に知己を得た結城素明と親交を重ねていた。結城素明は東京美術学校の教授であり、後に日本芸術院の会員となる日本画家であった。なお、結城素明の東京美術学校の教え子の一人が東山魁夷である。太一はこの結城素明を北穂高に招き、幼い節郎を伴い、共にスケッチ旅行に出かけることもあった。この他にも、石井柏

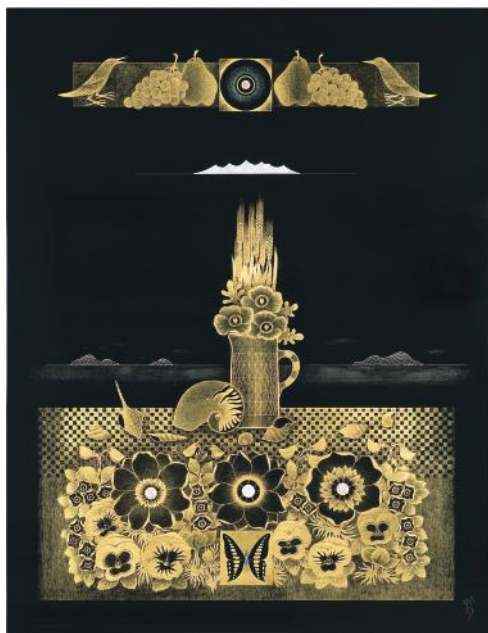


安曇野高橋節郎記念美術館旧高橋家住宅・南の蔵

亭や中村善策といった中央で活躍する画家たちが、北穂高を訪れている（詳しくは『明科の宝』参照）。なお、太一は画家として高橋大東を号していた。

文化を愛する「大東」の主人が二代続いたこともあり、高橋家には多くの美術工芸品が集まり（これらは安曇野高橋節郎記念美術館に引き継がれている）、美術を愛好する父の下で、それらに囲まれて育った節郎が画家を志すようになるのも自然なことであろう。素明や太一がスケッチする姿は節郎少年の心に深く刻まれたに違いない。

高橋節郎が東京美術学校への進学志望を父親に打ち明けた時、あろうことか美術を愛する太一は猛烈に反対する。どうしても美術学校へ進学したい節郎は、結城素明から「工



高橋節郎《四季物語》
（安曇野高橋節郎記念美術館蔵）

芸であれば手に職をつけることができるであろう」との助言を得て、父親を説得している。

東京で受験に備える節郎に、太一が送った手紙には、息子の合格を願う父親の気持ちが滲んでいる。

「出願期日いよいよ差し迫り、諸準備忙しきことと存候。

明日先生へお訪ね志願科目を決められたく候。万一不在なれば、明後日再度お訪ね相成りたく候。色々腹臆無くお聞きしてみること必要に存候。当方よりも先生へ手紙にてお願いいたしおき候。」（昭和八年（一九三三）二月二日太一から節郎宛ての葉書）

この先生とは結城素明のことである。この葉書に先んじて、太一は素明から受験指南の手紙を受け取っている。

「図按科入学試験の方針はいまだ確定いたさず候。よつて（図按は写生草花のみにて試験を施行することになるかも知らずとの事なり）何れかにて写生のみを勉強しかるべしと存じ候。」（昭和七年（一九三二）一〇月三日素明から太一宛ての手紙）

美術学校の試験で写生を重視することは当然のことであり、有効なアドバイスとなったかは疑わしいが、太一はこの助言を大切に節郎に伝えたのだろう。

節郎は美術学校に入学すれば、工芸科であろうが絵画を描くことはできるであろうと考えたのであろう。入学後も、兄とともに二科会の画塾に通い絵画を学んでいる。しかし、

節郎が選んだ漆工部には、漆芸の分野を発展させた優れた教授陣が待っていた。六角紫水（帝国美術院会員（一九四一年）、松田権六（人間国宝（一九五五年）・文化勲章受章者（一九七六年）、山崎寛太郎（文化功労者（一九六六年））という漆芸界に大きな影響を及ぼした芸術家がそろっており、漆芸を学ぶにはこの上なく恵まれた環境であった。節郎は、やがて漆の魅力に引き込まれ、漆の芸術家として大成していくことになる。

高橋節郎は自身の技法を鎗金と名付けた。鎗金とは、中国での「沈金」の意味であるが、中国流の沈金の技法を用いているということではなく、いわゆる「沈金」の技法とは異なるため、あえて「鎗金」と名付けたのだ。この鎗金技法を駆使して、漆に絵を描くのが高橋節郎のスタイルと言える。高橋節郎の漆パネルの表面をよく見ると、繊細な無数の線彫りが施されている。この緊張を伴う作業を中断した時、節郎は筆を執り墨彩による絵画を描き、心を静めたという。墨彩画だけの個展を開催するほど、この分野にも打ち込んでいる。東京藝術大学の教授時代においても、時間さえあれば絶えず写生を行っていたという。この芸術家としての姿勢は、幼い頃に高橋が夢見た画家としての生き方を貫いたと言えることができるであろう。

高橋節郎の詩「穂高の四季」の一節にこうある。「目を瞑りみれば／臉に浮かぶ故郷の四季」「故郷は永久に美しく／

いつの日も故郷を想い／故郷を愛で／そしていつの日か／人はそれぞれに／故郷に回帰するであろう」。節郎の墨彩画には、北アルプスを思わせる峻厳な山並みと、白壁の土蔵が並ぶ田園風景が描かれる。都会での作家生活の中で、心の中にある故郷のイメージを描き出したのである。

（三澤新弥）



高橋節郎《高原の花園》（安曇野高橋節郎記念美術館蔵）

3

人格教育の源流

井口喜源治

明治三十一年（一八九八）、穂高に私塾研成義塾を興し、昭和十三年（一九三八）廃校までの四〇年間に八〇〇人の塾生を送り出した塾長井口喜源治について支援者の一人であった相馬黒光（良）は著書『穂高高原』（女性時代社・一九四四）にこう記している。

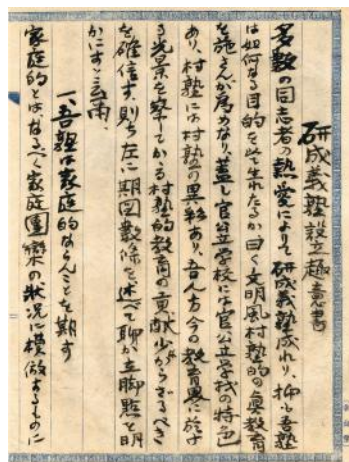
さて私はいよいよ井口喜源治の研成義塾創立を語らねばならない。（略）穂高高等小学校の首席訓導で禁酒会創立の同志井口喜源治が、今度にわかに他村の小学校へ転任になるという。その理由は表面どういうことになっていったとしても、事実氏の清教徒的精神運動を忌避する村内有力者の多数の策謀であることはいうまでもなく、そういう気配は前々から次第に濃化しつつあったところへ、最近それを激化させる問題が、穂高村内有力者と禁酒会の間に起り、井口氏が犠牲にあげられたのであるという。（略）さて、穂高町の入口三枚橋というのは、板石一枚で橋にかかるほどの流れが、なんなんと橋の裏を洗うほどの水量で、三すじに分かれ、岸の小草を浸し、柳の影をうつして東へ東へと押し流されてゆくところ、糸魚川街道から東に折れてその水に沿うて数十歩とも下がらぬう

ち、右手にポプラが並び立ってさあっと風になびいている。その一面の平地に十五坪の小舎、後には二間に五間の裁縫室が建て増されたのみ、三十五春秋研成義塾の構成は、ここから一步の拡張も見られなかったが、内容は日に日に深く、井口喜源治の清教徒的精神は教え子の少女の浄き血となり肉となって、その成長に現れるものは他の村童のそれと異なり、一見して研成義塾生と認められ、あまりに際立ちすぎるかの観さへあった。

井口喜源治が「穂高の聖者ベスタロッチ」と礼讃され、片田舎の小さな私塾が注目を浴びた背景について「塾の教育」「塾で学んだ人々」「記念館の歩み」の三点から述べたい。

塾の教育

明治三十一年一月七日、東穂高村矢原集会所を仮校舎として創立した研成義塾は明治三四年（一九〇一）、東穂高村三枚橋に新校舎を建設した。その年作成した「研成義塾設立趣意書」に義塾の五つ（人格的・全人的・個性的・宗教



「研成義塾設立趣意書」
(井口喜源治記念館蔵)

の教・社会的)

育理念が記されている。在学生徒は高等小学校から旧制中学、補習科の七ケ年にわたっている。その教育課程の全科目を井口

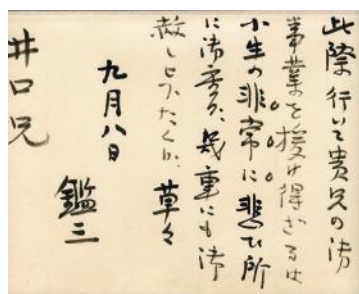
し」とあるように、女子教育が遅れていた時代（明治三二年（一八九九）松本高等女学校開校、大正一二年（一九二三）豊科高等女学校開校）にあつて、女子教育の重要性を設立当初から説いていた。経済的に厳しい義塾経営の中で、青柳さくの協力を得られたことは大きな出来事であつた。

義塾の教育を精神面で支えたのは内村鑑三の存在である。明治三三年（一九〇〇）、荻原碌山と参加した第一回夏期講習会で初めて内村鑑三と面談する。その後、内村は明治三四年の新校舎落成を含め、三度来塾している。また信濃毎日新聞（大正一〇年八月五日）に「信州では誰が何と言うても、安曇郡穂高の井口喜源治氏位、立派な人はあるまい。氏が米国において作った穂高村は、日本人の作った村の中では模範村である。もし米国にある日本人があのような村を作っておけば、日米問題などは起きない。まず氏は教育会のベスタロッジとでも言うべき人であろう」と述べている。

塾で学んだ人々

○北米移民

穂高から明治三九・四〇年（一九〇六・〇七）に約七〇名が渡米している。その中に研



内村鑑三からの手紙
(井口喜源治記念館蔵)

成義塾で学んだ人がある。昭和四六年（一九七二）から八年間シアトル日本メソジスト教会で牧師を務めた三宅ケネス氏（岡山県出身）は北米報知新聞（平成一五年一月四日）に「米国への移民が盛んだった明治末期。その中には、経済的成功ではなく理想郷を求めているの移民も多かった。特に内村鑑三の弟子の一人、井口喜源治が長野県穂高町に開いた、キリスト教精神の教えを説く、私塾・研成義塾出身者はその志が高く、第二次世界大戦勃発時には非戦の思想を高く掲げたという」と記している。

○清澤冽 本書一二二頁 参照

○斎藤茂

明治二〇年（一八八七）、烏川村（現安曇野市堀金烏川）に生まれ「野の哲人」と称せられる斎藤茂は明治三四年（一九〇一）に入塾する。二年間学んだ後、同人誌『天籟』を中心になって創刊する。農民として生きる傍ら、新聞や雑誌に評論、随筆を投稿するなど、「えらい人でなく、よい人になれ」の井口の精神を体现した生き方をする。桐生悠々（信濃毎日新聞主筆）は『高き山より』（信濃毎日新聞社・一九一六年）に「彼は農家の一青年に過ぎぬ。しかも彼のその心は郷土に土着せずして、東京に、倫敦（ロンドン）に、巴里（パリ）に、伯林（ベルリン）に、到る処に道遙して居る」と記している。

○ゴードン平林



研成義塾之跡の碑

明治三五年（一九〇二）に入塾し、四〇年に渡米した平林俊吾の長男である。日系アメリカ人の強制収容はアメリカ憲法に違反すると四〇年に渡って訴え、逮捕監禁されながら昭和六二年（一九八七）に勝訴した移民二世である。平成二四年（二〇一二）五月オバマ大統領は、彼の四〇年以上に及ぶ闘いがアメリカ憲法を守るために正義をもたらしたと評価して文民最高位の「大統領自由勲章」を授与し、功績を讃えた。

○東條 鱗^{たかし}

明治三四年入塾し、三年間学んだ後、渡米。郷土の仲間と共に食料品店を経営し、世界大恐慌を機に帰国する。昭和五年（一九三〇）ワシントン靴店を東京銀座に創業する。この間、財政面で義塾の支援を続けた。

○渡辺宗一郎

義塾で学んだ後、明治三九年（一九〇六）に渡米。大正二年（一九一三）、シアトルにシアトル開運堂を創業する。大正一三年（一九二四）に帰国し、松本縄手通りに開運スエトを開業する。創業一〇〇年を機に、平成二五年（二〇一三）に穂高矢原に安曇野店を開店する。

○手塚縫藏、岡村千馬太、松岡弘

義塾の授業を参観したり、東穂高禁酒会に参加したりすることにより井口の教育方針に感化された教育者である。研成義塾の存在を長野県教育会に広め、人格教育・教育愛という信州教育の底流が作られていく。

記念館の歩み

昭和四四年（一九六九）に開館し、以後井口喜源治の思いを繋いできた。「学ぶ会」は開館当初から毎年開かれ、『万水の流れ』や『安曇野人間教育の源流』といった刊行物も発行している。また、相馬愛蔵・黒光（良）ゆかりの新宿中村屋の新入社員や、井口喜源治の長男倫太郎が開院した諏訪湖畔病院の職員、さらに安曇野市の新規採用教職員などを対象とした研修会を開いてきている。令和元年（二〇一九）、研成義塾開塾一二〇年・井口喜源治記念館開館五〇周年記念式典を行い、相馬黒光の嫁入り道具であり、義塾でも利用されてきたオルガン（西川オルガン）によるコンサートを開いた。

（平沢重人）



黒光のオルガン演奏会



井口喜源治記念館

略歴

明治三（一八七〇）五月三日、穂高等々力町に井口喜十・こんの長男として誕生

明治九（一八七六）二月穂高支校保等学校／（東穂高小）入学、同級に相馬愛蔵

明治一八（一八八五）三月研成学校卒業／四月松本中学校入学

明治二二（一八八九）松本中学校卒業／明治法律学校（現明治大学）入学

明治二三（一八九〇）明治法律学校二年修了／九月上高井尋常高等小学校小布施分校赴任

明治二五（一八九二）九月松本尋常高等小学校学校（現開智小学校）赴任

明治二六（一八九三）三月二日、会染村内山定治二女きくのと結婚、四月東穂高尋常高等小学校赴任

明治二七（一八九四）東穂高禁酒会に入会／妓置屋設置反対運動を行う

明治三一（一八九八）豊科高等小学校への転任を拒否し、退職／一月相馬安兵衛・臼井喜代の賛助を得て研成義塾発足

明治三三（一九〇〇）萩原守衛と上京し、内村鑑三の講演会に参加

明治三四（一九〇一）一月穂高三枚橋に新校舎落成／四月私立学校研成義塾設立認可証来る／九月内村鑑三来塾

明治三五（一九〇二）手塚縫藏来塾

明治四三（一九一〇）一〇月創立一二周年感謝講演会、内村鑑三来塾

大正五（一九一六）五月南安曇郡長野々村亭来館補助金の申し出を謝絶

昭和三（一九一八）一二月創立三〇年記念式、内村鑑三の代理齋藤宗次郎来塾

昭和五（一九三〇）三月内村鑑三葬儀に参列

昭和七（一九三二）一〇月脳溢血にて倒れる

昭和一一（一九三六）三月研成義塾廃校届提出／七月二日死亡、六九歳

昭和四四（一九六九）井口喜源治記念館竣工

4 松澤求策と国会開設運動

一、広ク會議ヲ興シ万機公論ニ決スベシ

慶応四年（一八六八・明治元年）三月一四日に宣明された五箇条の御誓文はこの文言から始まる。明治天皇が天地神明に誓った我が国の政策の方針、国是である。

近代国家への体制づくり目指した明治新政府は、廃藩置県や徴兵制の施行、地租改正、学制発布などを断行する。

しかしそれに伴う歪みも生じ、農民一揆や士族の反乱が頻発した。

明治一〇年代になると、武装蜂起ではなく、言論によって国民の権利の獲得を目指す動きが盛んになった。この自由民権運動は全国各地で起こったが、明治になってわずかに一〇年の間に西洋の思想に範を取り、国政を動かそうとした人々の意識の高さと勤勉さには目を見張るものがある。わけても、穂高という一地方の、しかも士族や豪農ではなく中農出身の若者が、全国的な運動の旗頭になったことは驚きを禁じ得ない。

——松澤求策、その人のことである。

求策の学び

求策の人格形成に最初に大きな影響を与えたのは、高島章貞^{しょうてい}である。医者之家に生まれた章貞は、漢学、国学、蘭学にも通じた桂園派の歌人でもあった。

章貞の星園塾に入塾したのは、求策は六歳の時である。彼の座右で起居を共に

して教えを受けるうち、知識や教養だけでなく、桂園派の歌風に裏打ちされた自由な気風や誠実な生き方を身につけていく。さらに個人の幸福を、天皇を中心とする国家の繁栄へと結びつけていく章貞の勤王思想にも、大いに影響を受けた。

求策の生家は、糸魚川街道に面した等々力



求策の生家・若松屋（等々力町）



松澤求策

町村の若松屋である。農業のかたわら染物屋を営んでいた。学問よりも家業を継がせたい父の友弥は、豪商として台頭してきた大和屋の小川為一郎のもとに丁稚奉公に出した。

だがこの間も彦根藩出身の国学者・野田千頼に出会って上京し、国学と和歌を学ぶ。身分や家柄ではなく「智」の力の実用によって、この動乱期を生き抜くべきだという考えに至り、学問への志向を強くしていった。

求策は一八歳の時に保高村田中の伊藤とめと結婚する。二〇歳になると、研成学校の学校世話役や拾ヶ堰の堰守など地域の要職を任されるようになった。求策は家業を顧みず仕事に打ち込んでいくが、人々の生活は一向に改善しない。明治維新が必ずしも民衆のための変革ではなかったことを痛感し、民衆のための世直しへと意志を固めていくの

である。

明治八年（一八七五）、求策は豊科村の藤森桂谷が校長を務める成新学校の変則科に入塾した。

この塾は青年教育のために設けられたもので、桂谷に招かれた木曾出身の漢学者・武居用拙が教鞭を執っていた。彼の教育の基本は、学問を政治に直結させることにあり、有効性と合理性を持った教育が実践された。

塾では漢文、数学などが教えられたが、特に作文は、当時の社会情勢を題材にして物事の区別や比較、本質の究明や既成の概念に対する批判について、生徒に自ら考えさせる点に特徴があった。また寄宿生活では選挙制や討論を採り入れ、自治の精神を培った。

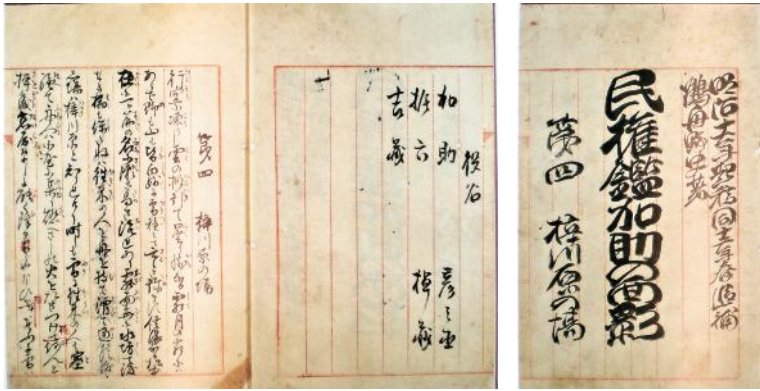
用拙の教育の根底には、「ゆうこ猶興」の精神があった。『孟子』の一節に、平凡な民は明君の教導があつてはじめて立ち上がるが、豪傑の士は明君がいなくても「なほ猶興る」とある。自ら考え、行動する、この精神に基づく民本主義を教育する用拙の塾は、やがて「民本論・民権論の源泉地」と呼ばれ、南北安曇郡内外から多くの青年たちが集い、学んだ。そして求策も民権思想を涵養していったのである。

松本平の自由民権運動へ

明治十一年（一八七八）一月、豊科学校で開かれた演説

会に求策は桂谷、用拙らとともに弁士として登壇した。以来、求策は民権思想の発信に努め、運動の担い手となる同志を集めていくのである。

特に人々の心をつかんだのは、『民権鑑嘉助の面影』の上演である。脚本は求策が手掛けた。松本藩に対して年貢軽減を訴えて一揆を起こした中萱村の多田加助に仮託して



「民権鑑嘉助の面影」(安曇野市文書館蔵)

民権思想の啓蒙を図ったのである。観客と同じ農民を主人公に据え、わかりやすい話の展開に、時折見せる面白さも加わり、穂高や松本、塩尻の上演が大いに人気を博した。当時、武居用拙ら民権家たちは多田加助を「民権の宗」と位置づけて顕彰を始めていた。竹内泰信により「松本新聞」に掲載された「中萱加助略伝」もそのひとつである。

求策の同志には松本師範学校出身の若い教員た

ちがいた。明治五年(一八七二)の学制発布以来、就学率が伸びない。その原因として、学費が高く親たちの負担が大ききこと、外面を養って内面の心をつくらない教育法などが指摘されていた。求策はこの問題について教師たちと討論を重ね、教育内容やその効果の良否の追求、教師の質の向上、教育体制の改善の三点にあることを教育雑誌『月桂新誌』を通じて発表した。求策は教育のあり方にも関心を寄せ、教員らとともに教育政策の改善を働きかけていく。やがてその教員たちは、自由民権運動の一翼をも担っていくのである。

「奨匡社」創設へ

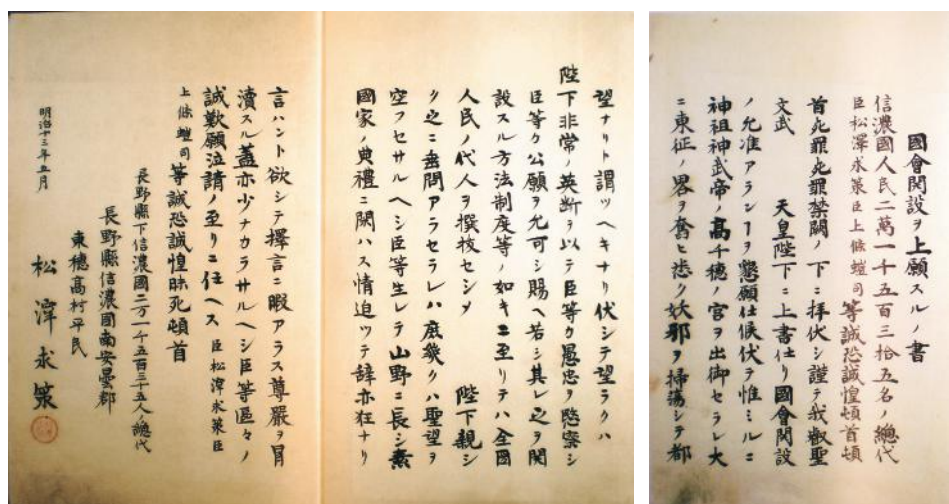
全国の自由民権運動の中心となっていたのは、西日本の士族層が結成していた愛国社であった。明治一二年(一八七九)十一月、愛国社は大阪で第三回大会を開き、全国的な国会開設の請願運動を開始した。

求策は、松本深志町の豪商であった市川量造らとともに松本平でも政社を結成することを企図した。明治一三年二月、南北安曇郡や東筑摩郡の町村議会議長や戸長らを浅間温泉に集めて自由民権運動を進める政社の設立を提案し、多くの賛辞の中で承認を得た。

政社の名は「奨匡社」と称した。中国の古典『孝経』に

書かれた「その美を奨順し、その惡を匡救す」(良い事を奨め、悪い事を正して救う) から引用したものである。

奨匡社の創立大会は四月二一日、松本の青竜寺(現在の



「国会開設ヲ上願スルノ書」(安曇野市文書館蔵)

全久院)で開催された。折柄の集会条例の布告によつて、政府からは集会に対する制限が加えられており、奨匡社の設置に戸惑いの声も聞かれたが、社則を修正することにかわすこととした。さらにこの大会で奨匡社からも、信州から国会開設を要望する請願を上げていくことが決議された。

「国会開設ヲ上願スルノ書」

奨匡社では国会開設の請願を政府に提出するため、「国会開設ヲ上願スルノ書」を作成した。起草には求策のほか浅井洌らも加わり、複数の案が作成された。これについて武居用拙も意見を加えて完成させている。

この文章は、信濃国人民二万一千五百三五名の有志の代表として松澤求策と上條蠲司(あじ)が天皇に哀訴するという形を取って書かれた。実際に県下各地の地域の代表者が捺印した委任状も作成されている。

この長文の請願書では、前半で日本の歴史上における天皇と人民との関わりを概説し、天皇の徳を讃える。後半では当時の日本が抱えていた諸問題、士族の反乱や物価の騰貴、江戸幕府が諸外国と結ばされた不平等条約のことなどが記されている。また冒頭にも掲げた、「広ク會議ヲ興シ」の五箇条の御誓文の一節を拝する人民は皆、国会開設を願っていると述べ、この請願を新政府の掲げた国是の中に位置づけた。国内外の事情にも通じ、五箇条御誓文を根拠にして国会開設を要望する理路整然とした文章には興味を惹かれる。この請願書を携えて、求策と蠲司が東京へ向かったのは、明治一三年五月のことである。

これに先立つ三月、愛国社は大阪で第四回大会を開催し、新たに国会開設期成同盟を発足させて国会開設の請願文を

天皇に奉呈することを決議した。愛国社は奨匡社より先に東京で請願運動を始めたが、請願書は政府に受理されず、失敗に終わっている。

求策たちは太政官の官庁へ赴き、請願書の受理を求めたが、応対に出た書記官に拒否される。だが粘り強い働きかけの末、右大臣・岩倉具視との会見を果たすことができた。岩倉は、国会開設は全国民に関することであって、一地方から請願すべきではないと述べ、請願書は受理しなかった。だが、求策たちはここで食い下がり、日本全州の過半数の署名が集まれば受理する、との言質を引き出した。

これ以降、求策は請願運動の全国展開を目指し、地方から上京してきた民権家たちと協力体制をつくり始めるのである。

一月に東京で開かれた国会期成同盟第二回大会では、全国規模で国会開設運動を展開することが確認された。求策はこの席上で政党結成を主張し、自由党準備会の役員としても活動を始めている。

明治一四年（一八八一）三月、自由党の勢力を拡大し、国会開設の機運を高めるため、求策は土佐出身の民権家・中江兆民らとともに東洋自由新聞を創刊した。社長にはフランスへの遊学経験のある西園寺公望^{さいおんじこうもち}が就任し、多くの読者を集めた。

しかし間もなく、公卿出身の西園寺に社長を辞職せよと

の「内勅」が下る。求策はこの手段を用いた政府に抗議するため、全国の民権家に檄文を配布し、国会開設運動を継続する決意を新たにした。

嗚呼、諸君と共に自由の花に遊び自由の月を賞するの日は、それ將^{まさ}た何れの時ぞ、蓋し速きに非ざるべきを信ず。

この檄文は匿名で配布したものの、官憲の知るところとなり、同年四月二三日に逮捕される。五月、「人心煽動^{じんしんせんどう}雑法^{ざつぽう}律不^{りつふ}應^{おう}為^い条^{じょう}」により、懲役七〇日の刑に服した。

国会開設の勅諭と求策の死

明治一四年八月、政府は北海道開拓使が使用していた工場などを大阪の政商に安価に払い下げることを決定した。これが民権家や新聞各紙の非難の的になる。政府はこれを回避するため、明治二三年（一八八九）を期して国会を開設するという天皇の勅諭を発した。折しも国会期成同盟の大会の最中であり、運動の激化を抑えるという政府の意図も働いたとみられている。

ともあれ、国会開設の筋道ができたことで、求策も国会議員になることを目指した。明治一六年（一八八三）には長野県議会議員に当選するも、代言人試験問題漏洩事件に



松澤求策の墓（等々力町）

巻き込まれて服役する。石川島の獄舎に入った求策は劣悪な衛生環境の中で身体を蝕まれていった。

明治二〇年（一八八七）六月二五日、求策は最期の時を迎える。

思ふ事つくしもはてずさそはれて

かへらぬ旅に心のこして

享年三三歳。志を遂げることができなかった短い生涯に悔しさがにじむ辞世である。

このうち民権運動は、明治三〇年代に始まる普通選挙運動に受け継がれる。大正一四年（一九二五）には普通選挙法が制定され、やがて戦後の日本国憲法下では女性の参政権も認められていくのである。

（逸見大悟）

松澤求策略歴

安政 二（一八五五）六月一五日、等々力町村の中農・松澤友弥と

きしの長男として生まれる

文久 元（一八六一）私塾・星園塾で高島章貞の教えを受ける

慶応 三（一八六七）商家・大和屋の小川為一郎のもとで丁稚奉公を始める

明治 三（一八七〇）国学者・野田千頼を追って上京し、国学や歌

を学ぶ

明治 六（一八七三）五月、伊藤とめと結婚

明治 七（一八七四）七月一日、長女・万喜代生まれる

明治 八（一八七五）三月二三日、拾ヶ堰堰守を委任される／一〇月

一五日、武居用拙塾に入塾

明治 九（一八七六）七月、穂高商会事業を進めるため、小川為一郎

とともに東京に行く

明治 一〇（一八七七）二月、講法学校に入塾

明治 一一（一八七八）一月二〇日、豊科学校での演説会に参加／六月

一五日、坂崎斌とともに浅間温泉に猶興義塾を開く／九月、猶興

義塾の不振により坂崎、松本を去る

明治 一二（一八七九）三月、五月、県会傍聴記を松本新聞に掲載／七

月二八日、松本新聞編集長に就任

明治 一三（一八八〇）二月一日、浅間温泉に桐の湯で奨匠社設立準備

会を開催／二月二三日、松本新聞の日刊制を実現。／大阪国会期

成同盟大会に参加／四月一日、松本青竜寺で奨匠社結成大会開

催／五月二六日、上條蠲司とともに上京し、太政官や元老院で国

会開設の請願を行う／七月一日、右大臣・岩倉具視と面会／

十一月一日、大日本国會期成有志公會開催。求策、期

成同盟常務委員に選出され、自由党の事務を兼ねる

明治 一四（一八八一）三月一八日、東洋自由新聞創刊。四月一〇日、

西園寺社長退社について檄文を配布。五月一六日、東京裁判所で

判決を受け、懲役七〇日に処せられる

明治 一五（一八八二）六月三日、南海開島会社趣意書を東京府に提出

し、八丈島の開発に尽力。

明治 一六（一八八三）三月、南海開島会社倒産／一二月、長野県議

員に当選

明治 一八（一八八五）五月、代言人試験問題漏洩事件に連座し、東京

軽罪裁判所で重禁錮一年監視一〇ヶ月の判決を受ける

明治 二〇（一八八七）六月二五日、東京石川島牢獄で服役中に死去

5 多元主義擁護の騎手 清澤洌

明治三十六年（一九〇三）一三歳で研成義塾に入塾した清澤洌は、明治三十九年（一九〇六）一二月に渡米した。明治四三年（一九一〇）のシアトル邦字新聞「北米時事」の通信員を皮切りにジャーナリストとしての歩みを始める。大正七年（一九一八）帰国後、中外商業新報社（現日本経済新聞社）、朝日新聞社、報知新聞社に勤務し、執筆活動が続けるが、太平洋戦争敗戦の年、昭和二〇年（一九四五）五月二一日、五五歳で亡くなる。清澤は『非常日本への直言』（千倉書房・一九三三年）の序文「序に代えて わが子に与う」で、日本の立ち位置を示した言葉を記している。

お前もこの国に生まれた以上は、国家を愛するに決まっている。が、お前の考えるように考えなくても、この国を愛する者が沢山いることだけは認めるようになってくれ。お前のお父さんも、全然反対な立場に立つ人に対しても、真剣でさえあれば、常に敬意を払って来たんだ。（略）お前は一生の事業として真理と道理の味方になってくれ。道理と感情が衝突した場合には、躊躇なく道理につくことの気持ちを養ってくれ。これは個人の場合にもそうだし、国家の場合でもそうだ。日本が国を立て

以来道理の国として、立って来ている以上は、道理に服することが日本に忠実でないということがあるものか。

清澤は小国日本が世界の中で堂々と生きていくためには、平和外交に立脚した経済交易の充実が大切であり、そのためには国際理解と協調であると訴え続けた。その基本理念がひとつの価値観に固執しない多元主義であった。その理念を清澤が発刊した書籍を通して考える。

○『米国の研究』（日本評論社・一九二五）

清澤の処女作である。序に「近頃、米国に関する著書が山のように出る。そしてその殆ど総ては、米国の野心と、米国の欠点と、米国の暴戾^{ほうれい}なることを指摘したものである。（略）ある種の不安が頭をもたげているのを感じない訳にはゆかなかった。米国の非を攻撃するのはいい。けれども一の非を否定することにより、十の是をも否定し去ることは公平であろうか。」発刊当時のアメリカでは、日本移民によりアメリカ人の労働機会や土地利用に不利益が生じたという理由から排日運動が激しくなり、日本移民を全面禁止する「排日移民法」が成立（一九二四年）された時でもある。日本人がアメリカにおいて厳しい立場に置かれているとい

うことを肌で感じている清澤が発する言葉の持つ意味は大きい。

○『激動期に生く』（千倉書房・一九三四）

昭和八年（一九三三）に全権委員松岡洋右が国際連盟の脱退を宣言する。平和外交を期待していた清澤は衝撃を受

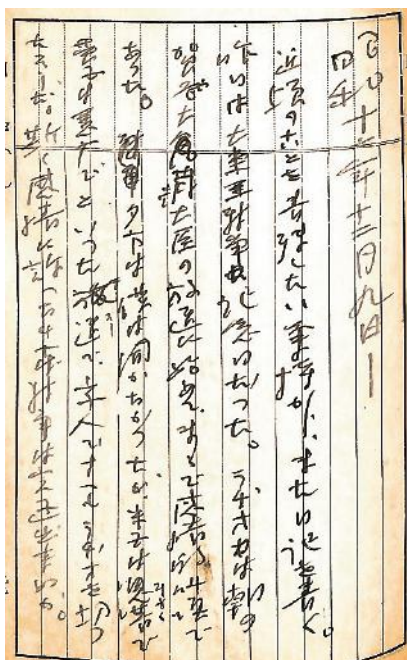


清澤瀏

け、良心の自由とその発表こそが国家や社会の健全な発展の基礎であると述べ、自らの信念としての国際関係の再建を訴えている。

○『戦争日記(暗黒日記)』（岩波書店・一九五四）

清澤は多くの著作を通して対米戦争への警鐘を鳴らし、アメリカとの協調を訴えてきた。ついに日本は昭和一六年（一九四一）二月八日、真珠湾に攻撃を加える。この報を聞いた清澤は、異常なほど怒り悲しんだという。開戦から一年後の昭和一七年二月九日、『戦争日記』と題する日記を書き始める。この日記には、その時々の政治や外交、戦争政策などを記録し、自らの批判や考えも書き込んでいく。戦争終結後、言論統制が解放された時に、現代史としてまとめる目的もあったと考えられている。この日記は、清澤の死後、『暗黒日記』として刊行された。昭和一七年

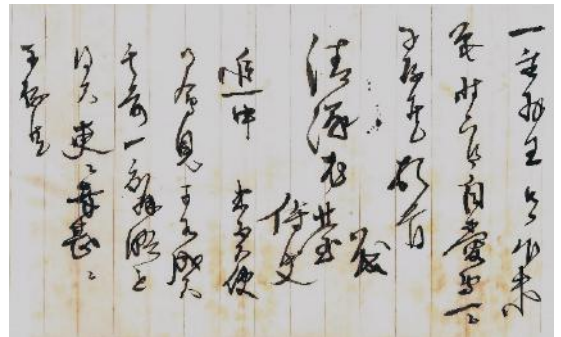


『戦争日記』（安曇野市文書館蔵）

(二九四二) 二月九日の日記である。「近頃のことを書き残したい気持ちからまた日記を書く。昨日は大東亜戦争記念日だった。ラヂオは朝の賀屋大蔵大臣の放送に始めて感情的叫喚であった。夕方は僕は聞かなかったが米国は鬼畜で英国は悪魔でといった放送で家人でさえもラヂオを切ったそうだ。斯く感情に訴えなければ戦争は完遂できぬか。」この日記は、平成一〇年(一九九八)に桜美林大学教授・上山民栄による英訳本が出版され、国際的にも評価される。

清澤のゆるぎない信念を支えたものは研成義塾、井口喜源治からの教えであった。昭和一四年(一九三九)井口喜源治一周忌でのあいさつの一節を紹介する。「少年時代に私に与えられた井口先生の感化は、今なお続いています。私は井口先生によつて世の中には金や地位や名誉よりも、もっと大切なものがあることを知りました。それは信念です。私は過去に於いて、また現在に於いて、自分が考えて正しいと思うことを曲げたことのない一事は恩師の前に申し上げることが出来ます。」

また清澤は、書物を何よりの財産としていた。そのことを元豊科町長・笠原貞行氏は平成一二年(二〇〇〇)一月にこう語っている。「清澤さんは「俺の家が爆撃で焼けてもこの本だけは残るように半地下にして焼けないようにできているのだ」とおっしゃった。いわゆる丘の途中に家を作っ



吉田茂の書簡(安曇野市文書館蔵)

一書拝呈仕り候。末筆ながら時下御自愛專一と存じ奉り候。頓首。

清澤老台 侍史

茂

追伸 米国大使御会見相成るべくば、その前に一度拝晤を得ば、更に幸甚に存じ奉り候。

であり、そこをくりぬいて一番大事な場所を書庫にしたわけです。だから『僕の家は空襲で焼けても、僕の命は本なんだ。それだけは空襲で焼けないように書庫はちゃんと守つてあるんだよ。命より大事なのは本なのだ』とおっしゃったんですね。」

清澤の思いや覚悟は、戦後多くの政治家やジャーナリスト、研究者に受け継がれてきた。戦後日本を首相としてリードした吉田茂、石橋湛山、芦田均らは皆、清澤の朋友である。地元では平成四年(一九九二)穂高町有志による清澤洵顕彰会が結成され、学習会や講演会、清澤洵胸像建立などが開催された。平成二二年(二〇〇九)には清沢洵展実



清澤洌の生家

行委員会（安曇野市他一六個人及び団体後援）による企画展「昭和史における慧眼の外交評論家」が研成ホールで開催された。現在でも清澤洌研究会（毎月第三木曜日）や公民館講座の開催など、清澤の思想や生涯の軌跡をめぐる研究が続いている。

（平沢重人）

清澤洌略歴

- 明治二三（一八九〇）二月八日北穂高村青木見に清澤市弥、たけの三男として生まれる
- 明治三六（一九〇三）三月北穂高小学校高等科卒業／四月研成義塾入学／一二月東穂高禁酒会入会
- 明治三九（一九〇六）三月研成義塾卒業／一二月渡米
- 明治四三（一九一〇）シアトルの邦字新聞社「北米時事」通信員となる
- 大正二（一九一三）「信濃毎日新聞」に清澤洌の名前で『在米同胞の思想界』寄稿 「北米時事」シアトル本地勤務となる
- 大正三（一九一四）サンフランシスコの邦字新聞社「新世界」に移り、記者となる
- 大正七（一九一八）帰国／横浜の貿易商「菅川商会」に入社、海外駐在員となる
- 大正九（一九二〇）「中外商業新報社」（後の日本経済新聞社）に入社／一〇月に福井貞と結婚
- 大正一二（一九二三）関東大震災で妻貞と長女節子を失う／「中外商業新報社」外報部長となる
- 大正一四（一九二五）「中外商業新報社」特派員として「満鮮シベリア視察団」に同行する／「米国の研究」（処女作）刊行
- 大正一五（一九二六）植原悦二郎媒酌、夫人の教え子である源川綾子と結婚／「モダンガール」刊行
- 昭和二（一九二七）「東京朝日新聞社」計画部次長に就任
- 昭和三（一九二八）『黒潮に聴く』刊行
- 昭和四（一九二九）「中央公論社」特派員として渡米／『自由日本を漁る』『転換期の日本』刊行
- 昭和五（一九三〇）ロンドン海軍軍縮会議の取材報道／『巨人を語る』『アメリカを裸体にする』刊行
- 昭和六（一九三一）『不安世界の大通り』『フールド』刊行
- 昭和七（一九三二）「報知新聞社」論説委員となる 『アメリカは日本と戦わず』刊行
- 昭和八（一九三三）『亜細亜モンロー主義』『非常日本への直言』『革命期のアメリカ経済』刊行
- 昭和九（一九三四）『激動期に生く』刊行
- 昭和一〇（一九三五）座談会や講演会に積極的に参加する 『混迷時代の生活態度』『現代日本論』『世界再分割時代』刊行
- 昭和一一（一九三六）『ファッショは何故に生れたか』『時代・生活・思想』『極東の危機』『自由主義とは何か』『天然資源の再分配』『太平洋問題の解決法』刊行
- 昭和一二（一九三七）日本ペンクラブ理事 『女性時局読本』『ソ聯の現状とその批判』刊行
- 昭和一三（一九三八）石橋湛山と関西各地で講演
- 昭和一四（一九三九）井口喜源治一周忌に参列／石橋湛山と北海道で講演
- 昭和一五（一九四〇）満洲で講演／『第二次欧州大戦の研究』刊行
- 昭和一六（一九四一）『外交史』刊行
- 昭和一七（一九四二）『外交家としての大久保利通』『日本外交史上下』刊行／『戦争日記』（暗黒日記）を書き始める
- 昭和一八（一九四三）芦田均と「日本外交史研究所」を設立、所長となる
- 昭和二〇（一九四五）『日本外交年表並主要文書上下』刊行 『戦後世界秩序私案』未刊行
- 五月二一日聖路加病院にて肺炎で急逝
- 昭和二九（一九五四）『暗黒日記』刊行

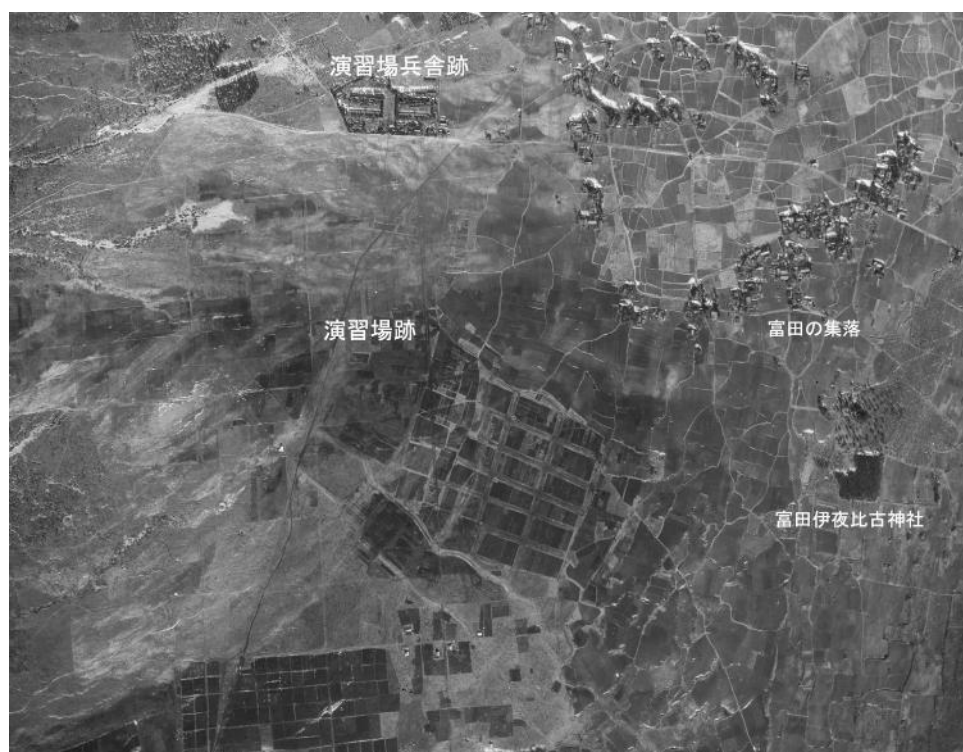
1 陸軍有明演習場 演習場から豊かな農地と観光地に

松本連隊

日露戦争後の明治四〇年（一九〇七）に松本市桐を中心に陸軍の兵営が設置された。翌年一月、青森県で編成され樺太占領、朝鮮半島の警備の任務を遂えた歩兵第五〇連隊が、多くの市民に迎えられて入営した。その後、シベリア出兵、満州事変、日中戦争と戦場に向かい、太平洋戦争では多くの戦死者を出して終戦を迎える。

有明演習場

連隊の設置後、陸軍は有明地区の四五万坪（一五〇鈔）を買収し、演習地として使用することとなった。兵舎のほか、いくつかの施設が建てられ、兵隊たちは、松本から片道二〇浬を行軍し、実弾を使っての本格的な演習が実施された。太平洋戦争末期になると、金沢で編成された第九三師団（決部隊）の歩兵第二〇四連隊が、周辺の国民学校（現在の小学校）に寝泊まりして、本土決戦に備えて、演習を繰り返し続けた。



有明演習場跡（国土地理院 米軍撮影 USA-R962-8 1948年2月29日を使用）

豊里の地に

終戦後、演習地は県有地となった。昭和二十七年（一九五二）に保安隊（後の陸上自衛隊）演習地の候補地に上がった。しかし、地元の有明村は全村民をあげて強力な反対運動を展開した。一度は県議会で演習地に決定されるが、住民の根強い反対運動により、防衛庁（現防衛省）は演習地化を撤回することになった。広大な地域は、「豊里」と呼ばれる農業地域と、県内外から観光客が訪れる観光地となっている。

（原明芳）



「陸軍用地」と刻まれた境界碑



開拓記念碑（豊里）

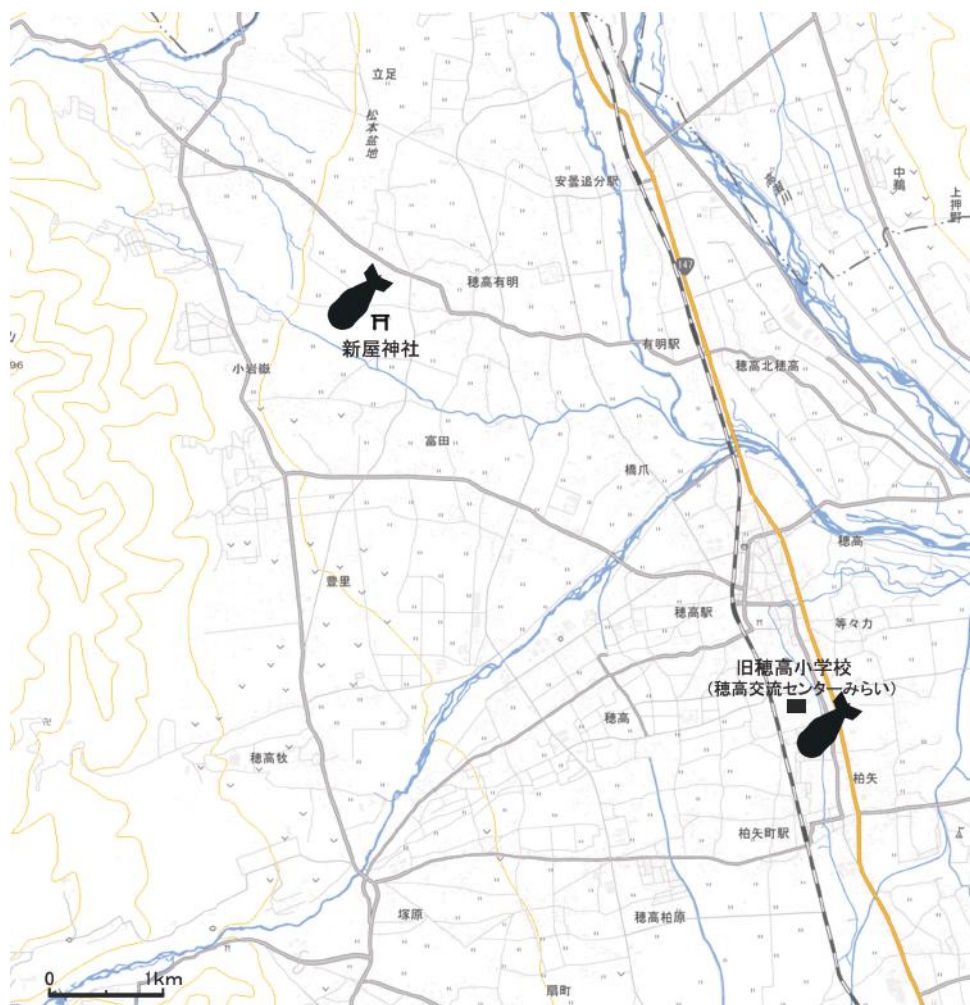
2 穂高・有明空襲 安曇野にも空襲があった

本土空襲

敗色が濃厚になった太平洋戦争後半、昭和一九年（一九四四）一〇月に、アメリカ軍を中心とする連合国軍は、B 29 による本土空襲を始めた。最初は陸海軍の基地や兵器工場などが目標であったが、最後には、地方都市も対象となり、多くの一般市民に多大な犠牲をだし、終戦の昭和二〇年（一九四五）八月一五日まで続いた。松本市里山辺にも B 29 による空襲があった。

昭和二〇年五月一九日穂高

午前一一時四〇分頃、一機の B 29 が、北アルプスを越えて北から侵入し松本方面で旋回し安曇野市上空に現れた。空襲警報も鳴らず、人々の多くは敵機だとは思ってこなかった。やがて、旧穂高小学校（現在の穂高交流学習センターみらい）の南



B29から爆弾が投下された場所



「遭難記念」(穂高新屋)

一五〇㊦付近に五発の爆弾が投下され、大きな穴があき、付近一帯の垣根や門柱、建物の屋根が吹き飛んだ。重傷者も出た。

有明地区

B 29 はさらに北上し、新屋神社北西一〇〇㊦付近に一二発の爆弾を、道を挟んでさらに一二発を投下し、旋回して南下して去って行った。そこには多くの人たちが苗代つくりや種まきの準備で働いていた。婦人会員たちは共同で供出用のサツマイモの耕作中であった。爆弾の破片が同区の女性二人に当たり即死し、数名が重軽傷をおった。現在、その場所に遭難の碑が建っている。

この空襲は、当時の新聞記事にも取り上げられない。また、米軍の記録にも残っていない。どのような目的の空襲であったかわからない。

(原明芳)

自由主義に生きた特攻隊員 上原良司



昭和20年(1945)4月
水戸 常陸教導飛行師団にて

戦争末期、陸海軍は劣勢を挽回するための戦略として「特攻」作戦を採用した。安曇野からも多くの特攻兵が出た。その代表として上原良司を取り上げる。

有明村(現安曇野市穂高有明)の「有明医院」を引き継いだ良司の父寅太郎は医師として、村助役として活躍する。その上原家の三男として生まれた良司が「自由主義に生きた特攻隊員」として注目を浴びるようになったのは、戦没学生遺稿集である新版『きけわだつみのこえ』(岩波文庫)の巻頭に良司の「遺書」が掲載されたことがきっかけである。上原の調査や研究が進み、出撃前夜に記した

「所感」や愛読書『クローチエ』に残した恋人への思いなどが明らかに becoming いく。ここでは、出撃前夜に書かれた「所感」の一節と上原の顕彰活動の一端を紹介する。

○「所感」の一節

栄光ある祖国日本の代表的攻撃隊とも謂ふべき陸軍特別攻撃隊に選ばれ、身の光栄、之に過ぐるものなきと痛感致して居ります。

思へば長き学生時代を通じて得た、信念とも申すべき理論万能の道理から考へた場合、これは或は自由主義者と謂はれるかも知れませんが、自由の勝利は明白な事だと思ひます。人間の本性たる自由を滅す事は絶対に出来



「所感」

○地域史研究家中島博昭氏は、毎年上原の地元である



日本書紀、天降命、云々云々、私に理想、空しく、駭れ、
た、この六六、日本の自由、獨立、爲、喜んで、命、休、め、
人、命、を、つ、て、一、言、の、響、に、大、小、事、し、て、よ、う、な、れ、
ハ、方、た、時、に、文、に、終、ぬ、事、を、曉、れ、者、人、小、さ、う、例、を、
り、若、し、この、教、に、米、美、ハ、勝、た、と、い、も、腹、子、ハ、区、を、取、つ、り、
事、し、知、さ、う、若、し、收、め、さ、し、も、幾、十、段、ハ、ハ、此、環、に、破、裂、
ゆ、か、粉、と、い、ふ、た、と、見、小、に、痛、快、す、如、之、破、裂、さ、ま、い、良、い、
そ、レ、腹、子、も、終、つ、死、ハ、木、と、さ、す、世、年、が、變、り、か、う、左、で、
高、ん、に、あ、つ、私、ハ、本、柄、の、右、リ、又、は、違、ハ、不、あ、り、
左、リ、ハ、本、柄、の、左、リ、を、授、け、あ、り、下、さ、
て、く、れ、く、も、汗、肩、金、の、柱、を、折、り、
清、土、拾、め、置、ん、に、空、一、
て、ハ、ま、ま、小、ハ、汗、粒、嫌、良、い、
汗、兩、粒、
良、司、

出撃前夜の写真 右が上原良司（個人蔵）

穂高西中学校で講演を行っている。中二生徒の感想
(二〇一三・二・二五)を紹介する。

私たち今、上原さんが所感に記したこと、願ったことに添えていないと強く感じました。今日が終われば明日が来る。そんな考えではいけないと思いました。私が生きている時代は、人の考え方に対して制限があまりないと思います。けれど自分の考えを否定され、権力というものに支配されている中では、自分の思ったことも言うことができないのだと知って、とても悲しくなりました。そのような国内で自分の意志をしっかりと持ち、貫いた上原さんはとてもすごい方なのだと所感を読み深める中で感じました。権力による統制を図る国は絶対にならない方がよいと願った上原さんに、平和になって人々が様々な意見を述べるのが可能となった今の日本を見てほしいです。そして私たちはもっと自由を考えるべきだと思います。

○平成十一年(一九九九)一〇月二四日、穂高中学校では三年生有志・吹奏楽部・合唱部によるオペレッタ「レクイエム―残された想い」を上演した。この作品はオリジナルで、上原の出征から始まり、辞世の句「人の世は 別れるものと知りながら 別れのなどで かくもかなしき」を詠むまで表現し、自由主義にあこがれながら特攻隊員として



調査研究冊子

遺した思い―』にまとめた。代表生徒の「上原良司と私たち」を紹介する。

良司は、出撃を控えた知覧基地で「国を愛しても、操縦桿を採る器械となつてはいけない」と『所感』に書き残した言葉の一つ一つに、自分の命をかけて伝えたかった彼の魂を感じます。こうした良司の遺したメッセージは、私たち自身にとっても自分の生き方を考える手がかりとなったと思います。

○平成二十七年(二〇一五)「上原良司とへいま」を生き

命を散らした上原の姿を通して、日本の未来や命の尊さを訴えた。

○豊科高校JRC福祉クラブでは、平成一七年(二〇一五)より戦争の真実を地域の方との交流を通して学ぶ活動を行ってきた。平成一九年は上原良司を取り上げ、『有明山に日かげさし―上原良司の

「事業が「わだつみのこえ七〇年の会」により開催された。開催の趣旨は「戦後七〇年を迎える。さきの大戦の記憶は次第に薄れつつある。上原良司の残した遺書を読みつぐことによって、その歴史的な真実を伝えていく」である。県下の高校生より『遺書』の感想文六九七点が寄せられた。集い（四回）には総数四五四人が参加するなど関心の高さがわかる。

上原の妹清子氏は昭和六一年（一九八六）に、「穂高町戦争体験を語りつぐ会」からの問いかけに対してこう語っている。

（昭和一八年（一九四三）十二月一日、学業半ばにしてペン捨てた兄は松本五十連隊に入営、軍隊生活の第一歩を踏み出したのでありましたが、その心中はすでに同年十月海軍医として潜水艦に乗り組み、南太平洋に散華した次兄龍男のお仇を討つのだという意気込みに燃えていました。そして翌年二月、特別操縦見習士官の試験に合格した事によりその一歩が達せられた事を心より喜び、更に敵撃滅の志を固くしていった模様でした。（略）軍隊生活の有り方に疑問を抱き、それでも何とかして良い兵隊になろうと努力したが、ついに日本の軍隊に絶望を感じ、この様な事では日本の国は必ず負けるとの確信を持つ様になった心の動きがまざまざと読みとられます。

自分の思いをあからさまに述べ、上官を批判したノートは上官の赤鉛筆の叱責の言葉が連日書き連ねられています。

上原の存在意味は、彼の生きざまを通して戦後すでに七五年を数えた今を生きる私たちに、生きるとはどういうことか、日本人とは何か、文化とは何か、幸せとは何か、について世代を超えて問い合うことにある。（平沢重人）

上原良司略歴

大正一一（一九二二）九月二七日池田町中鶴山で医師寅太郎、与志江の三男として生まれる

昭和一〇（一九三五）三月有明尋常高等小学校卒業／四月松本中学校入学

昭和一一（一九四〇）三月松本中学校卒業／浪人し、東京英数学院に学ぶ

昭和一二（一九四一）三月慶應義塾大学経済学部予科入学

昭和一八（一九四三）九月予科繰り上げ卒業／一〇月慶應義塾大学経済学部本科入学／一二月一日学徒出陣 松本五〇連隊入隊

昭和一九（一九四四）二月九日熊谷陸軍飛行学校相模教育隊入隊／三月二四日館林教育隊にて飛行操縦訓練開始／七月二〇日熊谷陸軍飛行学校卒業／七月三十一日第四〇教育飛行隊分科基本操縦教育（知覧飛行場）／一一月二五日分科基本操縦教育終了／一二月九日第一錬成飛行隊錬成教育（目達原飛行場）

昭和二〇（一九四五）二月一〇日陸軍少尉／四月四日常陸教導飛行師団へ転属／四月六日帰郷／四月一六日第五六振武隊編成（水戸市）／五月一〇日『所感』を記す／五月一日陸軍特別攻撃隊第五六振武隊員として沖縄嘉手納湾上の米海軍機動部隊へ突入戦死二二歳／五月一日陸軍大尉

昭和二一（一九四六）五月一五日葬儀

4 「鐘の鳴る丘」と主題歌「とんがり帽子」

戦後当時、父や母を戦争で亡くした多くの孤児が町にあふれていた。焼け残った建物やガード下、防空壕などに寝泊まりし、腹が空きすぎて、残飯だけでなく、人様の食べ物にも手をつけなければならなかった子どももいた。大人たちもそんな子どもたちをかばってあげられる余裕がなく、孤児を収容する施設の数も少ない中、NHK連続ラジオドラマ「鐘の鳴る丘」の放送がはじまると、人々は子どもたちの悲しみや喜びに涙し、人気ドラマとして定着した。ラジオドラマは、昭和二年（一九四七）七月から二五年（一九五〇）二月まで約三年半続き、三本の映画にもなった。

「鐘の鳴る丘」と有明高原寮

連合国軍最高司令官総司令部（GHQ）のダグラス・マッカーサー元帥は、日本の戦災孤児や大陸からの引き上げ孤児対策の専門家として、エドワード・ジョゼフ・フラナガン（通称フラナガン神父）を招聘した。ネブラスカ州オニールの教会の司祭で、少年たちの更生施設「ボーイズ・タウン（少年の町）」をつくったことで知られるフラ



有明温泉旅館（大正末期）



映画「鐘の鳴る丘」のロケ地になった
有明高原寮(昭和20年代半ば～30年代)

ナガン神父の来日にあわせ、GHQの幕僚部の部局の一つで、教育・宗教・芸術など文化戦略を担当していた民間情報教育局(CIE)は、NHKに戦争孤児救済のためのキャンペーンドラマの制作を要請した。劇作家の菊田一夫の原作による、戦災孤児の救済に命を燃やす青年・修平と、隆太ら孤児が、苦勞を乗り越えていくという「鐘の鳴る丘」が放送されるやいなや、大きな衝撃と感動を呼び、人気ドラマとして定着した。

現在の穂高鐘の鳴る丘集会所は、このラジオドラマのモデルになった建物である。もとは長野市の鶴賀新地に建てられた遊郭であった。

大正八年(一九一九)、有明温泉株式会社が創立されると、この建物を買い取って穂高有明に移築した。当時の建物を見た女性は「全館淡いブルー一色にぬられた三階建ての洋風建物で、二階のバルコニーあたりはおとぎ話に出てくる場所」のようだと思感を述べている。有明温泉旅館としての営業が始まったのは大正一〇年(一九二一)からである。それでも初めは第一次世界大戦の好景気に乗って盛っていたが、引湯が不成功に終わり、関東大震災を機に経営は落ち目になった。昭和初年には雨ざらし状態になっていたという。

終戦後、司法保護団体が土地と建物を買取り、昭和二年(一九四六)から少年保護施設・松本少年学院とし

ジが記されている。この色紙は安曇野市穂高郷土資料館が所蔵・展示公開している。

有明高原寮から鐘の鳴る丘集会所へ

ドラマの舞台となり、映画のロケ地となった有明高原寮が、老朽化により取り壊す予定だったところ、市民団体からの移転復元を望む声があがった。

穂高町（現安曇野市）は、昭和五四年（一九七九）に有明高原寮の建物を法務省から譲り受け解体した後、松尾寺公園を造成し、鐘の鳴る丘集会所として整備した。その際玄関上屋、外部手摺、二階ベランダ屋根、垂木等は、有明高原寮で使用されていたものを使って建設した。

鐘の鳴る丘集会所は、昭和五七年（一九八二）年に穂高町指定有形文化財（現安曇野市指定有形文化財）となり、現在も保存・活用されている。

（財津達弥、倉石あつ子、水谷優美）



鐘の鳴る丘集会所前で開催された鐘の鳴る丘を歌う会・早春賦愛唱会主催「歌声広場in鐘の鳴る丘」（令和2年10月24日）。NHK連続テレビ小説「エール」の放送に因んでのイベント。

5 新屋公民館

公民館の設置

戦後における民主化の動向と関係して社会教育の重要性が示され、その拠点施設として公民館の設置が奨励された。昭和二十一年（一九四六）四月、長野県は全国に先駆けて公民館の設置を含んだ「本県本年度社会教育実施計画案の構想」を発表し、同年七月の文部次官通牒「公民館の設置運営について」を受けて、「町村公民館の設置並びに運営について」を通達した。その後、公民館の設置は、昭和二十四年（一九四九）六月に公布された社会教育法によって法的に位置づけられることになるが、南安曇郡ではとりわけ早くに公民館の設置が進められ、昭和二十二年（一九四七）九月までに全ての町村（一五ヶ町村）で完了した。これにあわせて、各地区にも続々と分館が開館した。穂高地域（四ヶ町村）では、昭和二十三年（一九四八）三月から同二十四年四月までの間に、全ての地区（二六地区）に分館が誕生した。



新屋公民館 外観

のステージを置く。玄関上部は映写室となっており、GHQから貸与されたナトコ映写機を用いた上映会も頻繁に開催されたという。

建物を設計したのは、地元の建築士、場々渉氏である。場々氏は高校を卒業した後、軍用施設の建設技術者の養成学校で建築を学んだという。そこでの経験が結びついているのであろう。建物は合理的な構造で、トラスと控え柱を用いて大空間を構成している。また、スクラッチタイルや



左：玄関の底／右：ホールとステージ

公民館の建物

こうした公民館の設置に関する歴史と対応して、新屋公民館は昭和二十六年（一九五一）に建設された。建設にかかった費用は一四七万円、九月八日に落成式が行われたという。建物は、

木造平屋建て（一部二階建て）、

間口約九・二メートル、奥行約二二・三

メートルの規模、外壁を豎羽目板張り、

屋根を半切妻造の鉄板葺きとする。内部には、奥に会議室

兼読書室、表に大きなホールを

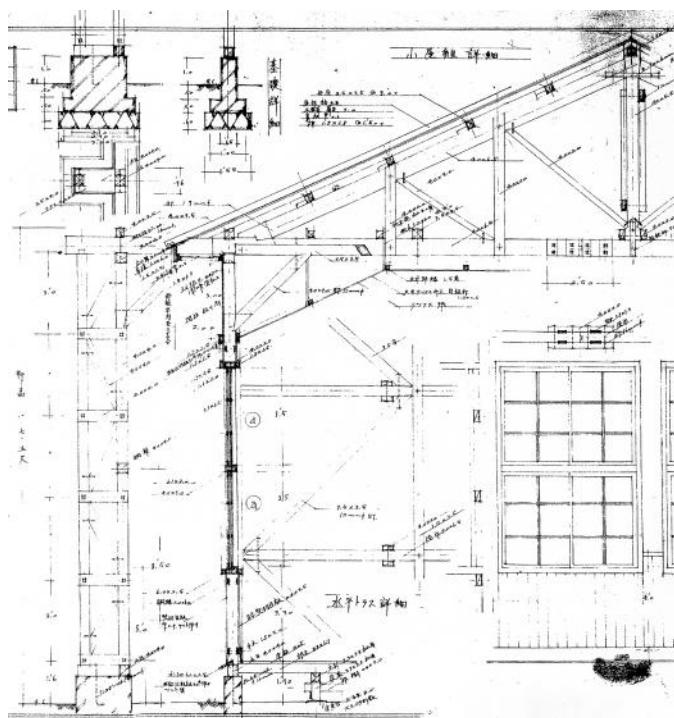
設け、ホールの正面には額縁付

のステージを置く。玄関上部は映写室となっており、GHQから貸与されたナトコ映写機を用いた上映会も頻繁に開催されたという。

建物を設計したのは、地元の建築士、場々渉氏である。場々氏は高校を卒業した後、軍用施設の建設技術者の養成学校で建築を学んだという。そこでの経験が結びついているのであろう。建物は合理的な構造で、トラスと控え柱を用いて大空間を構成している。また、スクラッチタイルや

ベニヤ板など近代的な材料を要所に用いて内外装を仕上げており、建物の顔となる正面玄関では、モルタル仕上げの庇を大胆に反り上げ、近代的な表現を試みている。戦後の復興を経て、新時代に向けて動き始めた当時の活発な雰囲気、今もなお伝わってくる。

（梅干野成史）



新屋公民館の設計図（ホール詳細）（提供：場々洋介）

1 穂高の盆

満願寺の仏迎え

穂高町の盆といえば、栗尾山満願寺に魂迎えたまがけに行く習俗が特徴的なものとして存在する。前年のお盆以降から今年の八月九日に亡くなった人の魂を迎えに行くのである。

迎えに行く日は、八月九日。満願寺へ行く範囲は松本市村井あたりから、池田町あたりにかけての広範囲で、檀家であるなしにかかわらず、また穂高町に限らない。昭和四〇年代初め頃までは、寺の本堂でお籠りをして一晚過ごし、翌日塔婆をいただいて、帰り道で子どもたちが売る盆花を



満願寺のお施餓鬼



十三屋敷



十三屋敷跡に残る浴槽



タカトウロウ
写真は堀金のものだが
穂高も同じ型のものを使用している

買って帰ったという。盆花は山崎や草深の子どもたちが売っていた。

また、人によっては満願寺へ行く途中にある十三屋敷鉱泉に一泊してお参りし、塔婆をいただいて帰ったともいう。十三屋敷は寺へ行く客を泊めたり、近在の人々の湯治などにも使われていた。現在、十三屋敷のあった場所は森の中に埋もれ、コンクリート製の浴槽がかすかに名残りをとどめている。

一般の家では八月一三日に盆棚を作るが、新盆の家では八月九日には盆棚を作り迎えてきた仏様をお祭りする。また、八月一日頃には、タカトウロウといって、高い竿の先に家型の燈籠に火を入れて、仏様が我が家に帰る目印とした。タカトウロウを立てるのは、一年目だけという家と三年間立てる家とがあった。現在はごくたまにしか目にする事ができなくなった。飾る日は八月一日から一六日とする家が多かった。

盆のご馳走

八月一三日、盆棚を作り仏壇から位牌を出して飾る。盆棚は、現在は組み立て式のものを準備している家もあるが、養蚕を行っていた昭和四〇年代終わりころまでは、蚕に桑を与える時に使用する給桑台などを利用して作る家が多かった。たとえば古厩では、給桑台を置き、その上に蚕かごなどを置いて新しい莫蔭を敷く。その上に仏壇から位牌を出して並べ、両脇にはキキヨウ・アワバナ（女郎花）などのボン花を飾る。籠の前の方に家の畑でとれた野菜・果物・エゴ・ご飯などを供える。

一三日夕方、墓へ仏様を迎えに行つてくると、盆棚に明かりを灯し、家族がお参りする。また、盆の期間中は家族が食べるご馳走を、盆棚にもお供えする。盆のご馳走は、切りこぶ・じゃがいも・ササゲ・干し揚げなどの煮物、干鰯の煮物、揚げ饅頭、塩丸いかの胡瓜もみ、エゴなどである。特にエゴは安曇野市内でも穂高町の穂高神社周辺から柏原あたりが南限の食物で、それより南の地域ではあまり食べることがない。エゴはエゴノリ（イゴノリとも）とよぶ海藻を煮溶かして、型に入れて冷やし固めたもので、酢味噌、芥子酢醬油からしなどをつけて食べる。他のものとはともかく、エゴがないと盆が来たような気がしない、という人もいる程、特色ある食べ物である。また、里芋の葉やカボ

盆のごちそう



向かって左から 塩丸イカのきゅうりもみ、干ダラの煮つけ、エゴ



切り昆布と干しあげの煮物、とうふ寄せ



無縁仏への供え物

チャの葉の上に供え物を載せ、盆棚の下に供える。無縁仏に供えるとか、餓鬼に供えるなどという。自分の家のご先祖様に供えるだけでなく、祭り手のない仏も祭ってあげようとする人々の心持をうかがうことができる。

一三日から一六日朝までの供え物を里芋の葉に包んで近くの川に流した。仏さまは一六日の夕飯を早く済ませてお墓に送って行き、その後、麦からの船を

作って火をつけ、川に流す家もあった。仏さまは善光寺に行くといわれている家もある。現在は川に流すことはしていない。また、一三日夜から一六日夜まで盆踊りが踊られ、老若男女が参加して楽しんだ。

(倉石あつ子)

2 石造物とその信仰

道祖神

安曇野ではどこに行っても道祖神がみられる。文字で「道祖神」「道陸神」などと書かれたものや、男女の像が彫られている「双体道祖神」などがある。「どーそじん」「どーろくじん」などと呼ばれている。穂高町内で大正年間までに造立された道祖神の数は一二七体で、そのうち双体像が八四体、文字碑が四三

体と記録されている。圧倒的に双体像が多いことが分る。昭和五〇年（一九七五）NHKで放映された「水色の時」のドラマに登場した道祖神や、昭和六〇年（一九八五）に穂高駅前に双体道祖神が建てられたところから、橋の両脇に道祖神が建てられたり、観光施設の入り口に道祖



大王わさび農場内の双体道祖神さまざま

神が建てられたりするようになった。それらは、双体道祖神であることが多く、「かわいい」と観光客の目を奪うような像容のものが建てられている。「道祖神の里あづみの」を意識していることがわかる。また、過疎の村の道祖神を穂高神社北参道に移動した



富田道祖神



穂高本郷の色つき道祖神・二十三夜塔

りして、観光的にも活用されている。当然のことながら、そこには信仰的要素は求められてはいない。

穂高町の多くの地区では、八月七日頃が祭日で、子どもたちが道祖神の前に集合して、掃除をした後お供えをしてお祭りする。穂高地区に

は、道祖神祭りの折に石像に色を塗るところも何箇所もあり、道を歩いていると穂高本郷のような鮮やかな色塗りの道祖神に出会うこともある。

特に供え物が決まっているわけではなく、七夕の竹を立てたり、花を供えたりする。地域の人々もお参りに来ることもあるが、現在は育成会の役員などが一緒に祭りをを行い、公民館などで飲食して解散する。

道祖神はムラ境に祭られ、旅人の安全を守ってくれる、悪霊や疫病がムラにはいるのを防いでくれる、男女の縁結びをしてくれる、子孫繁栄、子どもの無事な生育を見守る、五穀豊穡など、さまざまな機能をもつ神と信じられていた。

小正月一五日の夜に行われる火祭り「三九郎」も道祖神の祭りと考えるところも多い。

講が建てた石造物

かつて、それぞれの集落にはいくつかの講があった。中でも最後まで残ったのが庚申講である。庚申の夜、集落の仲間が当番の家に集まって庚申の掛け軸をかけ、灯明・菓子・果物・酒などを供えてお参りし、念仏を唱えた。終わると夜遅くまで、さまざまな情報交換や世間話をしてすごした。庚申講の仲間は葬式の折に手伝いをしてくれる仲間でもある集落が多く、そのために庚申講は講としての機能

を保ち、現在もかろうじて続けている集落もある。

また、大黒様を祭る甲子講きのえねもかつては盛んに行われていた。大黒様は豊穡や商売繁盛を願って祭るもので、屋内で祭るときにはえびす様とセットで台所の神棚などに祭られる例が多い。しかし、屋外の大黒様像は、大黒様が単体で祭られることが多く、文字碑も「大黒様」と刻まれたものが多い。古厩本郷のような大きな大黒様の石像は、大町市内では見かけることが多いが、穂高町まで来るとだんだんに減ってくる。

辻の一角に道祖神などと並んで大きな大黒様が建てられており、思わず立ち止まって見とれてしまうほどの大きさの像もある。こうした大きな大黒様像を祭るのは、大町周辺から穂高町あたりまでで烏川を越えないといっているかもしれない。何故か穂高町以南になると、大黒様像はほとんど見られず文字碑になり、碑



古厩本郷の大黒様

もそれほど大きなものはみられない。この分布が何に依っているのかは分からない。

二十三夜講

月の出を待つて月に願いをかける講もある。月待などといい、十七夜、十九夜、二十三夜が主なものである。月の出る時刻によって、立ち待月、居待月、寝待月などとも呼ぶ。二十三夜講は、単に三夜さま、三夜講などとも呼ぶ。

穂高町周辺では、二十三夜待が多くみられ、勢至菩薩の掛け軸をかけて念仏をあげてお参りする。庚申講と同様に、夫婦が同衾してはいけないなどというところもあり、忌み籠りの要素が見られる。

穂高周辺ではこの月待を女性の講としているところも多く、若い嫁が集まって行ったというところも見られる。二十三夜は月の出が遅いので、講の始まりも夜遅くから始めるところもあり、日ごろ夜出かけることのない女性たちは「夜の外出」という点でも楽しみなひと時であった。講の目的は、安産祈願、子育て祈願などと考えているところが多い。三夜が産夜と通ずるところからきたものであろうと考えられたり、月の満ち欠けを目安に行われるところから、女性の生理の訪れを知る手段としても用いられた。

掛け軸などにお参りしたのは、持ち寄った漬物や当番の家で作ってくれた煮物などでお茶のみをして話に興ずる。ムラの女性たちの親睦を兼ねる機会でもあった。道端の石造物は、講の開催の何回目かの記念などに建てたものであ

ろうと思われる。大きさはさまざまだが、ほとんどが文字碑である。先の穂高本郷の写真のように、道祖神に色づけする時に二十三夜講の文字碑にも色づけしているような例もみられる。

(倉石あつ子)



等々力町の二十三夜塔など

3 道祖神を祭る御柱

年の初め、安曇野市内では、御幣や扇子などで飾られた大きな柱が立てられているのを目にする。安曇野市や松本市の一部地域で行われる、正月の道祖神の祭りである。安曇野市内で御柱を立てる地区が特に多いのが三郷地域で、豊科、堀金地域でも行われる。穂高地域では柏原の倉平、塚原の中部と巾上地区の三ヶ所で立てられる。

柏原倉平の御柱

倉平の集会所の前に二基の道祖神が並んでいる。安政二年（一八五五）建立の下蔵平の道祖神と、安政五年（一八五八）建立の上蔵平の道祖神である。もともとは別の場所にあったものを集めたのだろう。御柱立ては戦後の一時期に途絶えたが、昭和五二年（一九七七）に復活した。現在は正月の月上旬に行われている。

長さ九尺ほどの柱は、御幣や扇子などで飾られる。御柱の横棒として取り付けられた桑棒には、いくつかのタワラ（俵）が結びつけられている。タワラは御柱を倒した後、結婚や出産など前年にお祝い事のあった家に納められるため、慶事のあった戸数の分だけ用意される。

塚原の御柱

塚原の中部、栗尾山満願寺へと続く栗尾道と、堀金岩原へと続く岩原街道が交わる辻に双体道祖神が建てられている。以前はこの場所に御柱が立てられていたが、平成二八年（二〇一六）からは、塚原八幡宮西側にあるグラウンドの敷地に立てられるようになった。

御柱は一月五日ごろに立てられ、各家で作ったタマ（玉）と呼ぶ巾着や、俵、おかめのお面などが飾られる。特にタマは、一年間の厄を祓うと考えられ、御柱を倒した後、地域の子どもたちによって家々に配られる。

同じ塚原の巾上では、月上旬に御柱が立てられる。場所は矢原沢の北、道祖神の文字碑などが建てられた畑の一隅である。

御柱に取り付ける福俵は、本来、前年に福俵を受けた家が奉納することになっている。だが、近年は俵を作れない家が多いので、三九郎御柱保存会が元日の午前中に集まって、作り方の伝承も兼ねて俵づくりを行っている。

また地域の子どもたちは、御柱に飾る布製のクスダマ（薬玉）を家々から持ち寄り、近くの桑畑から桑棒を採って集

めてくる。御柱を倒した後、クスダマは全員で分け、一年間のお守りとして家の門口などに掲げられる。
昔から子どもたちの祭りとして行われてきた御柱立て、その風習は今も受け継がれている。

（逸見大悟）



塚原巾上の御柱（平成28年（2016））



塚原中部の御柱（平成27年（2015））



倉平の御柱（平成26年（2014））

4 穂高地域のオフネ祭り

神社の祭りで曳き出される船型の山車「オフネ」、その形はさまざまである。特に前後に木や竹で膨らみをつけたハラを出して幕を張り、人形などの飾り物を載せたオフネは「穂高型」とも分類される。穂高神社の御船に似たこのような型のオフネは、安曇野市内や周辺町村の神社の例祭で広く曳行されている。

飾られるオフネ

オフネで最も目を惹くのは、やはり人形飾り物であろう。穂高神社の御船と同じように、人形に着物や鎧などを着せ、歴史上の出来事や昔話の名場面を再現している。近年は穂高人形・御船祭保存会から人形を借りるところも多いが、それぞれ趣向を凝らした飾り物が見る人の目を楽ませている。立足の諏訪神社の舟には人形は飾られないが、ハギの花やスキの穂などが取り付けられ、秋らしい装いに仕上げられる。

船幕も地区によって多様である。紅白のみの幕が多いが、線の太さや本数、幕の張り方は異なる。牧は白、赤、黄、紫、緑が配色されているし、矢原は白、青、赤、紫の幕に

梅鉢紋が白抜きされたデザインである。オフネの飾りを見るだけでも華やかで面白い。

神様の乗り物としてのオフネ

現在、ほとんどのオフネは地域の集会所などで組み立てや飾り付けが行われ、本祭りや宵祭りに神社境内まで曳行される。境内ではオフネを三周させたり、前後に揺らすアオリを行ったりする。これらの所作をオフリヨウとかオフレなどと呼ぶところもあるが、その方法は地区によってさまざまである。境内の中央に立てられた千度石の周りを回るオフネもあるが、新屋の諏訪神社では、千度石ではなく、中央に立てられたソヨゴの枝の周りを回る。牧の諏訪神社では、境内に聳える杉の巨木の周りを三周し、一周するごとにオフネを前後に揺らしてあおる。

この三周させるといふのは、神様を喜ばせる神賑わいという意味づけもなされているが、七一頁でも触れたように、神霊の降下を願うためだとする説がある。オフネの船縁には、マツやスギなどの枝が飾られる。これをシバと言うが、神の依代となる常緑樹を飾ることも、神の乗り物という意

穂高地域で曳行される
「穂高型」のオフネ



立足・諏訪神社



嵩下・館宮神社



古厩・大宮神社



富田・伊夜比古神社



矢原・神明宮



牧・諏訪神社



新屋・諏訪神社



新屋・諏訪神社のオフネの骨組み

味を含んでいるのかもしれない。さらに牧、古厩、富田などでは船縁にヤナギバナ（ハナとも呼ぶ）を飾り、祭りが終わると地域の人々に分ける。神様の御利益にあずかるという意味もあるのだろう。

豊里穂高神社の御船祭り

伝統的な祭礼とされるオフネ祭りの中で、唯一、平成に入ってから始められた祭りがある。豊里穂高神社の御船祭りである。

現在の豊里には戦前、松本五〇連隊の演習場があり、開拓されたのは戦後であった。入植当初は、現在のしゃくなげ荘の近くに穂高神社の神霊を祭っていた。平成元年（一九八九）、穂高神社の大遷宮を機に社殿の払い下げを受けて、現在の公民館北側に移し、豊里穂高神社と改称する。こうして新しい神社が奉斎されたものの、他の地区の祭りではオフネが出て賑わうのに、自分たちの地区では宴会とカラオケだけで終わってしまい、子どもたちの楽しみがないという声が聞かれるようになった。

そこで平成一三年（二〇〇一）ごろ、大八車を改造してオフネに見立てた山車が曳かれるようになる。曳行には子どもたちも参加した。さらに豊里穂高神社の勧請二〇年を契機にオフネを作ることが決まった。資金面や技術面での

不安はあったが、豊里に移り住んだオフネ作りの経験者や大工、芸術家らが中心となって、オフネの制作が始められた。子どもたちはお囃子も練習した。「子どもたちに夢を」をスローガンに豊里地区一丸となって取り組んだという。

豊里穂高神社の御船が初めて曳かれたのは、平成二二年（二〇〇九）のことである。稲穂が揺れる九月中旬、西山山麓線を進む豊里の御船を見ることができる。（逸見大悟）



豊里穂高神社の御船

有明山麓

有明山の麓、宮城地区に正福寺という寺があり、お不動様が祭られている。この寺は十返舎一九の『続膝栗毛』にも描かれているし、かつては大町方面からも参拝客があり賑やかだったことが、菅江真澄『伊那の中路』などにも描かれている。



八面大王 (村上紀子画)

魏石鬼の窟と八面大王

この正福寺の奥に、魏石鬼ぎしきの窟いわやがある。そこは桓武天皇の時代、八面大王が有明山に立つて中房温泉を見下ろし、「こここそ我が住むべき地」であると、部下を集めて魏石鬼ぎしきの窟いわやに住み着いたといわれている。出没自在の魔力を持ち、雲を起こし、霧を降らせ、天地を飛行する能力を持ち、自ら八面大王と称した。しかし、この八面大王、村里に出て悪さばかりして乱暴狼藉らんぼうろうぜきを働くので、朝廷は坂上田村麻呂さかのうえのたむらまろに命じ、これを退治させた。田村麻呂は、手こずりながらも矢村の矢助が献じた山鳥の尾の矢を放って、無事退治した。五体をバラバラにして葬らなければ、蘇生するといわれ、首（筑摩神社に埋葬）、耳（耳塚に埋葬）、脚（立足に埋葬）をバラバラにして埋めた、と言う話が伝わる。それぞれに地名となつて伝えられている。

窟の上には坂上田村麻呂の創始によると伝えらえる観音堂が建つ。坂上田村麻呂の守り仏が、京都清水寺の観世音だったため、ここにも勧請したと伝えられる。観音堂の縁日は一月一六日で、古厩集落の人々が中心になつて祭りが行われている。

（倉石あつ子）

実は古墳

大正一〇年（一九二一）、著名な考古学者である鳥居龍蔵が調査を実施し、ドルメン式という巨石を用いた古墳であると発表して以来、特異な古墳として注目される。

昭和六一年（一九八六）に穂高町誌編纂に伴って、本格的な調査の手がおよんだ。正面の高さ三・六メートル、左右の幅七・九メートルの観音堂が建つ巨大な岩の下に、石を積み上げて横穴式石室のように仕上げている。ここが本来空洞であったのか、それともわざわざ穴を掘ったのかはわからない。石室は、穂高古墳群にある横穴式石室と同じであるが、奥行き四・三メートル、最大幅二・七メートル、最大高さ二・五メートルを測る。自然の巨石を墳丘とし、さらに天井石として見立てる、特異な古墳であることはまちがいない。

造られた時代、使われた時代は

古墳の内部は後世に信仰の場として利用されたため、大きく改変されている。そのため多くの遺物は残っていない。わずかに、馬具や鉄鏃（やじり）、須恵器の壺などが発見されている。それらは、六世紀後半から七世紀後半の穂高古墳群の出土遺物に共通している。造られた時代はその頃であらう。

天井石に用いた自然の巨石には観音像が彫られている。石室内部からは新しい時代の銭貨や陶器が発見されており、石室内部は煤けている。近世には上にある観音堂に伴って信仰の場として利用されたのであらう。

（原明芳）



魏石鬼の窟内部

緑に輝く繭 天蚕の今昔

天蚕の歴史

一粒の緑色に輝く繭。これが有明地域特産の天蚕繭で、山繭とか山蚕と呼ばれているものである。穂高有明古厩に位置する正真院の周辺から堀金地域にかけての、現在の山麓線沿いは、山蚕の一大産地であった。

天蚕はクヌギ・コナラ・カシワなどの葉を食べて大きくなり、繭をつくる。ヤマコ・ヤママユガ・ヤママユなどともよばれている。安曇野地方で天蚕の飼育がされるようになったのは、天明年間（一七八一―一八九）の頃からといわれ、野生の木に付いていた種を集めて飼育を始めたものといわれている。本格的に飼育されるようになったのは江戸末期から明治初期のことという。三郷の務台家に伝わる『公私年々雑事記』の文政一〇年（一八二七）の記述に、「当年頃ヨリ、山蚕夥シク流行」との記述があり、このころから本格的な飼育が始まったものと思われる。

やがて、明治三〇年代ごろには、栃木や茨城県のクヌギ林を借りてまで飼育するようになった。欧米諸国の絹に対する需要が増大し、家蚕の絹糸と共に天蚕の絹糸の需要も増加した。しかし、天蚕は野外の自然林での飼育のため、

鳥害やアリに襲われる被害もひどく、収繭率は三割にとどまった。また、一化性のため年一回の飼育しかできなかった。年々四回ぐらい収穫できる家蚕の方が収入が安定していたから、次第に家蚕に重点を置くようになった。国



大正5年（1916）天蚕林の風景（個人蔵）

策としても天蚕より家蚕の白い繭に力を入れるようになった。加えて明治四一年（一九〇八）の焼岳の噴火により、クヌギ林が甚大な被害をこうむり、一時、天蚕は

天蚕の復活

昭和四八年（一九七三）、穂高町は地元のすぐれた産業で

横ばい状態を保ったが、世界経済の落ち込みによる日本経済の悪化によって昭和四年（一九二九）には既に三〇万粒に激減した。その後、第二次世界大戦が激しくなるにつれて、天蚕の餌となるクヌギの木の新定をする男性たちが応召されて人手がなくなっていたことと、食糧増産に駆り立てられ、天蚕飼育は県の蚕業試験場などからうじて種を保存する程度のもとなっていた。再び天蚕に光が当たるのは、戦後しばらくしてからであった。



天蚕は擬態。葉か幹になったつもり

衰退に追い込まれた。大正期に入ると再び天蚕の価値が見直されるようになり、有明村役場が国などに補助金の申請を行って、大正五年（一九一六）には六〇〇万粒を生産するまでに回復する。

昭和初期ごろまでは

ある天蚕飼育に対する見直しを行い、復活を呼びかけた。町長を先頭に、中嶋福雄の尽力により飼育経験のない農家も説得して、復興が軌道に乗った。穂高町も昭和五三年（一九七八）に天蚕飼育の復活・繰糸・機織りを後継者に伝承することを目的として「天蚕センター」を開館した。

当時はまだ和服を着る人

もいたし、天蚕が入った紬などは「有明紬」として商標登録もされ、天蚕糸の魅力が分かる人がいた。また、反物の価値が一代限りのものではなく次世代、次々世代へと受け継いでいけることを見越して嫁入り道具の一つとする人もいた。天蚕糸が入った反物は、天蚕糸の部分が他の染料では染まりにくく、光があたるとその糸がある部分が独特の光を放つ。天蚕糸の入った反物が高級反物という意識は、織り手の方にもあり、昭和四三年（一九六八）刊行の『南安曇郡誌』には明治二四年生まれの話者の話として「山蚕ちりめんも織ったが、山蚕糸は染まらないので家づかいにはほとんどなかった」と言い、織っている人でさえその糸で

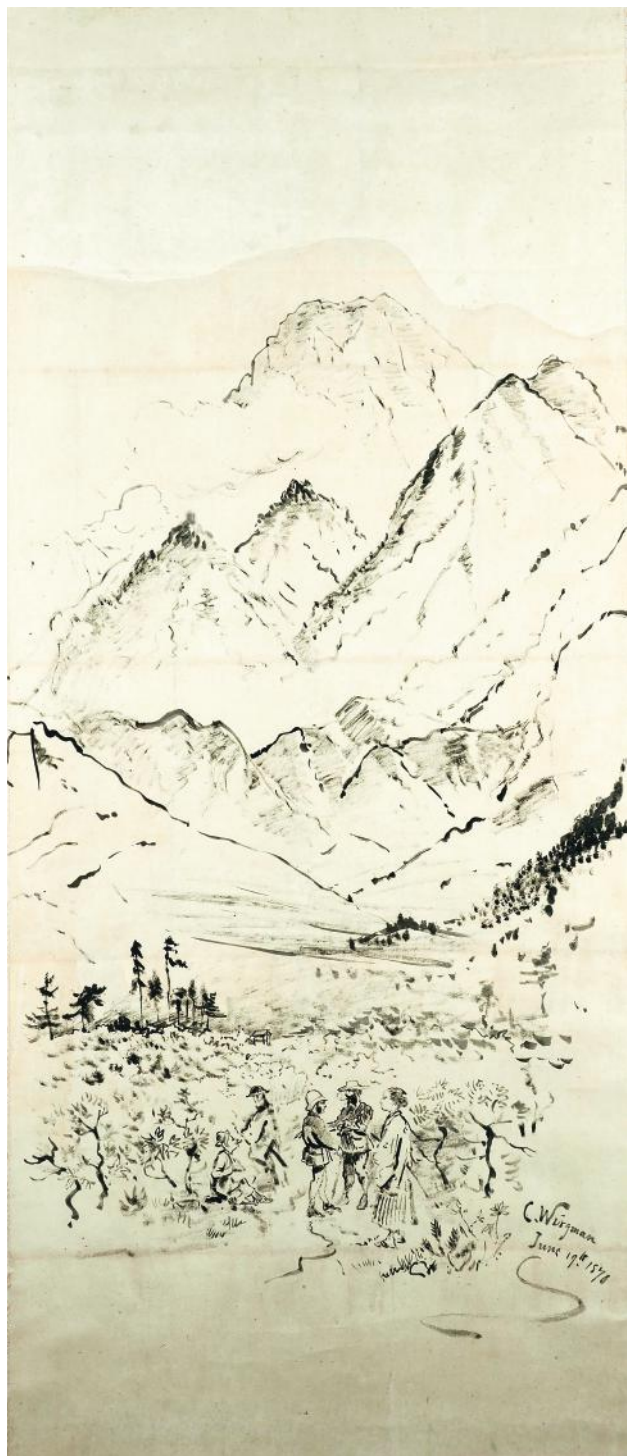


収穫された上繭

作った着物を着ることがなかった高価なものであり、現金収入のための糧であつたことが分る。こうして復活した天蚕飼育も、中嶋福雄の逝去や飼育者が高齢化するなどのさまざまな要因によって、現在は天蚕振興会のメンバーが飼育を細々と継承している。天蚕糸は一本の糸の中に管が七本通っており、伸び縮みするという特色をもつ。したがって、天蚕糸と家蚕糸を組み合わせた反物を織ることができても、経糸も緯糸も天蚕糸を使用した「全天蚕糸」の反物を織れる人はほとんどいなくなってしまうている。

イギリス公使館書記官アダムズの天蚕林視察

こうした天蚕糸は、早くから外国にも注目され、明治三年（一八七〇）には、イギリス公使館書記官のF・O・アダムズら一行が、有明の天蚕を視察に訪れた。もちろん、天蚕視察だけではなく道中の家蚕の飼育状況も視察して、それらの視察結果はヴィクトリア女王の命により、イギリス上下両院に提出された。原書は英文だが、現在、富岡製糸場総合研究センター報告書として和訳されている。



ワグマン画 アダムズ天蚕林視察の図（個人蔵）

天蚕は、現在、有明地区の正真院裏や天蚕センター近くのクヌギ林で飼育される。十一月終わりにから一二月初めごろにクヌギの木の剪定を行い、三月ごろには野焼きを行う。天蚕はウィルスに侵されやすいので、天蚕林の管理は手が抜けない。野焼きをするお陰で、天蚕林には希少植物も見られる。また、カエル・アリ・ハチなども天蚕にとっては天敵なので、見つけたら退治しなければならない。マイマイガなども天蚕の餌であるクヌギの葉を食べてしまうので、見つけたら退治する。

近年はサルの群れが出没し、繭の中に蛹ができることになる。繭を食い破って蛹を食べてしまうので、猿を追いかねなければならぬが、なかなかしぶとく人との根競べ



天蚕圃場の野焼き

一行は松本藩士に護衛され、六月一七日有明に到着。二泊して松本に戻り、次の目的地に向かう。視察の様子は、同行したワグマンによってスケッチ画が残され、掛軸として某家に所蔵されている。

飼育林を整備する

のような状況である。加えて陽気の変動は飼育にも影響し、令和二年（二〇二〇）の収穫量はA家の場合、五二〇（二割）粒であった（ヤマヅケは二五〇〇粒）。

飼育過程

天蚕は家蚕同様、四回の脱皮の後五齢目で繭を作る。天蚕は一化性なので、年に一回の飼育であること、非常に繊細な蚕であること、擬態であることなどが特色として挙げられる。眠に入っているときには、木を揺らしたり大きな声を立てたりしてはいけないといわれている。

五月の中頃から下旬にかけて、天蚕の種をクヌギの木につける「ヤマヅケ」を行う。四〇日ぐらいで五齢になり営



ヤマヅケされた種紙



ケゴ（毛蚕）

繭をする。繭作りはじめて、七日ぐらいすると収繭することが出来る。二枚の葉を巻き込むようにして営繭しているので、葉っぱごと切り取って収繭する。収繭した繭は軒下などに広げて乾燥させ、葉っぱを取り除いて出荷する。かつては、仲買人などが回って買い取りに來たが、現在は天蚕センターで集約し、岡谷の製糸工場に出して、殺蛹してもらう。天蚕センターに戻された繭は、繰糸部の女性たちによって糸に紡がれ、反物に織られる。

また、種は八月ごろ蝶籠に羽化した雌雄の蝶を入れ、交尾させて卵を産ませる。蝶籠の外側に卵を産み付けるので、卵は二月から三月ごろに籠から外し、細かい目の網に入れて水でよく揉み洗いし



収繭作業
葉のついた幹ごと切り取り後で葉を取り除く

て水でよく揉み洗いし
膠結質をとって、バラ
バラにする。卵が乾い
たら、和紙に蕨粉の糊
をつけて、卵を載せて
いく。

種紙も古厩・立足・
松川村あたりで漉いて
いたといわれている。
繰糸・織りに入るまで
の作業はほとんど男性
の仕事で、その様子は

水上勉の『有明物語』にある夫婦の物語として描かれている。現在のように防鳥網などがなかった時代、山を見回って鳥追いをするのも男性の仕事であった。家蚕飼育が女性



二人一組で糊づけ



蝶カゴにうみわけられた種



糊づけされた種紙に卵をつける

中心であったのと、対照的である。

糊付けされた和紙の穴に、卵を置いていく。一つの穴に卵一〇粒程度が目安である。穴二つずつを一組にして切り、木にホッチキスで止付ける。直射日光や雨が当たらないように、葉っぱの陰になるようなところに止付けるのがコツ。

やがて、繭になると一粒からおよそ六〇〇粒の糸がひきだされる。家蚕の一二〇〇粒に比較するとその半分であるから、貴重な繭から紡ぎ出された糸を使った製品の値段も必然的に高くなることが分る。

天蚕糸が入ったさまざまな製品

天蚕糸を使用した製品の主流はやはり有明紬であろう。

また、全天蚕糸の反物なども見ることができし、昔の着物の刺繍糸などにも天蚕糸が使用され、独得の光を放っている。現在はネクタイ、ポーチ、名刺入れ、免許証入れ、マフラー、テーブルセンターなど小物をいくつか開発して、多くの人々に天蚕の良さを知ってもらう工夫がされている。穂高北小学校では、自分たちで天蚕飼育をし、収穫した繭を活用して、卒業生がコサージュを作っている。

(倉石あつ子)



イヤリング



名刺入れ・免許証入れ



天蚕糸の入った紬を織る

7 安曇野名物 穂高の山葵 小金白銀 砂に湧く

安曇野のわさび栽培の歴史

安曇野でのわさび栽培のはじまりは、明治初年頃といわれている。現在、わさび栽培が盛んな地域は、もともと梨の特産地でもあった。梨畑の排水のための掘割に、わさびを植えてみたところ、良いわさびが収穫できたため、自家用から販売用に栽培するようになったという。年間を通して水温が変わらない湧水を利用した栽培方法によって、一年中収穫することができると、わさび栽培に適した環境であったことが、わさびが短期間で安曇野を代表する特産物になった理由であろう。

明治二〇年代にはわさびの粕漬^づけが製造され、犀川の船便を利用して新潟県方面まで行商されるようになった。明治三五年（一九〇二）に篠ノ井線が開通すると、信越線經由で東京へわさびを出荷した。すると梨とは比較にならない高値がつき、梨畑は次第にわさび畠へと転じていった。稚蚕飼育のための歩桑畑^{ふくわだち}を、わさび畠に変えた人もあった。

明治四四年（一九一一）には中央線が開通し、大正四年（一九一五）に信濃鉄道（現大糸線）が開通するとさらに東京への出荷が容易になり、わさびの生産は増加した。

信濃鉄道が開通して

まもなく、わさびの主要産地の伊豆・静岡地方が、台風や関東大震災などの被害を受け、東京の市場に出荷できなくなると、俄然、信州産のわさびが注目され、それまでの倍近くの値がついた。梨畑や歩桑畑だけでなく水田もわさび畠に開墾され、大正時代末期には九〇町歩余りの広大なわさび畠が完成した。

わさびの栽培方法

わさび栽培は全国各地で行われており、栽培方法は地域によって異なるが、「平地式」と呼ばれる湧水を利用した栽培方法は、安曇野でしか見ることができない。他地域の栽



わさび漬け作り（昭和初期・穂高）

培法ともっとも違う点は、養分を含んだ水が作土の表面上を流れているのではなく、湧水となつて畠の表面へ湧き出しているという点である。そのため、湧水を畠から排水する必要がある。わさび畠をよく見ると、周囲に排水路が張り巡らされていることに気づくだろう。



砂作りのわさび畠（北穂高）

栽培には適温であるものの、水遊びをする子どもたちにとっては、「一分浸かると唇が紫になる」くらい冷たいものだったという。

わさびの今

安曇野でしか見ることのできない、独特の景観を作りだしているわさび畠。豊かな水の郷・安曇野を感じさせる観光スポットとなるわさび畠がある一方で、湧水不足や後継者不足で、栽培を放棄されたわさび畠も少なくない。「安曇名物 穂高の山葵 黄金白銀 砂に湧く」と、盆唄安曇節で唄われるように、景観・観光・味覚と、安曇野を代表するものが、わさびとわさび畠である。チューブ入りのわさびしか食べたことがないという人もいるかもしれないが、今夜は名物穂高のわさびをすりおろして、その辛さ旨さと風味を楽しんでみてはいかがだろうか。



穂高旧道にはわさびの葉がデザインされた街灯が並ぶ

さらに、安曇野の平地式栽培法は、北穂高・穂高地域（乳川・穂高川流域）で作られている「砂作り」と、豊科南穂高・明科塔ノ原地域（万水川・犀川流域）で作られている「石作り」という方法に分けられる。砂作りの畠は白い砂が多いため、畝が白く見える。これは乳川や穂高川上流部の中房川が花崗岩流域であるからで、豊科南穂高・明科塔ノ原地域では、黒い礫が多いため、畠は黒く見えるのである。

戦前生まれの方の中には、子どもの頃、わさび畠の排水路で泳いだという思い出のある方も多い。湧水は、わさび

（宮本尚子）

8 鯉は祭りのごちそう

安曇野では、氏神の宵祭りの際に、家に客呼びをしてごちそうを食べる風習がある。この時のごちそうに欠かすことができないのが、鯉の旨煮だ。切り身にした鯉をやわらかく美味しく煮つけるのが、主婦の腕の見せ所だった。北穂高のある家に嫁いだ女性は、鯉の旨煮を「義母の得意料理」と言う。川の魚は泥臭いというが、鯉の旨煮は別、と言う人も少なくない。

現在は、鯉屋などで買い求める鯉だが、かつては田鯉といって、鯉の稚魚を田んぼに放し、田んぼの雑草を食べさせたり、育った田鯉を食べたりした。田鯉のことを、稲田養鯉ともいう。穂高矢原のYさんの家では、戦時中に田鯉を飼ったという。鯉の稚魚は「コイツコ（鯉仔）」と呼んだ。当時は北穂高に鯉仔組合があつて、農協を通して買っていた。コイツコを買う時は、茶碗に何杯といって購入した。Yさんの記憶では、一〇〇〇匹以上は買ったという。

Y家は田んぼが五枚あり、そのうちの一枚に田鯉を放した。どの田んぼでも良いというわけではなく、泥の深い田んぼが良い。畦草は短く刈っておく。畦草が長いとそれを伝つて、猫がコイツコを食べてしまうからだという。また、田鯉を入れる時期は、稲がある程度大きくなった六月頃。

コイツコが稲の陰に隠られるようにならないと、今度は鳥などに食べられてしまうからだ。田鯉は、食用のためでもあったが、田の草や害虫を食べてくれるし、泥をかき回してくれて稲の根も良くしてくれるという利点もあった。ただし、鯉は田んぼの真ん中の方に居て、端っこには来ないので、端の方

だけは田の草を取らなければいけないかった。エサは、田んぼの雑草などだけでは足りず、ほかに、かんぴょうを引いたユウガオの芯をやった。

九月一〇日頃、稲刈りの前には、家の庭に掘った一間四方くらいの池に



トウゼッコを開いて焼いたスズメ焼き



昭和30年代 鯉仔売場の生け簀 (丸山鯉屋提供)
生け簀ごとに大きさの異なる鯉が入っている

田鯉を入れて、きれいな水で泥を吐かせる。お祭りは九月二四日なので、ちょうどよかったという。一年目の鯉は「トウゼッコ」と呼んだ。一〇センチほどになっていれば大きい方だ。トウゼッコは開いて串刺しにしてスズメ焼きにするが、小さいので一人二匹は食べた。鯉はハレの日の食べ物だった。

冬の間は、わさび畠の排水路に生け簀を作って鯉を放した。真冬でもあたたかい湧水のおかげで、冬の間も鯉を食

べることができた。田鯉は、戦後、田んぼを七月半ばに土用干しするようになってからは、やらなくなったという。

信州で鯉と言えば、佐久鯉が有名だが、北穂高でも明治時代初め頃から池中養鯉がはじまり、特産物として、昭和五〇年頃までコイツコを販売した。明治時代後期には、天秤棒を担いだ鯉仔売りが、新潟・山梨・愛知・岐阜・静岡まで売り歩いた。有明駅は鯉仔を求める人で賑わったという。

その後、養鯉業をはじめ田鯉も徐々に衰退していくが、北穂高の丸山鯉屋に残る鯉仔組合の販売記録「各村鯉子配給台帳」(昭和二六年(一九五二))によれば、安曇野市内(当時は各町・村)は言うまでもなく、開田村などの木曽



祭りのごちそう 手前中央が鯉の旨煮

地方や塩尻市まで販売している。車はなく、電車に乗って、桶に入れたコイツコを猪口何杯で売り歩いたという。

安曇野の養鯉は廃れたものの、鯉料理は祭りのごちそうとして今でも親しまれている。

(宮本尚子)

別荘地開発の発端

穂高町は終戦後いち早く町を観光地として売り出すことを計画し、別荘地の開発に着手した。自然との共存を開発の中心に置いた穂高町は、当時、自然に関心の深かった川端康成を招いて「大自然との調和を図りながら、穂高山麓を開発するのにはどうすべきか」意見を求めた。昭和四五年（一九七〇）春、川端康成・井上靖（お連れ合いも同行したという）・東山魁夷のお三方を招き、安曇野を案内して将来の開発の在り方に助言をもらった。穂高神社・礪山館・わさび畠などを見学し、長峰山から安曇野を眺望した。お三方とも安曇野の風景・個々の場所に魅了され、「地域の発展は開発なくては語れない。将来展望として、自然をどう活かす、どう調和させるかが重要だ」と述べ、それぞれが「残したい静けさ・美しさ」「安曇野はなんと美しかったことか」「世界一級の景観だ」「自然との合唱」などの感想を残した。また、長峰山に明科町が建てた宿泊施設を井上靖は自作の小説『天平の薨』からとって、「天平の森」と命名したといわれる。

別荘を売り出す

この著名な文豪・画家の来町に先駆け、穂高町では既に昭和三五年（一九六〇）ごろから、海拔七〇〇メートル前後に位置する場所を別荘地として販売し始めていた。中房川の南に広がる広大なクヌギ林で、天蚕の飼育林であった場所である。「しょうしんいんばら正真院原」と呼ばれたその場所は、夏季の平均気温が二〇度から二五度で木々の緑と豊かな山の恵み、静寂な環境という恵まれた条件は、魅力的な別荘地になると町は考えていた。昭和三八年（一九六三）十一月の『町報穂高』によれば、法政大学・都立大学・東大などの教授をはじめ、医師・作家などが購入をしている。法政大学などは附属高校の林間学校などの施設も造り、施設の近くには広大なグラウンドも整備した（現在は使われていない）。川端康成などの来町以前にすでに開発はスタートしていた。昭和三九年（一九六四）の町の広報誌には「学者村の建設を夢見た」旨が掲載された。幸いそれが実現し、法政大学第二工業高等学校が、夏季林間学校を開設したこと、別荘地に來た学者たちに夏季大学の講師になってもらいたいと考えていることなどが述べられている。

「自然を大切にした格調高い別荘地の開発を」との助言もあり、街の歴史や文化を誇れる別荘地として、それぞれの



鈴玲ヶ丘学者村入口

開発地に「学者村」を冠し「鈴玲ヶ丘^{りんれいがおか}学者村」など五ヶ所余りの別荘地が開発され売り出された。開発面積五〇〇万平方メートル、七七六区画が完成した。

また、昭和四七年（一九七二）穂高温泉開発公社が発足し、温泉付きの別荘地が売り出されることになった。温泉代は土地代とは別途支払うが、到着温度四五度・一口あたり毎分二立方メートルの湯量が保証され、基本料金は月三〇立方メートルまでは四五〇〇円であった（これを超えると超過料金がかかる）。別荘地は前記の大学教授などの他、彫刻・絵画・陶芸・染色などを行う芸術家も居住し、創作活動のかたわら、町の各種学習教室や講習会に講師として招かれて活躍した。

別荘地の変化

現在も前記の別荘を購入した人々が常住するようになり、既に代替わりを機に売却したりしたケースも見られる。最初に購入した親世代が高齢化して、かつては不便さも別荘地の良さとして捉えられていたものが、店が遠い、とか寒いとかといった理由で、手放す人も出てきている。軽井沢などの別荘地を想像して購入した場合、さまざまな条件面でそれと異なり、舗装道路がない、雪かきをしてもらえないなども手放す一つの要因となったようである。



泉郷別荘地案内板

いであるともいえる。五〇年前に「自然を大切にした格調高い別荘地の開発を」と提唱した川端康成ほかの言葉の意味が、改めて問い直される時期に来ているのであろうし、「開発」の難しさも見えてきている。

現在、地元の不動産業者などが中心になって刊行している住宅情報誌などをみると、築二〇年ほどを経た別荘が売りに出されている。泉郷、小岩岳、宮城、有明などその地域は各地に及んでいる。売り物件の中には「常住可」とい

こうした別荘地は西山山麓に存在するため、現在は猿・熊・キツネなどの野生動物が出没し、戸外に食べ物などを置いておくと荒らされるケースも増えてきている。気象条件や自然条件が年々変化してきていることも影響しているようが、野生動物や植物の生息地帯に人間が入り込んだための閑^{せめ}ぎあ

う条件も見られ、売り手側は必ずしも別荘地としての利用だけを希望してはいない。また、敷地の広さもいろいろで、一〇〇坪未満の家があれば、三〇〇坪近い敷地の家もあって、開発時に一定の広さ以上を売り出したのではないことも分かる。穂高町が当初目論んだように、すべてが温泉付き別荘ではなく、「温泉湯権つき」という記述も見られ、温泉がすべての別荘にひかれたわけでもなかった。

(倉石あつ子)



猪鹿の牧学者村の案内板

別荘は2^{キロ}ほど上った緩斜面に開発されている。

温泉開発

穂高地域の温泉開発の歴史は江戸時代にさかのぼる。中房谷は地元有明地区の人々の農閑期の湯治場として親しまれた。しかし、山道は険しく、冬は雪に閉ざされるので、五里の道のりを歩いて湯治に行くことは無理であった。そこで、人々はお湯を地元までひいてきたいと夢みた。特に熱を入れたのは古厩の人々で、明治九年（一八七六）には引湯事業に着手した。木をくりぬいた管や竹筒をつなぎ合わせた方法で試行したが、長距離の道を引いてくるとすっかり冷めてしまい、事業は失敗に終わった。

再び引湯の話が具体化するのは大正八年（一九一九）一月で、有明温泉株式会社創立総会を開催し、事業が始められた。引湯に限らず、別荘地の開発も企画されており、原湯借用料を支払う契約をしたのものであった。



穂高温泉郷の標示石

穂高温泉郷

穂高町は別荘開発と共に、温泉を引いて温泉郷を作るところを計画した。町営の「しゃくなげ荘」はその代表的な施設でもある。温泉は有明地区の奥にある中房谷の湯本から引いてきている。温泉健康館と宿泊施設があったが、老朽化のため建て直され、平成二八年（二〇一六）に場所を少し移して日帰り入浴施設「しゃくなげの湯」としてリニューアルオープンした。かつてしゃくなげ荘近くにあった「ハ



しゃくなげの湯正面入口



八面大王足湯

面大王の足湯」も、近くの物産センターVivifの奥に再度オープンした。

湯は、アルカリ性単純温泉、泉温七五・四度といわれている。「しゃくなげの湯」は通称「山麓線」沿いにあり、山麓線沿いには湯本を同じくする引き湯をもつ宿泊施設が多数存在する。

ゴルフ場を中心とした一大レジャーランド

穂高温泉郷を開発しはじめた昭和四五年（一九七〇）ころ、穂高カントリークラブの造成工事も始められた。完成したのは昭和四七年（一九七二）であった。穂高温泉郷と別荘地とのセットでゴルフ場も併設しよう、という目的であった。その後、昭和六一年（一九八六）に穂高カントリークラブの隣接地にあづみのカントリークラブもオープンした。同時に泉郷も開発され、堀金と境を接する烏川沿いに一大リゾート地が誕生した。泉郷にもホテルやペンションができ、これらの施設にも中房谷から温泉が引かれた。

こうした場所に遊びに訪れた人も勿論、地元の人々の憩いの場として常念いこいの広場（労



泉郷別荘地



常念いこいの広場

働者野外活動施設）が雇用促進事業として計画され建設が始まった。六・六の広い場所に、オールシーズン用人工スキー場、スーパースライダー、アスレチックなどの遊び場や、キャンプ場が計画された。自然を楽しみながら、健康の増進、人間性の回復、生活の充実を図る場とした事業は、雇用の促進をも促すものであった。現在、それらの施設は、スキー場には木が植えられアスレチックは使用不可となっている。その広場より下にある烏川溪谷緑地を人々は利用し、自然観察などができる空間として親しまれている。

（倉石あつ子）



大王わさび農場わさび畠とわさびの腰かけ

水辺の観光地

穂高町のあちこちに湧く湧水を利用して、わさびの栽培があちこちで行われている。夏場は黒い寒冷紗で日除けがされており、冬になると寒冷紗は巻き上げられている。穂高のわさびは観光の一つの目玉ともなっており、各所に「わさび漬け」の看板を目にすることができる。店によっては「にじます甘露煮」などとセットになっている場合も多い。

大王農場はそうした「わさび」を売りにする観光施設の代表的な場所である。一五畝の広さ、一日一二万本の湧水に支えられた広大なわさび畠を所有する。観光客は園内を歩くことはもちろん、わさび漬けの体験教室などを楽しむこともできるし、わさびを利用したさまざまな食べ物を楽しむこともできる。

園内にはわさび畠の他、万水川と蓼川が合流する場所があり、観ることもできる。自然観察ができる貴重な場所でもある。

また、双体道祖神を数体移転しており、安曇野を代表する道祖神の姿を楽しむこともできる。もちろん、道祖神は観光のために移転されたものであり、信仰施設としての意

味をもつてはいない。近くにはNHK朝ドラ「水色の時」に登場した水色の時道祖神も見ることができ、小公園になっており、大王農場から見る北アルプスとはまた異なるアルプスを見ることができる。

水辺の楽しみ

大王農場付近は先に述べたように水量の豊富な川にめぐまれ、近年は川辺を歩くとともに、ラフティングやカヤックのスポーツをする人々にも愛されている。万水川の川端に立つて西の方を眺めれば、常念岳を中心に雄大な北アルプスが広がる。春先は桜の花や菜の花など色とりどりの花が田んぼの土手などに植えられ、四季それぞれに変化を楽しむことができる。



万水川と蓼川 黒澤明「夢」の撮影地でもある

蓼川と合流した万水川は、水を満々とたたえ、やがて犀川と合流して、遠く信濃川へと繋がっている。万水川カヤックツーリングは、大王農場から明科の龍門湊公園までがオーソドックスなコースのようで、夏季の観光客に人気のスポーツである。ラフティングも人気で、自分たちで漕ぎ上ったり、下りは流れに身を任せて周囲の景色などを楽しむ。蓼川と万水川の水の色の違い、流れの速さの違い、植生の違い、水生生物なども楽しむことができる。

（倉石 あつ子）

学校立地は地域の一体性を図る指標

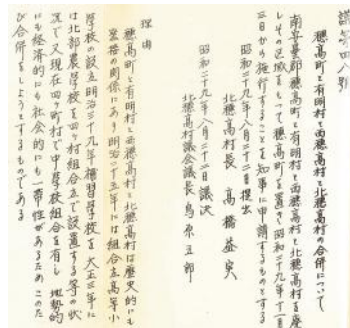
昭和二十九年（一九五四）旧穂高町、有明村、西穂高村、北穂高村の四町村が合併し、新穂高町が誕生する。その時の合併申請書に記載されている合併理由には「明治二五年には組合立高等小学校的設立明治三九年補習学校を大正三年には北部農学校を四ヶ村組合立で設置する等の状況で又現在四ヶ町村で中学校組合を有し」とある。全七行中四行が学校に関しての記述である。学校の立地が地域の一体性を示す大きな指標となっていることがわかる。

初等教育

図（一七四・一七五頁）を見て明らかのように、学制や学校令、町村の合併、分離と共に変遷した。

中等教育

戦後、昭和二二年（一九四七）に四町村がそれぞれ新制



「合併申請書」昭和29年12月9日



研成学校跡の標柱

中学校を開設した。有明村と北穂高村は苦しい財政の中、昭和二三年に校舎を新築した。新制中学校は小規模校が多く、教育的にも経済的にも課題が多く、統合中学校の気運が徐々に高まり、昭和二十九年（一九五四）穂高町外三ヶ村組合立穂高中学校が開校した。

高等教育

穂高商業高校は今年、令和三年に開校一〇七年を数える。大正三年（一九一四）七月、大正天皇御即位礼大礼の奉祝記念行事として長野県学校組合立南安北部農学校が開校した。設置者は東穂高村、有明村、北穂高村、西穂高村であ

る。前身は明治三九年（一九〇六）四月開校の東穂高村他二ヶ村（西穂高村、北穂高村）学校組合立東穂高農業補習学校であり、現在の穂高総合支所の位置に設置された。当時の近隣的高等学校としては、明治四三年（一九一〇）二月南安南部農蚕学校（跡地に松本市立梓川中学校）が開校。大正九年（一九二〇）四月南安曇農学校（現南安曇農業高等学校）が開校している。

開校当時のことを「開校七〇年を振り返る座談会」（昭和五九年）の中でこう語っている。

○学校ができて、中学校に進むには松本へ出なければならなかったので親は喜んだ。学校から帰ったら馬を飼ったり、田の水を見たり家の手伝いができた。

○校舎は高等小学校として使われていたもので、大部破損していた。

○組合立で役場の税金が集まらない時には、先生の給料が二、三ヶ月遅配になって困ったという話を聞いた。遠くからきて下宿をしていた先生は大変だった。

以下、設置者や校名の変更等沿革の概要を記す。尚、クラブ活動の実績については、個人は除く。

・昭和五年（一九三〇）五月 長野県南安北部農学校に改名。設置者に南穂高村と烏川村が加わる。

・昭和一九年（一九四四）二月 長野県穂高農業学校に改名。

・昭和二三年（一九四八）三月 新制高等学校として長野県穂高農業高等学校に改名。定時制川手分校（中川手村、上川手村、東川手村、五常村組合立）を新設する。

・昭和二三年八月 硬式野球部信越大会で優勝し、甲子園大会に出場。

・昭和二四年（一九四九）四月 長野県立校となる。

・昭和二五年（一九五〇）七月 長野県穂高高等学校に改名。校舎は現場所に移築移転する。

・昭和三二年（一九五七）から三五年、四三年 サッカー部全国大会に出場。

・昭和三七、三八年（一九六二、六三）男子バレーボール部全国大会出場。

・昭和四六年（一九七二）四月 長野県穂高商業高等学校に改名。

・昭和五一年（一九七六）第一回穂商デパート開催 平成一四年（二〇〇二）より穂商マーケット（平沢重人）

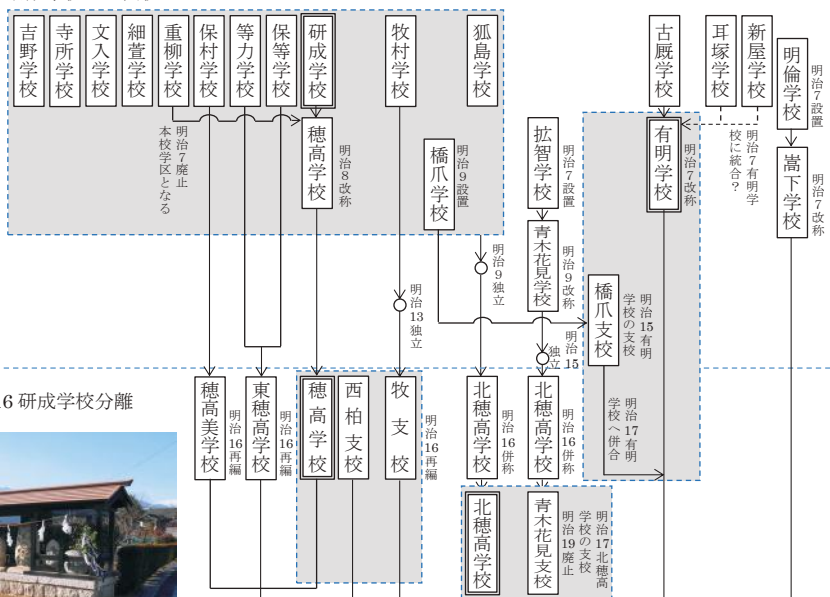


長野県穂高高等学校 昭和34年

穂高地域の小中学校の変遷

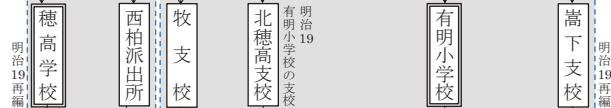
明治 5 学制發布

明治6 研成学校ほか開校

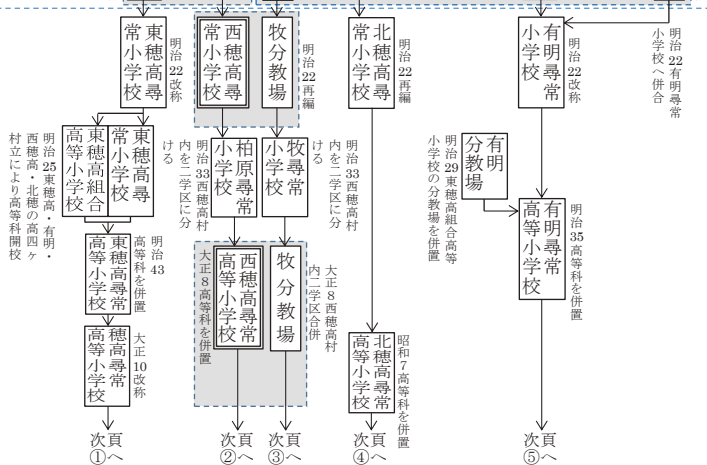


旧弘智学校・青木花見学校跡（青木花見）



明治 19 小学校令改正

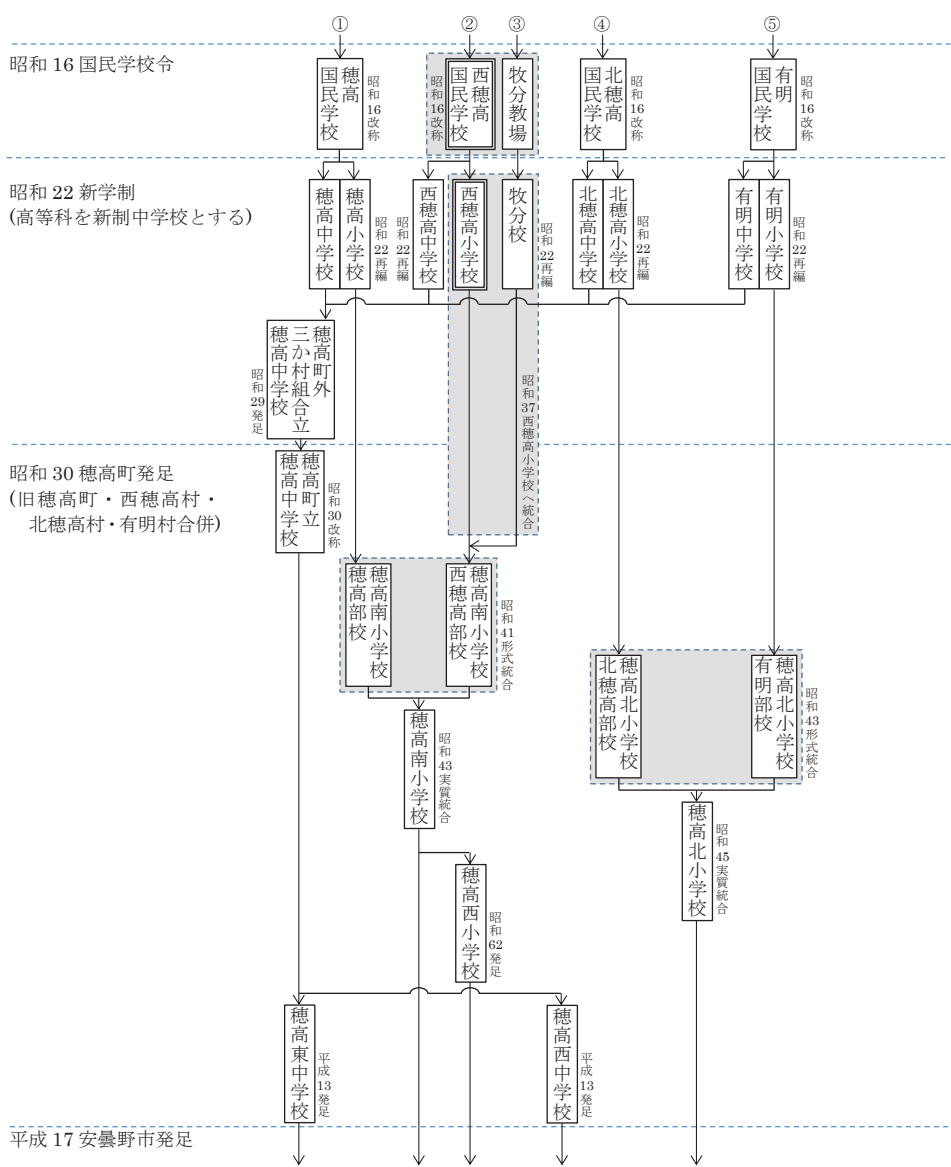


明治 22 町村制施行
学区改正
(一村一校制)



有明尋常高等小学校跡（新屋）

本図は『徳高町誌 歴史編下』（1991 年）を参考にまとめた。
本校と支校または分校・分教場など、所属の同じ学校については  で括った。この中の本校は  で示している。



牧分教場跡（牧）

1 安曇野穂高への道のり

江戸時代の村から近代の町村へ

江戸時代、穂高地域には正保年間には一六、天保年間には二〇の村々があった。村々は中世以来の寺社との関係を維持しながら、用水堰の開削に伴う農地の拡大や、街道や河川を利用した交通・物流網の発展に伴い、豊かに発展していった。江戸時代が終わり、明治に入

ると新しい行政制度となり、行政上の区

画も変化していった。穂高地域には、明

治七年（一八七四）に、有明村・北穂高

村・西穂高村・東穂高村が誕生している。

有明村には立足村・古厩村・新屋村・耳

塚村・嵩下村・富田村・橋爪村が、北穂

高村には島新田村・青木花見村・狐島村

が、西穂高村には牧村・柏原村が、東穂

高村には貝梅村・保高町村・保高村・等々

力町村・等々力村・白金村・矢原村が合

併した。明治一四年（一八八一）に西穂

高村が柏原村と牧村に分村したが、明治

二二年（一八八九）には再び合併し、西

穂高村に戻った。その後、大正一〇年（一九二一）には東穂高村が穂高町と改称し、一町三村となった。

一町三村の紆余曲折

明治時代に誕生した行政村は必ずしも住民の意思が反映



「筑摩県第十大区絵図」（明治9年（1876））
西穂高村付近の拡大

されたものではなかったため、分村・合併の要望が出されていた。

最初に分村の動きがあったのは、西穂高村であった。西穂高村は柏原村と牧村が合併していたが、両村は烏川によって分断されていて、東穂高村の字上原が中間にあることを理由に分村を願っている。両村の様子は明治九年（一八七六）に作成された『筑摩県第十大区絵図』でも読み取れる。確かに柏原村と牧村の往来には、烏川を渡る必要があり、道も限られている。平野部の道の途中には上原地区があり、不便であったと考えられる。分村の願いは、明治一四年（一八八一）に認められ、西穂高村は柏原村と牧村に分村された。しかし、八年後の明治二二年には長野県からの要請により、再び西穂高村となっている。

明治二二年（一八八八）には南安曇郡長から北穂高村と有明村が合併するよう諮問があった。これに対し有明村では答申書を作成し反対している。答申書には、共有地に関する利益を有明村全体の公共に関する費用として運用してきたこと、三面を乳房川・烏川・中房川に囲まれ、道路や用水等の管理や利用を一体となり行ってきたこと、北穂高村との境にある乳房川は水害により崩落してしまいうため村内の往来が不便となることを挙げている。この答申書は郡役所に提出され、結果として北穂高村との合併は行われなかった。

大正一〇年（一九二一）には東穂高村が穂高町と改称している。東穂高村からは、江戸時代から宿場「町」として穂高町と呼ばれていたことや、商家が集まり南安曇郡北部の商業の中心地であり、「村」となっていることで不便をしていることが改称の理由として長野県へ提出された。長野県では申請を妥当として内務省に上申し、改称は許可された。

一町の「穂高町」に

昭和二八年（一九五三）、国の政策として町村合併推進法が公布された。この法律を契機として町村合併の動きが具体的に進められていくことになった。南安曇郡内で策定された合併試案では穂高町・有明村・西穂高村・北穂高村の一町三村の合併が提示されている。穂高町・北穂高村・西穂高村では町村議会内に合併研究会を設置し、合併について具体的な検討がされていた。一方、有明村では、村内から反対運動が起こった。有明村は当時すでに温泉を中心とした観光資源が豊富にあり、電力会社からの税収入などの財政的余裕があったため、村政の継続を望んでいた。村内には有明村合併反対期成同盟会が結成され、村長及び村会議長へ陳情書が提出された。有明村当局は各集落で懇談会を開催し、合併への理解に努めた。



当時、町村合併と時を同じくして、一町三村には組合立中学校設置の動きがあった。昭和二十一年（一九四六）、教育制度が刷新され、各町村では中学校を設置しなくては

穂高東中学校に保管されていた「学校新聞」（昭和29年（1954））

ならなくなつた。昭和二十一年（一九四八）四月に町村立中学校は開校したが、校舎の建設等を含め、財政負担は大きかった。穂高町を中心組合立中学校設置の動きは本格化し、先進地の視察を行った。昭和二十七年（一九五二）には穂高町外三ヶ村中学校組合が結成された。

この中学校設立の動きは、合



「合併特集号ありあけ」（昭和29年（1954））

併申請書にも「現在四ヶ村で中学校組合を有し 地勢的にも経済的にも社会的にも一帯性がある」と書かれている。教育現場の統合と、町村合併による地域の統合が同時に進められていた。中学校は昭和二十九年（一九五四）四月に、新しい穂高町は一月に誕生した。

三〇年を祝う

昭和五十九年（一九八四）には合併三〇周年記念事業が行われた。この時、町花「わさび」・町木「しゃくなげ」の決定や、町歌「わが穂高」の制定があった。歌詞は町民からの公募により、町歌制定委員会が作詞した。作曲は、「早春賦」の作曲者中田章の御子息で「めだかの学校」や「ちいさい秋みつけた」の中田喜直による。

五〇年を祝う

合併五〇周年を迎えた平成一六年（二〇〇四）は穂高町にとって重要な一年であった。六月六日には安曇野市への合併の是非を問う住民投票が行われ、賛成九一二九票、反対八七七五票（他に無効投票一四四票、持ち帰り一票）で、合併が反対を上回った。投票率は約六九割であった。穂高町ではこの結果を受けて合併への準備を進めていった。

一月三日には穂高町合併五〇周年記念式典が開催され、穂高南小学校金管バンドの演奏や、寄贈を受けた高橋節郎の「化石の森 開墾林」と「花」が披露された。

式典では平林町長が「安曇野穂高は多くの人の心の心より所であり、その景観や人情を後世の人たちに伝えていく努力を続けていきたい」とあいさつを述べた。合併の是非を問う住民投票を告知する広報ほたかの紙面にも「見わたせば、安曇野！ 考えよう穂高の未来！」という文字が並ぶ。安曇野市への合併は穂高地域の人々が、過去から引き継いだ安曇野穂高という財産を未来へ引き継ぐために選んだ結果であったことがわかる。

みんなが愛する安曇野の里づくり

～豊かな自然環境・景観と暮らしやすさを組み合わせるには～

「安曇野のゆたかな自然と景観を守り育て、
次の世代に伝えること」
…それは、すべての安曇野住民の強い願いです。

- ゆたかな自然環境と暮らしやすさを組み合わせる田園都市型の地域づくりを行う
- 地域住民に近い行政現場を大切にする行政システムをつくる
- 地域社会を住民活動によって活発にし、住民と行政が協働し、共に担う取組づくりを行う
- 安曇野の人の心を大切に、人と人の交流を大切にしたいゆたかな地域社会づくりを進める
（5町村の住民代表委員・42人の方々が、6ヶ月かけて練り上げた「新市将来構想」の基本方針です。）



今を生きる人、次代を担う子どもたちに夢のある未来をたくすため、自然環境と景観を守り、住みやすい地域づくり、元気な地域づくりをこれからも進めます。

見わたせば、安曇野！
考えよう穂高の未来！



「広報ほたか」No.375より（平成16年（2004）5月）

受け継がれる江戸時代の村と開発地

町村合併を経て、穂高町は現在の安曇野市穂高となった。しかし一方で、地域の行事や運営を支える自治会は、江戸時代の村から連綿と受け継がれている。地域の祭礼も自治会と同じ集落が基本となり行われているところが多い。『筑摩県第十大区絵図』に描かれていた村名と字名のうち、現在の自治会名となっているものは二〇ある。この二〇のほかに明治以降、新たな自治会となったのは小岩嶽区・柏矢町区・豊里区である。小岩嶽区は、江戸時代に青原寺・三輪神社の下に住んでいた嵩下村と新屋村の枝郷の人々が、明治時代以降に両村から離れ、一つの自治会となった。柏矢町区は、大正四年（一九一五）に開通した柏矢町停車場（現在の柏矢駅）を中心に町場が形成されていったことにより、一つの区として独立することとなった。豊里区は、太平洋戦争後、有明演習場の跡地を開墾して誕生した区である。

このように穂高地区は、江戸時代以来の地域のまとまりを重視しながら、近代化に対応した開発を行ってきた場所である。

（青木弥保）

明治九年『筑摩県第十大区絵図』記載の地名		現在の自治会
明治九年の村名	江戸時代の村名	
有明	立足	立足区
	古厩	古厩区
	耳塚	耳塚区
	新屋	新屋区
	嵩下	小岩嶽区
		嵩下区
		豊里区
北穂高	富田	富田区
	橋爪	橋爪区
	嶋新田	嶋新田区
東穂高	青木花見	青木花見区
	狐島	狐島区
	貝梅	等々力町区
	等々力町	
	保高町	穂高町区
	保高	穂高区
	等々力	等々力区
西穂高	白金	白金区
	矢原	矢原区
	柏原 (字名) 塚原 久保田 牧	柏矢町区
		柏原区
		塚原区
		久保田区
		牧区

○主な参考文献（五十音・年代順）

- 安曇野市豊科郷土博物館 2013『安曇野市豊科郷土博物館紀要 第一号』
生島足島神社 2016『国重要文化財生島足島神社文書 起請文にみる信玄武将』
上原良司被伝・西村忠彦代表『上原良司と〈いま〉を生きる活動報告書』わだつみのこえ70年の会
加藤碩一・佐藤岱生 1983『信濃池田地域の地質・地域地質研究報告（5万分の1地質図幅）』地質調査所
上條武 1984『孤高の道しるべ』銀河書房
北野進 1982『安曇と碓氷 鑄金神髓・山本安曇』
清沢洵展実行委員会 2010『清沢洵展 昭和史における慧眼の外交評論家』
倉石忠彦監修・安曇野市教育委員会編 2016『祭りが結ぶふるさとの絆 安曇野風土記Ⅱ』
小島烏水 1992初版 1993増刷『山岳紀行文集 日本アルプス』岩波書店
古関裕而 1997『鐘よ鳴り響け』日本図書センター
近藤信行 1978『小島烏水一山の風流使者伝』創文社
信濃教育会南安曇部会郷土調査委員会 1932『南安口碑伝説集』
信濃史料刊行会編集 1972『大塔物語』（『新編信濃史料叢書 第二巻』所収）
市立大町山岳博物館 2007『北アルプス 山人たちの系譜—嘉門次、品右衛門、喜作 登場の背景—』市立大町山岳博物館
市立大町山岳博物館 2008「山と博物館」第53巻第7号
市立大町山岳博物館 2008「山と博物館」第53巻第8号
市立大町山岳博物館 2014『山と人 北アルプスと人のかかわり』市立大町山岳博物館
市立大町山岳博物館 2020『博物学と登山—大正登山ブームと信州理科教育のさきがけ—』市立大町山岳博物館
十返舎一九 1814『続膝栗毛 第八編』
信州大学振動調査グループ 2020『安曇野市の地盤と地震動に関する調査報告書』安曇野市
鈴木重武・三井弘篤編述 1996『信府統記』国書刊行会
相馬愛蔵・黒光 1980『相馬愛蔵・黒光著作集1』郷土出版社
武井敏 2019『荻原守衛の女』
都倉武之・亀岡敦子・横山寛編 2019『長野県安曇野市上原ヶ資料Ⅰ 戦没した慶応義塾出身の三兄弟 上原良春・龍男・良司関係資料を中心に』慶応義塾福澤研究センター
中島博昭 1974『鋤鋤の民権 松澤求策の生涯』銀河書房
長野県豊科高等学校JRCクラブ・穂刈稔 2013『有明山に日かげさし 上原良司の遺した思い』上原良司の灯を守る会
長野市役所編 1974『長野市史』付図(大正14年版復刻本、明治文献発行)
原山智・大塚勉・酒井潤一・小坂共栄・駒澤正夫2009『松本地域の地質・地域地質研究報告（5万分の1地質図幅）』産総研地質調査総合センター
原山智・竹内誠・中野俊・佐藤岱生・滝沢文教 1991『槍ヶ岳地域の地質・地域地質研究報告（5万分の1地質図幅）』地質調査所
東鶴賀町変遷史編纂委員会 2012『東鶴賀町変遷史』東鶴賀町
福留真紀 2018『名門水野家の復活 御曹司と婿養子が紡いだ100年』新潮社
富士吉田市史編さん室 1991『富士吉田市史資料叢書10 妙法寺記』富士吉田市教育委員会
穂刈貞雄 1990「北アルプス南部の石室」
穂刈三寿雄 1998『山恋い』穂刈貞雄
穂高中学校・穂高町教育会 2000『安曇野・人間教育の源流 孜々として、信州穂高の人脈』
穂高町誌編纂委員会 1991『穂高町誌 自然編』穂高町誌刊行会
穂高町誌編纂委員会 1991『穂高町誌 歴史編上・民俗編』穂高町誌刊行会
穂高町誌編纂委員会 1991『穂高町誌 歴史編下』穂高町誌刊行会
穂高町戦争体験を語りつぐ会 1987『穂高町の十五年戦争 町民がつづる戦争体験集』郷土出版社
堀金村誌編纂委員会 1992『堀金村誌 下巻 近現代・民俗編』
三田村佳子 2009『風流としてのオフネ』信濃毎日新聞社出版局
南安曇教育会 1981『井口喜源治と研成義塾』
南安曇教育会百年誌編集委員会 1988『南安曇教育会百年誌』南安曇教育会
南安曇郡公民館主事会 1960『南安曇郡公民館のあゆみ』南安曇郡公民館運営協議会
南安曇郡誌改訂編纂会 1968『南安曇郡誌 第二巻上』
南安曇郡誌改訂編纂会 1962『南安曇郡誌 第二巻下』
宮地直一 1949『穂高神社史』
山崎安治 1969初版 1970増刷『日本登山史』白水社
山本茂実 1971初版 1979増刷『喜作新道—ある北アルプス哀史—』朝日新聞社
山本亮太・梅干野成央 2018「北アルプスの石室遺構とその構造」『建築歴史・意匠』日本建築学会
吉田博 1931『高山の美を語る』実業之日本社
碓氷美術館 2015『荻原守衛書簡集』
碓氷美術館 2018『荻原守衛日記・論説集』

謝辞

本書の発行にあたり、信州大学工学部准教授 梅干野成央様、雷鳥写真家 高橋広平様に寄稿ならびに写真・図版のご提供をいただきました。厚く御礼を申し上げます。

協力者一覧（敬称略、五十音順）

安曇野市教育会、あづみ野バザール若松屋、井口喜源治記念館、臼居直之、臼井ひろみ、上原幸一、小椋緑、傘木靖、鐘の鳴る丘を歌う会、白鳥章、関悟志、市立大町山岳博物館、早春賦愛唱会、曾根原希素子、宗徳寺、相馬和揮衛、高橋千笑、田多井智恵、田中社寺株式会社、田原佳世子、東光寺、中田光男、長野県山岳総合センター、長野県立歴史館、長野市公文書館、中房温泉株式会社、西牧尚人、西山紀子、二反田武治、場々洋介、原口忍、二木浩、二木典子、古幡開太郎、穂高神社、松田行雄、松本城管理事務所、松本市立博物館、丸山鯉屋、満願寺、宮下智美、望月裕子、碌山美術館、SWEET 安曇野

執筆者（五十音順）

青木 弥保（安曇野市教育委員会教育部文化課博物館係）
倉石あつ子（安曇野市豊科郷土博物館職員）
財津 達弥（安曇野市教育委員会教育部文化課博物館係長）
高橋 広平（雷鳥写真家）
高山 裕司（安曇野市市民生活部環境課環境政策係）
土屋 和章（安曇野市教育委員会教育部文化課文化財保護係）
那須野雅好（安曇野市教育委員会教育部文化課博物館係）
原 明芳（安曇野市豊科郷土博物館長）
平沢 重人（安曇野市文書館長）
逸見 大悟（安曇野市教育委員会教育部文化課博物館係）
梅干野成央（信州大学工学部准教授）
松田 貴子（安曇野市豊科郷土博物館学芸員）
三澤 新弥（安曇野市教育委員会教育部文化課文化振興担当係長）
水谷 優美（安曇野市教育委員会教育部文化課文化振興担当）
宮本 尚子（安曇野市豊科郷土博物館学芸員）
山下 泰永（安曇野市教育委員会教育部文化課長）
横山 幸子（安曇野市教育委員会教育部文化課文化財保護係）

本書に掲載された写真及び図版の無断転載を禁じます。

『穂高の宝』

令和3年（2021）3月31日 発行

編集 安曇野市の歴史文化遺産再発見事業実行委員会

発行 安曇野市の歴史文化遺産再発見事業実行委員会
（中核館：安曇野市豊科郷土博物館）

〒399-8205 長野県安曇野市豊科4289番地8 TEL 0263-72-5672

印刷 株式会社総合印刷